

# 小倉情景

桜田靖

※ 本作品は、先年に西日本新聞社から刊行した小説「幻の川」の続編であり、その後の主人公桜井修の半生を描きました。登場人物のほとんどは仮名ですが、一部支障のない方々には実名を使用しています。

## プ ロ ロ ー グ

桜井修を描いた小説「幻の川」は大学一年生の冬休み、彼が佐賀へ帰省するところで終わった。とっくに家庭教師をした花村家も四国へ去り、満里子姉さんの行方も真っ暗闇の中、アルバイト先の岩松屋も店主の非業の死で閉店とあっては日明の町に住む気にもならず、修は当座の金を取り崩して北方新町の民家に

間借りした。

アルバイト先として、それまで間借りしていた母の従弟の長池さんが船場町の履物問屋を紹介してくれた。聞くと、老店主は父母の仲人だった人で赤の他人ではなかった。日明に替わって船場町が、生涯に渡って密着する運命が待っているとは、まだ想像もつかないことだった。

今、年を経て、体の衰えとみに覚え、夢枕に浮かぶのは、かつての変哲もない小倉の情景だ。徒然に町角に佇み、夕くれないの路上に長い影を歩ませる人達を眺めている。

— おお、ようこそ。久しぶりですね。

よく知っている顔ぶれも多い。

— こんばんは

みんな命たそがれ気力が失せたのか、誰もかまってくれない。やがて、あたり一面スミレ色に暮れなずみ、みんな黙々と宵闇に向って行く。いずれ夜の帷の下にすっぽりと隠れてしまうのか。人間とは夜の闇よりも底知れ

ぬ深い暗がり、心の深奥に蔵匿して生きねばならないのか。そぞろ枕を濡らしている。

— 妙な戸籍謄本の文言

— 昭和〇〇年〇月〇〇日、福岡県小倉市船場町〇〇番地で出生、同年四月拾参日母届出、同月拾七日同市長代理助役〇〇〇〇送付、同日小倉市長受理—

自分の戸籍謄本の冒頭の文言を、子供心に何か面妖なものを感じながら育った。

「エッ、マジ！これって何のことだよ？」

現代っ子なら親に問い質すに違いない。不自然な「出生届」受理、窓口職員之苦虫を嘔み潰したような顔付きが文面に滲み出ている。

「実はね、あなたの本当の誕生日は四月十日よ。祖父ちゃんが一年早く学校に上げないと勿体ないってね。三月生まれにしてもらったのよ」と母は唐突に真相を教えてくれた時、修は中学生になっていた。

— 四月十日に出産した母が、十三日にみずから市役所に出向くはずもなかろう。仲介し

た助役は父母の仲人だった。とにかく初孫の  
誉れで可愛がられたが、幼年時の一年の誤魔  
化しのツケは厳しかった。修は体も小さく知  
能の発達も遅れ、どうして先生から叱られる  
のか理由さえ理解不能だった。桜井一家は別  
府から祖父の出身地の佐賀県へ引っ越してい  
た。

「居残りしなさい！」

「廊下に立ってなさい」

「あんたみたいな悪い子にはあげません」と  
クラス全員に饅頭一個ずつの配給があった時  
は、何の悪さをしたのか訳も分からず、修一  
人だけがもらえなかった。

「饅頭ば、くんしゃい」と涙声で先生にみっ  
ともないお頂戴の右手を差し出し、みんなの  
嘲りの笑いを受ける始末だった。通信簿は  
「劣る」と「やや劣る」のオンパレードだっ  
たが、親から叱られた覚えはない。

二 金の成る木

修の人生の記憶の出発点は、大分県別府市

郊外の野原で飼いうさぎの餌にする、手折ったら乳液みたいな白い汁の出る青草を摘んでいた動画に始まる。

「こんな白いお乳の出る草を筆るんだよ」と母の兄の謙二さんに教えられた。

母方の祖父永松卯三は、小倉で有数の大店の羊羹製造卸し業者だった。創業は明治三十年代末だと聞いた。北方の兵営に兵糧の加給品『櫻羊羹』を納入し、大層な羽振りだった。

「どうしてそんなに贅沢ができるの？」

「おうちに金の成る木が植えてあるのよ」

着飾ったお姫様育ちの母は、女学校の仲間にも冗談だが、自慢げに答えたという。

祖父は佐賀県名物『小城羊羹』の本場に生まれた。近所に山田羊羹屋があり、遊び疲れたら職人さんがエッチラ、オッチラと棒を回して羊羹を練り上げるのを、飽かずに見物して過ごした。いつしか門前の小僧の経みみたいに羊羹作りを習得していた。

少年の日に門司に出たという。かつて『櫻

羊羹』とは小城羊羹の別称だった。表面が砂糖の結晶でコーティングされ、中身は柔らかい練り羊羹だ。兵隊経験者の投稿を新聞の読者欄で読んだことがある。

一戦時の兵舎で食べた、薄板で包まれジャリッと歯触りのあった羊羹と、桜花一枝が描かれた櫻羊羹のレッテルが懐かしい。これは祖父が小倉の船場町で作っていた羊羹に間違いない。どうして最初は門司だったかは、大陸と交易の地であり、商売に向いていると判断したからだと聞いた。だが、門司で羊羹の行商をしても張り合いがなかったという。

「兄ちゃん、石鹼売りに来たのかね？」

やはり、商売をするなら商都小倉が一番だった。城下町には和菓子文化があり、羊羹屋の商売が大当たりした。船場町の羊羹屋の店舗兼住居は工場も兼ねており、寒天と砂糖と餡子を練りあげる若い男衆の心意気と、店先で羊羹にレッテルを巻く若い女衆の色香がムンムン蒸れ返り、日がな一日職人さん達がペ

チャクチャお喋りに明け暮れていた、と子供時代を母が語ってくれた。

「♪帰らぬ十二の雄々しき『目玉』って、ラジオで歌っていたっちゃ。だから犠牲になった子供の数は六人っちゃ！」

「あんだ、頭が変っちゃ！ボートに十二人乗っていたっち、ラジオが言ったやろ。目玉じゃったら、二十四あるやろ」と女工さん達が滅茶苦茶に言い合いをした。

「バカタレ！それは雄々しき御魂だ！十二人の子供が死んだんだ」と店の大将の卯三さんが一喝したそうだ。

— 明治四十三年に鎌倉の海で起きた逗子開成中学生十二名が死亡のヨット遭難事故やその葬儀で鎌倉女学校の生徒が紅涙を絞って歌った『七里ヶ浜の哀歌』が広く九州の地の世間に知れ渡ったのは、ラジオ放送が普及してからのこと。小倉にラジオ局が開設されたのは昭和六年のこと、母が十代半ばの頃だった。軍靴の響きも高まる頃で、兵糧として

『櫻羊羹』の需要も高まり、商売は多忙を極めていただろう。

母の自慢話は船場の氏神様のお祭りだった。船場町の大黒神社の祭りでは、お神輿が店舗の中まで入って来て囃し立て、それは大層な喧騒だったそうだ。

祖父の氏名『永松卯三』は、今も北方線旧電車通りにある大鳥居に刻されている。寄進の金額がとほど厩大だった証左でもある。やがて、戦争が一気に運命を変転させた。祖父は蓮根を食うという言葉のように、先を見通す能力に人一倍長けていた。

— 小倉には陸軍の師団、北九州は八幡製鉄所など軍需工場地帯、ここは間違いなく米軍の激烈な大空襲に遭うだろう。祖父は察知した。金はしこたま儲けたし、危殆に瀕した小倉の街をサッサと脱出し、戦火の憂慮のない別府温泉へと生計の地を移した。船場町の土地・家屋は、佐賀県人同士の誼で親交のあった履物問屋の店主にして小倉市助役（小倉市

議 会 議 員 ) に す べ て 売 却 し た 。

「 永 松 卯 三 君 ! 万 歳 ! 万 歳 ! 万 歳 ! 」

別 府 へ 引 越 日 の こ と 、 船 場 の 町 内 の 人 々 の  
見 送 り を 受 け て 、 助 役 の ま る で 出 征 兵 士 を 送  
る よ う な 万 歳 三 唱 の 声 に 、 顔 か ら 火 が 吹 き 出  
る ほ ど 恥 ず か し い 思 い だ っ た 、 と 母 は 述 懐 し  
た 。 ヨ チ ヨ チ 歩 き の 修 も い た は ず だ が 全 く 記  
憶 に な い 。

父 は 陸 軍 軍 属 で 、 当 初 は 旧 満 州 と ソ 連 の 国  
境 の 地 で ト 一 チ カ の 造 営 に 当 た り 、 や が て 内  
地 軍 役 と な り 千 葉 県 九 十 九 里 浜 の 飯 岡 で 、 本  
土 防 衛 の た め の 塹 壕 掘 り の 日 々 だ っ た 。

一 昭 和 二 十 年 八 月 九 日 、 原 爆 搭 載 の 米 軍 機  
は 、 最 初 は 小 倉 上 空 に 飛 来 し 、 そ の 雲 海 の 厚  
さ ゆ え に 機 首 を 南 西 に 旋 回 し た 。 長 崎 の 真 青  
な 夏 空 に 悪 魔 の 閃 光 が 轟 き 、 地 上 は 阿 鼻 叫 喚  
の 焦 熱 地 獄 と 化 し た の だ 。 小 倉 の 人 々 が 危 機  
一 髪 、 命 拾 い し た と 悟 っ た の は 時 代 が ず っ と  
下 っ て か ら だ ろ う 。

三 母 子 の 生 家

昭和三十七年の一月下旬、佐賀から出て来た母に連れられて船場町の履物問屋を訪問した。

「長池さんは、ほんに良かところに気が付くんしゃった。父ちゃんと母ちゃんの仲人ばしてくんさった人よ。昔、祖父ちゃんが船場の家ば売ってやった時の小倉の助役さんやった人よ」

「今は下駄屋さんね！」

「昔は下駄だけやった。今は靴もサンダルも扱う履物問屋さんよ。父ちゃんも、小倉のボスで絶対に損はせんから、お世話になっておけって喜んだよ。毎月一万円もくんさあてよ。

良か話やろう」と母は満足気だった。当時、一万円とは大層な大金だった。私の知らないところで、バイトの話は勝手に進んでいた。

「父ちゃんの測量の仕事もぼちぼちと増えて来てね。そのうち不自由せんごと仕送りしてやるけん、もうちよっと頑張ってくれんねって、父ちゃんが言うとったよ」

父は事務所を持たないが、建築士と土地家屋調査士の資格を持っていた。それにしても、毎月一万円もらえるなら確かに有り難い。一万円もあれば、学生一人が一月暮らす分に十分な金額だった。学食の定食が三十五円、うどんなら二十円で食べた。

「一万円札って、聖徳太子の絵やろ。あんまり見たことなかね」

一万円もらえると聞いて、修も心を動かされた。人間って浅ましく現金なものだ。

—そこは母と修の生家でもあり、先の戦時末期に別府へ去って以来の再訪だった。幼児だった修の頭に生家の記憶の欠片も無くて、初めて訪ねるのも同然だった。

「祖父ちゃんが、あのまんま小倉におったら、こげな苦勞ばせんかったとにね…」

母は道すがらぼやいた。当時の駅舎は今の室町付近だったと懐かしそうだった。

履物問屋の主は、佐賀県の巖木（きゅうらぎ＝現在は唐津市）という四方を山並に囲ま

れた小さな炭鉱町の出身だった。巖木は六世紀半ば、松浦佐用姫が、唐津の山上から肩掛けの薄物を、新羅征伐に出征する恋焦がれる若武者の乗る大和朝廷の軍団に向けて船が波間に消えるまで振り続け、悲しみのあまり石に化したという、哀切な伝説のお姫様の恋人大伴狭手彦の生地とされる。

「山ん中の巖木の出で、大阪で修行したあと小倉に来て履物問屋で儲けだし、市会議員もやって、ほんに羽振りの良か人やからねえ」と母は嬉しそうだった。それはさておき、佐賀ん者同士が同じ船場町に住み、かたや大店の羊羹屋、こなた市会議員を兼ねて履物問屋の店主という間柄で、すぐに知己の仲となった。娘が年頃になった卯三祖父さんは、かねてより見合相手を、この同郷の朋友に頼み、小倉師団に軍属として配属されていた父が紹介されたのだった。

#### 四 産湯の井戸水

修は、父母の仲人の誼で船場町の履物問屋

でバイト稼ぎすることになった。店は問屋だからほとんど店頭売りはない。

「あなたもここで生まれたのよ」

母は戦時中に一家で去って以来、久方振りに訪ねた自分の生家を懐かしそうに見回した。ちょうど妙齢のキラキラと瞳の輝く聡明そうな婦人が奥から出て来た。

「お嬢さんさんでしょ！」と母が懐かしそうに声をかけたが、その方は笑顔で、「はい」と返事をしたきり二の句はなかった。戦時中、母は二十代半ば、まだほんの子供だったその人が、いきなり見知らぬ小母さんから、親しく声を掛けられても、言葉の継ぎようもなかっただろう。

「わたし、遅くに生まれた子なんですよ」が口癖の人だった。子宝になかなか恵まれなかった店主夫妻が、もう子作りをあきらめかけた頃にやっと生まれた一人娘で、すでに婿養子を迎え一男一女のママさんだった。

一生家は京風の町屋造りだった。玄関から

奥へと細く通り庭になっていて、間口は狭いがうなぎの寝床と称されるように奥に深く、中途は明り取りに透明な合成樹脂の屋根を葺いた土間で、小さな植え込み、台所・物干し場・風呂場が配置してあった。土間は、卯三祖父さんの時代は坪庭だったそうだ。

「あんたが産湯を使った水だよ」

店主がそばの井戸の手押しポンプの柄を漕いだら、ジャージャーと清水が鑄物の丸い口からこぼれ出た。もちろん水道はあるが、昔のままの井戸が小倉の都心にあるのに驚いて黙っていた。今でも顔を洗うのに使っているそうだった。

すぐに畳の間に座らされた。七十三という店主は短軀だが恰幅があり、皮膚の張りも血色も良かった。

「囲碁の仲間が百働会を作っているよ。百まで働くんだよ」と顔に笑みがあったが細目の眼光は鋭かった。戦前の小倉市議時代の「正論を吐く」の煩型の容貌に磨きがかかっている

た。

「うちは丸和と取引を始めるのでね。これから忙しくなるところで助かったよ」

巖つい相好を崩された。丸和は北九州一番のスーパーマーケットだった。店主は自民党員であり、小倉支部幹事長の要職にあった。気がついたら奥様も同席していて、隙をみて口を挟んだ。

「家系図なんかを調べたら、主人の先祖の墓が遠い長野県の松本にあったのですよ。何年か前に二人で先祖のお墓参りをして来ましたよ」

松本市の中心街は「深志」という地名で、戦国時代の深志城主が家の始祖に当たると説明してくれた。信州の末裔が佐賀の巖木にいたのだ。古い時代には、相当な数の関東の豪族が九州の地に移封されていた。巖木の人の先祖が長野県人で何の不思議もない。奥様は佐賀市の生まれで父親は牟田口という偉い軍人さんだったと母から聞いていた。主人は話

の腰を折られて慄然としたが、気を取り直して話を続けた。さっきから畏まっている修の緊張をほぐそうとしたのか、

「難しかことなんか何もなかくさ。時々丸和さい顔ば出して、運動靴の『文数切れ』ば調べて来っだけでよかくさ。勉強の片手間に出きるたいね」とくだけて佐賀の里言葉に変わった。

――文は二、四cm、十文半とか十一文など履物の寸法の旧式呼称は、すでに二十五cmとか二十五、五cmとかのメートル法のサイズの呼称に切り替わっていた。要するに運動靴の棚から売れて定数の減ったサイズの数を調べて追加補充すれば良いのだった。運動靴なんて消耗品であり、その消費に途切れはなく、小倉一のスーパーでは、売れ行き数も半端じゃなかろう。自民党小倉支部長の丸和の吉田社長の縁故で取引を獲得したのだろう。とにかく全てを了解した。

母が懐かしいから付近をぶらつきたいと言っ

た。

「あれから何十年も経ったとに、船場の町は昔とあんまり変わったらんね」と一軒一軒見渡すように歩んでいた。その足で紫川沿いの三角地帯まで連れて行かれた。掘立小屋同然の汚い公衆トイレがあった。向かいの家屋は『川野商店』の看板を掛けていたが商品の陳列はなかった。

「川野さんは昔からある折箱屋さんよ」と母が語ってくれた。紫川に注ぎ入る神岳川の畔の『段谷産業』の大きな看板を吹き飛ばすように寒風が荒れ狂っていた。

## 五 青春雑記帳

翌日、砂津の西鉄営業所まで歩き、バイト用に定期券を求めた。魚町・北方間の申し込みを即座に拒否された。

「この履物問屋、わたしよく知っていますよ。あそこからは旦過橋が一番近いじゃないですか！」

緑色の制服の窓口の女子事務員は意地悪そ

うな目付きで自信満々に断定すると、旦過橋・北方間の定期券を交付した。船場の通りから電車道に出ると、明治屋と柏野商店の角から左手の眼と鼻の先に魚町電停が見えるのに理不尽なことをするものだ、と修は思い出しても胸糞が悪い。しかし、「親父さんって、小倉の有名ななんだ」と驚き、黙って定期券を受け取った。丸和との商談がまとまるまで、私は若奥さんに代わって帳簿の事務を執った。二、三時間もあれば済む仕事だった。住込み店員に八木さんがいた。私より年長に見え、いつも頭髪をポマードでカッチリと決め付けていた。

一 筑豊鞍手の出身、寡黙で無愛想だった。喋っても口籠もった低い声で聞き取れず、必要に迫られ最小限度の会話のみした。店主を面と向かって何と呼んだか知らないが、私との間柄では親父さん、その夫人を大きな奥さん、跡取りの婿さんを迎えた娘さんを若奥さんと呼んでいた。若奥さんは三十過ぎで、す

でに第三子を懐妊していた。小倉のママさんコーラスのメンバーでアルトの声の美しい人だった。

「俺は小説なんか読まないな。興味あるのは事件のことだけだよ。本当に起こった現実のことだから、その方がずっと面白いよ」と八木さんが話しかけて来たことがあった。

一彼は休み時間に畳に寝そべって、よくヌード写真や事件記事満載の大衆週刊誌をめくっていた。若奥さんの机の本棚に雑多な書籍が詰まっていた。その端っこに一冊の古色蒼然たるノートを見つけた。女学校卒業間際の交換ノートの類で、級友らが様々な在学中の交友のエピソードを鉛筆書きしていた。

「うちの娘は女学校を首席で卒業した」と店主はよく自慢した。興味津々に盗み読みしていたら、『長い脚で駈けて、校内マラソン大会で優勝した』と誉め讃えた文章もあり、若奥さんが文武両道の才媛だと知った。一度、その長いおみ足を間近で拝ませてもらった。

とにかくチャキチャキと動く人で、そばの日活ホテルで女学校の同窓会が催された日のこと、開会ギリギリまで台所の片付仕事をするや、修の存在なんか眼中になく、部屋の隅っこで普段着をパッと脱ぎ捨て、ストッキングを履き替えられた。

白いスリッパが捲れて、チラッと一瞬長い素脚が露わになった。私の不躡な視線が仰天する瞬間に、もう盛装に変身されていた。ただただ息を殺してその美白の肌合いを横着に瞼の裏に焼きつけた。休み時間に若奥さんの思い出のノートを遠慮がちに読み進んでいたある日、背後から、

「それ、読んじゃ嫌よ！」とアルトの声が修の耳をくすぐった。いつの間にか傍にいて、彼はギョッと魂消て椅子から転げ落ちそうになった。だが、決して怒った顔でなく、黒い瞳がキラキラ光って、お姉さんのような親しみを覚えた。

後日のこと、修が常時カバンに入れて持ち

歩いてきた習作、四百字詰原稿用紙に書き綴り、名付けて『青春雑記帳』なる題名の抒情詩集の束を、仕舞い忘れて若奥さんの机の上に放り出していたら、いつの間にか若奥さんが見つけて階段の途中にしゃがみ込んで、文字に食い入るように読み耽っている光景に出くわした。

「これでもう、おあいこじゃないか」と思うと胸の仕えが降りた。今となっては、その時の原稿用紙は反古紙となつて紛失しているが、運良く数枚が書斎の引き出しの奥底に眠っていた。学校で文芸仲間に見せたら、何処かで見たとような文句ばかりだ、と酷評されたしろものだ。

一片思い、忍ぶ恋、恋愛は一人でもできる。空想の世界で、恋い慕う相手は誰だったのか思い当たらない。若き日の修、笑止の腰折れの一作だが懐かしい。

#### 別離曲

晩春の光の中に

柔らかな若葉を広げた楓のこずえが優しい影  
を濡れた地面に投げかけていた

一人して聞いていると 櫛（はぜ）の木陰を流  
れゆく小川のせせらぎも水車小屋の彼方の森  
影の鳥声さえも

明日は遙かに離れるあなたを想えば 空虚な  
響きでしかなかった

遠くの方で 青い岡の辺と紺青の空とがあい  
重なってその地平線の下にあなたの白い  
邸第が光っていた

何時の日かあなたに会いたい 昨日の風のよ  
うに永遠にあなたを忘却してしまいたい 二  
つの心の錯乱のなかで現身は空しく呼吸する  
だけだった

山河の春光も離愁を秘めて流浪する私の魂に  
は翳っていた

六 秘布

産湯の井戸の傍は炊事場だった。大きな奥  
さんと若奥さんがよく並んで食事の支度をし  
ていた。ある日、修が通りかかった拍子に耳

に入った母娘の会話が気になった。

「あなた、下着はこの物干し場じゃなくて、  
二階の軒先に干した方がいいよ」

「お母さん、大丈夫よ。下着ドロボーがこんな家の奥まで侵（はい）って来ないわ」

平素ここまで入るのは住込み人の八木さんと修の二人だけであり、聞き捨てならないことだった。しばらく経ったある氷雨の日、修は主人からゴム鼻緒の下駄を降ろして履きなさいと言われ、家の最奥部にある薄暗い下駄置場に入った。鼻緒をすげてない男物女物各種の下駄が山積みになっていた。ゴム緒付きの下駄を探したがなかなか見つからない。

「あなたは何をやってもスロースローだね」

皮肉を言われそうに焦った。奥の隅っこまで辿り着いて、ようやく見つけ出し安心したのも束の間、その場に埃塗れの白い布切れを見つけた。手にすると柔らかな感触でクシャクシャに丸まった薄地の布、広げてみなくても明白に婦人の大事なところを覆い隠す下穿

きで若奥さんの伸びやかな肢体が目には浮かんだ。男としての興味と困惑が交錯し、よっぽど広げてみたいと気持ちをそそられたが、「何をしていたのかね。遅いぞ！」と主人に叱られそうな気配を覚え、そのままその場に打ち棄てて戻った。

陰鬱な冬日が続いていた。婿さんは、行橋の電機会社に通勤するサラリーマンのため、平日はまだ真っ暗な午前六時前に家を出るそうだった。若奥さんも毎朝五時過ぎに早起きして朝食を用意し、夫を送り出すとは結構長い一日だろうと同情の念さえ湧いた。何があったのか知らないけど、大きな奥さんが大きな声で叱りつけて、若奥さんを泣かせていた光景も目にした。その頃、店主の不機嫌な日々が続いた。実は、丸和との運動靴取引の商談が破談になっていたのだった。自民党小倉支部長の吉田社長と同支部幹事長の店主との仲が不和になったのだろうか。

「副総裁の大野伴睦さんが、昨日田川旅館に

泊まっておられたそうじゃ。吉田は幹事長のわしに一言も知らせず、自分ら仲間だけでお相伴してとんでもないことだ！」と凄まじい怒り様だった。丸和との取引の破談で、修の居心地が甚だ悪くなった。何をする気にもならず、所在無く事務机の書棚の三国志全集の一冊を取り出して読んでいたら、主人は修のそばに来て、丸和社長への罵詈雑言の不満心頭だった。

## 七 野 営

靴の文数切れを、毎日ちょっと調べるだけで毎月一万円も頂けるという甘い夢は見事に散った。父母への義理を考えると、今ここから脱出するわけにもいかない。第一に、収入予定にしていた一万円を抜きにして、これから先の生活設計の目途が立たなかった。

店主は七十過ぎの高齢だったが、生来という地声に衰えはなかった。何しろ郷里の厳木町役場で、ある男性職員に職名・氏名を尋ね、相手が名乗る必要なんかないと木で鼻をくく

った対応をした際、

「キミには名前がないのか！」と一喝大音声で怒鳴り付け、その男が椅子から床にでんぐり返ったと自慢のステレオ・ラッパだった。そんなある日、八木さんが店を辞めた。お互い氏素性をろくに知らずとも、同じ屋根の下で少しは働いた間柄、何の前触れもなく平気で去っていく人の存在に人間関係の希薄さを実感した。

「次の小僧さんがすぐに来るから、それまで頼んだよ」と主人に言われた。

— えっ、自分も小僧なのか？ 嫌な言葉だ。主人にとって店舗は野戦場であり、大将たる自分は野営するのだと、いつも一人だけ店先の畳の間で就寝しているそうだった。

「二、三日前の晩だったか、明け方に男の怒鳴る声と、女が殴られて泣く声がしたんだ。その前なんか誰かが雨戸を持ち上げようとする気配もあったんだ」

歓楽街のそばの船場町は随分物騒な町だと

思った。主人の事務机の上に古ぼけた『戦陣訓』が常備してあり、牛乳ビンを傍らにお猪口でチビチビとミルクを飲みながら鼻眼鏡で、「うん、実に良いことが書いてある。やっぱり男は常在戦場だ。自分は日頃から泥水すすり草を食む覚悟で生きている。あんたもそのうちに目を通しておきなさい」と言われた。

大きな奥さんも若奥さんも大相撲のテレビ放映の大ファンだった。大鵬・柏戸の両横綱が全盛の柏鵬時代だった。三役力士登場の頃には、炊事も一旦中断し二人でテレビの前に陣取って、どの力士が鼻肩か知らないが一番一番食い入るように眺めて一喜一憂、喜んだり溜息をついたりしている光景も目にした。

「何ね、二人共！女のくせに相撲ばかり観て、早う晩飯の支度ばせんね」

主人は機嫌が悪いと叱り付けたが、奥さん達は馬耳東風と聞き流し動かなかった。若奥さんは、まだ小学校下級生だった息子が何か悪戯をして逃げると追っかけて行き、矢庭に

肩を掴むと足を絡ませて、

「ホレッ！」と気合をかけて軽く投げ転ばし、  
相当な相撲好きに見えた。一度夕食後の団欒  
に加わり、力道山対デストロイヤーのプロレ  
ス中継を一緒に観戦したことがある。若奥さ  
んは試合を見終って自室へ戻る際に、

「お相撲は面白いけど、プロレスって一寸厭  
らしいわね」と修に声を掛けた。デストロイ  
ヤーの足四の字固めに、何を連想したのだろ  
うか、修は黙って首を傾げた。

八千客万来

丸和との取引が雲散霧消して、修は命じら  
れるまま帳場で金銭出納簿などをつけた。家  
計簿に毛の生えた程度、各種伝票や領収書の  
類から金額を帳簿に転記すれば現金残高が出  
て、それが金庫の現金と一致すれば問題なか  
った。在庫の現金が一定額を超えたら、当座  
預金に預け入れるのも仕事、小切手の換金の  
仕方も教わった。問屋であり履物製造業者か  
らの仕入れは掛け、販売も掛けであり、小口

現金の扱い額はしれていた。

主人はとにかく多忙な人だった。

— 東京の浅草からはサンダル、滋賀県の長浜からは木履、大坂からは下駄の鼻緒やヘッ  
プというスリッパの類、神戸からはゴム草履  
やケミカルシューズ、広島の中からは長靴  
の業者など、引きも切らずにやって来た。

入れ替わり立ち替わり社長じきじき、或いはベテラン外交員が新製品のサンプルを並べ、  
売り込みにあの手この手で必死の様相だった。  
そんな業者さんが店の上がり框（かまち）  
に腰掛けると、大きな奥さんがすかさずお茶  
と季節の香のものを出して接待した。後は大  
きな算盤を出して主人と業者の仕入れ値の駆け引きだった。長浜の下駄製造所の社長はし  
ぶとい近江商人だった。

「琵琶湖の景色は四季折々よろしいけど、冬の息吹風は体に沁みますな」と主人が突っ込むと、

「ええ、そりゃ、もう身も心も凍りつきます

わ。懐まで寒うなったら敵いませんわ。それでも、下駄を仰山買おてもろたら冬の寒さは忘れましょ。うちは三方良ろしでっせ。売り手良し、買い手良し、世間良しで、皆が下駄を履いてくれるのが一番嬉しいですがね」と冗舌に粘った。色んな人の出入があった。自民党小倉支部幹事長の肩書きには、北九州のミニコミ政界新聞の記者が頻繁に訪れた。こちらの方は多分に招かれざる客のようだった。

一情報収集という表の面より、広告取りの裏の色合いが濃かった。主人と彼らの会話は自然に耳に入った。翌年の昭和三十八年には北九州五市合併で百万都市になることが決定していて、誰が市長に立候補するかの話で持ち切り。当時の林小倉市長は出馬に意欲満々のようだった。主人がいつ市役所に行ったのかは知らないが、市長に直に面会し、「北九州市長選挙に出馬は罷りならん」と伝えたと見直した。その年の二月のことだった。

ベルが鳴ったので身近にいた私が電話に出た。  
重々しい声音だった。

「カメ…ですが、支部長さん宅ですか？」

聞き返すのは失礼かと感じて主人を電話口  
に呼び、

「あのう、カメさんとか何とかと仰っています  
す」と送話口を手で押さえて告げた。主人は  
大層に丁重な対応の口振りだった。受話器を  
置くと、早速叱声を浴びた。「あんた、耳が  
悪いね。亀井光さんじゃないかね。労働次官  
まで上りつめた人で、今年の参議院選挙に出  
馬するんだよ。偉い人だから名前を覚えて失  
礼のないようにしてくれ」

選挙が公示になったら、夜遅くまで店に色  
んな支援者が出入りし口々に、「大変良いム  
ードになって来ましたよ。小倉駅の街頭演説  
の聴衆の雰囲気は絶好調ですよ。砂津から井  
筒屋前にかけて聴衆の声援は近来なかった凄  
いものでしたよ」などと笑顔で報告していた。

「この戦いは勢いがある。亀井さんは勝てる

よ。応援員がやる気を起こして勢いがついたら」と主人は晩酌の酔いの残った赤ら顔で上機嫌だった。氏は見事に当選され、後々には福岡県知事選にも当選された。当時の病気がちだった社会党の鶴崎多一知事を、

「鶴崎なんか早く死んでしまえ！」と頭から毛嫌いしていた主人も、その時はさぞ溜飲をさげたことだろう。

一時の総理大臣池田隼人がテレビ講演した時は、背広上下に着替え、頭髪をポマードで整え、テレビの前に正座して拝聴される根っからの党人だった。年に何度か知らないが、自民党の党員大会で東京へ出かけていた。夜行寝台列車は『隼』がお気に入りだった。

「東京に着いたら、そのまんま丸の内中央口から地下鉄に乗って、すぐ国会議事堂前で降りるから、人が多くても迷ったことはないよ」と吹聴していた。宿泊先はホテルでなく、長年の取引先の浅草のサンダル製造業者の社長宅だった。党員の永年表彰を受けて帰宅し

た翌日には、早速地元の政治新聞の男達が訪ねて来た。齒の浮くようなお世辞に、主人も上部だけは丁寧に應對していた。だが、彼らが一步店を出たら、

「政治をやっていると、あんなアブラムシが寄って来て困るよ」と洗面を見せた。表彰の記事を掲載する代わりに過分な広告代を支払ったのだろう。

九　きれいな番頭さん

八木さんの後釜は職安の紹介で、富山さんという三十面の人になった。余所の履物問屋で外交員の経験もあったそうで、主人は即戦力と喜んだ。顔を合わせると眉と眼に俠気を感じたが、

「富山です。宜しく！」と一応は温和な口振りに安心した。富山さんは最初のうちこそ物腰柔らかかく低姿勢に過ごしていたが、早々に得意先と昵懇になると、めきめき売り上げを伸ばし、徐々に自惚れ出して主人と衝突するようになった。

「大将！商売は営業第一ですよ。外務主任の名刺を刷りましたから、よろしいですよ。」

「外務主任は良いが、名刺はあんたが自分勝手に作ったから、店の金は出せんよ。」

「何ですって！わたしが店の繁盛のためにと思ってやったことですよ。事後承諾のどこがいけないのですか？」

「物事には順序があるんだ。三十面をして気が付かないのか」と主人の地声のボルテージが上がった。偶発的に身辺で起きた諍いだった。修は殊更に平静を装っていたが、内心どうしてよいか分からず、口論する二人をチラチラ眺めるしかなかった。

「まあ、爺ちゃん！名刺のお金くらい払ってあげなさいよ」と若奥さんが飛んできて、名刺代の領収書を受け取ると、テキパキみずから金庫から現金を取り出すとその場で渡して事態を収めた。それでも富山さんは顔を紅潮させて憤懣を残したまま、バイクの荷台に履物類や下駄の鼻緒を積み込んで、爆音を立て

て外交に出発した。

入れ違いに、

「お久しぶりね。小倉の娘のところに顔を出したのよ」と着物姿の老婦人が店に入って来た。

「いやあ、久しぶりだねえ。あなたの夢を見たばかりだよ」と主人は機嫌を直したかに見えた。佐賀の蔽木の小学校の同級生だった。

「この子は親戚と同然で、うちの番頭さんだよ。佐賀の出だよ」と私は出し抜けに紹介されて面食らった。

— いつの間に番頭になったのだろう。

「まあ、若くてきれいな番頭さんですね。わたしは佐賀県の小城から来たのですよ。今泉薬局というんですよ」と年に似合わない澄み切った発声をする人だった。修は気恥ずかしかった。

— きれいだなんて、男子に使う言葉でないだろう。日々、祇園祭のお稚児さんじゃあるまいし、労働と学業で難儀している男に似合

う言葉ではない。その後、今泉さんは小一時間も雑談をして帰った。

「この忙しい時に、あんな呑気な人が遊びに来て困るよ」と今泉のお婆さんが店から表に一歩出た途端、主人は渋い表情でぼそっと呟いて事務机に戻った。

#### 十 履物の商い

たいして仕事もしていないのに、約束だからと毎月一万円も給金を頂くのは正直言っても修の心神に堪えた。因みに、街中の食堂でラーメン一杯六十円の世相だった。

「お父さん、中津のお土産ですよ。世の中で一番淋しいのは仕事がないことだと書いてありますよ」と大きな奥さんが福沢諭吉の言葉を印刷したタオルを見せた。

「その通りだな。わしは百まで働くからな。今度の百働会の囲碁はいつだったかな」

「又、夜っぴて碁を打つんですか。人の夜遊びには文句をつけるけど、自分だって碁となったら、子供みたいに夜遊びに夢中なんだか

ら … 」

「 碁 打 ち だ っ て 、 男 の 仕 事 の う ち く さ ！ 」

四 っ 年 下 の 大 き な 奥 さ ん も 六 十 代 の 末 に な  
っ て い た が 、 ま だ 壮 健 で 口 も 達 者 だ っ た 。

一 世 の 中 で 一 番 淋 し い の は 仕 事 の な い こ と  
で す 、 は 修 の 身 に 沁 み た 。

こ の 合 名 会 社 の 履 物 問 屋 に は 、 支 店 と い う  
販 売 店 が 三 店 舗 あ っ た 。 以 前 い た 店 員 さ ん が  
暖 簾 分 け の よ う に 独 立 し て 店 を 持 っ て い た 。

一 これ ら 支 店 は 、 旦 過 市 場 、 北 方 市 場 、 宇  
佐 町 通 り に あ っ た 。 私 は 北 方 支 店 の 前 川 さ ん  
に つ い て 、 祖 父 の 永 松 卯 三 さ ん か ら 聞 い た こ  
と が あ っ た 。 卯 三 さ ん の 長 男 は 謙 二 さ ん 、 別  
府 の 市 街 地 で 独 立 し て 羊 糞 の 製 造 卸 し 業 を し  
て い た 。 そ の お 嫁 さ ん の 従 弟 に あ た る の が 前  
川 さ ん だ っ た 。

「 前 川 が 独 立 し て 店 を 持 っ た ん だ 。 学 校 出 て  
ブ ラ ブ ラ し て い た か ら 、 わ し が 頼 ん で 履 物 問  
屋 に 勤 め さ せ た ん だ 。 人 間 、 辛 抱 が 大 事 だ  
ぞ 」

一 前川さんは当初、別府に帰っては卯三さんに愚痴ばかりこぼしたそうだった。たかが雨戸の開け閉めに文句をつける。玄関の水撒きくらいで叱りつける。もう何遍辞めると言ったか覚えていない。人間若いうちはとにかく辛抱が肝心じゃと説教した甲斐があったな、と祖父はご機嫌だった。

新製品の靴やサンダル類、下駄の鼻緒の仕入れがあったら、富山さんが真っ先に支店に持参して注文を訊いた。修の仕事と言え、若奥さんが月々で作成した請求書を、支店を始めお得意先に配付して回ることだった。お得意先から注文のあった品物は、納品書を付けて富山さんが配達して回っていた。その場で現金払いの店はあまりなく、後日の現金持参か振込が多かった。

三支店以外の顧客は、折々に船場町の店に買い付けに来た。たまには小倉市役所の地下売店、北方の自衛隊駐屯地のPX（売店）の女性店主がサンダル類を買い付けに来た。P

Xの店主は中年婦人だった。畳の上に並べられたサンプルに、上がり口に膝をつき太腰を屈して這うような格好で、あれやこれやと品選びに執心だった。修は背後から、彼女の脚のストッキングのシームの線も艶かしく、ふくらはぎの肉付きに見惚れていた。

一日田英彦山線石原町の履物屋の奥さん、富野の履物屋の奥さん、神岳市場の履物店の奥さん、足立大畠の万屋の若い婦人、戸畑鞘ヶ谷の履物店の奥さん、八幡中央町の履物店の奥さん、若松の本町の履物店の奥さん、買い付けに来るのはほとんどが女性、履物店の旦那さんの方は髪結いの亭主みたいな存在に思えた。例外は、古船場の浜野さんという下駄屋の主で、鼻緒だけを現金買いして帰っていた。別格は、京町通りの老舗履物店『カクシン』で、ここだけには支店並みに新製品が入荷すると、真っ先にサンプルを持ち込んで注文を訊いていた。

小倉に住んで一年が過ぎた。春休みは帰省しなかった。花見もせずに働いた。自分が並みの学生生活を送られる身の上でないことは百も承知していた。

—この年も当然、小倉にも桜花は咲いたに違いないが、目にした記憶がない。桜の名所の勝山公園も近いのに妙なことだ。入学したての頃は、四年生の姿を凄いなあ、という敬意をもって眺めていた。自分がいざ二年生になってみたら、そのうち背中を押されるように四年生にもなるさ、と安堵感を持った。雲に隠れていた遙かな山岳が、一転俄かに晴れあがって、その姿を遠望している感覚に似ていた。この一年間の勉学の方は順調だった。授業では漢文学が一番印象に残った。元来、漢文が得手であり講義に退屈しなかった。担当の小林安司教授は教科書を用いず、副読本として井上靖の『天平の薨』を使った。鑑真和上を戒師として大和に連れ帰ろうと徒勞を繰り返す、遣唐使の普照ら若い僧侶の苦難

の物語を中国側の国情から講義されていた。  
遠い記憶になり、今となっては解せない小林  
先生の言葉が修の耳に残っている。

「イエスキリストがユダの裏切りに遭い、処  
刑された場所はエルサレムにあります。ゴル  
ゴタの丘でキリストは十字架に磔（はりつ  
け）になりました。イエスは叫びました。

『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と...」小  
林先生がこのエリ、エリ、レマ、サバクタニ  
...のイエスの絶望の叫びを何度も何度も繰り  
返されたことを記憶している。神様、神様、  
どうして私をお見捨てになっただのですか、と  
いうマタイ伝の一句が、何故に漢文学の講義  
の中に出て来たのだろうか。何の脈絡があっ  
たのだろうか。普照らの絶望の心境をキリス  
トの言葉で代弁されたのだろうか、修が迂闊  
に聴講していたせいで、今となっては確証が  
とれない。

「あなた、小林教授から習ったことがあるか  
ね？」と主人から唐突に訊かれた。修が漢文

学の講義を受けたと返答したら、「小林教授と小倉紳士クラブの新年会で話をしたよ。今日も井筒屋でバツタリ逢って挨拶したから、あんなのことを話しておいたよ」

一体何を話したかは聞いてないが、生返事くらいはしておいたと思う。

小林先生は大講義室で大勢の学生を前に講義をしたのであって、先生が修の顔を覚えていたはずもなかった。しかも米英科の学生であり、中国学科に所属する先生ともう接点はなかった。後になって知ったが、小林先生は戦後間もない北九州大学草創期からの教職スタッフだった。先生の生家は江戸時代から明治・大正にかけて船場町に所在した酒造家だった。

「小林先生は、確かお醤油屋さんの息子さんじゃなかったかねえ...」と船場町生まれの母が言ったのを覚えている。昔は酒も醤油も商う家もあったから信憑性はある。

十二 ノンポリ学生

修は受講カリキュラムを可能な限り午後に寄せて、午前中をバイトの時間に当てていた。午前中に必須の履修科目があったら、付かず離れずの付き合いの村山信吉らから講義ノートを見せてもらった。

彼は反デューリング論を愛読する左翼学生だったが、修とはイデオロギー抜きで付き合い合ってくれた。文学的に通底する何ものかで結ばれていたのかも知れなかった。店では富山さんがお得意さんとすっかり懇意になり、日々の売上高を自慢した。商いの実績を上げれば文句はないだろう、という傲慢にも見える姿で荷台満杯に履物を積載し、午前十時頃にはバイクのエンジン音を高らかに発進して行った。

「あんな、帳簿づけなら娘が子育ての片手間にでも出来るから、商いに出かけてみたらどうかね？ 商売人が商品を売って口銭もらうのは何にも悪いことじゃないからな」

修も何となく狷介な老人の傍に鬱々と侍っ

ているのも気が晴れず、外勤を二つ返事で引き受けた。

— 正直なところ、半端な帳簿づけで月々一万円も頂くのは気が退けた。元々若奥さんが帳簿をつけていた。子供も長男が小学校に上がリ、長女も三、四歳になっ ていて、子育ての手間はだいぶ省けていた。時には三支店から電話で不足の品を言っ て来るので、その分を配達するだけでも用は足りた。若い時に大阪に出 て奉公人していた主人は、浪花の流儀で外交に出かけるのを『商いに出かける』と呼ばせた。

「けったいな形のサンダルでんな！」と大阪の業者には、大阪弁でずけずけと容赦なかった。四月から五月にかけて外の空気を吸う方が心地良かった。商い先は富山さんと重ならないように配慮してくれた。店での仕入れで顔馴染みになっていた神岳市場の女将さん、富野の女将さん、戸畑鞆ヶ谷の女将さん、八幡中央町の女将さん、店の畳に下駄の鼻緒な

どのサンプルを広げると結構注文してくれて、  
一万円の給金をもらっている面目が立った。

—だが、それを配達する段になって授業の  
カリキュラムとの折り合いがつかなくなかった。

学生アルバイトとは言え、「仕事優先」は  
致し方なかった。そんな日々、五月のある晩  
主人が話しかけて来た。

「あんた、自民党青年部の大会に行つて来な  
さい。本来、若者は保守であるべきなんだよ。  
きちんと学生服で参加するんだよ」

安保反対の世相に、学生服で保守政党の党  
大会に出るには抵抗を覚えたが、断る勇気も  
なく、翌朝の日曜小倉駅の集合場所へ行つた。

リーダーは理容学校のオーナーで、他に四、  
五人の中年男性がいた。会場は福岡市のアメ  
リカ文化会館だった。満席の人の入りだったが、  
見渡して詰襟の学生服を着ているのは自  
分ひとりで、場違いなところへ来た気持ちに  
なった。

—様々な党幹部の決意表明やら県内各地の

自治体の首長や議員らが入れ替わり立ち替わり演説した。今朝特急『朝風』で博多入りしたばかりと冒頭に挨拶した国会議員もいた。最後に全員立ち上がり、自由民主党青年部の歌と思しきものを斉唱させられた。歌詞は、『♪ 沸々たぎるこの心…』とか、『♪ ああ、悲しからずや外国（とつくに）に、未だ還らざる戦友（とも）あるを云々』とか、『♪ これぞ、若人、我ら若人、国の行く手を荷うは我らぞ』とか、部分的に記憶に残っている。大会がお開きになるや、修はとにかく気恥ずかしくて孤独になりたかった。

— あんなに大勢がいたけれど、みんな真剣に政治的信念を持って参加していたのだろうか。私利私欲が目的で入党しているだけではないのか。小倉から一緒に来た人達には、箱崎に友達がいるからと口実をつけて小倉へ戻った。修は政治に全く興味のない無色透明なノンポリ学生だった。

夏休みも近づいた頃だった。修はテキストやノートに、まっさらな部分が多くなったことが気になった。講義に出れば、ノートに聞き書きするし、テキストにも鉛筆でメモを書き込むからだ。正直言っても商いで、各支店の主人や履物店の女将さん達と雑談して時間を潰し、日暮れに店に戻る方が楽しかった。

「あんな、今日も学校に行かなかったな」

「最近、休講が多いのですよ」と修は主人の詰問を適当にはぐらかした。商いに出かけるのは簡単だった。サンダルや草履や鼻緒の棚を適当に物色し、主人の前に外へ持ち出す品物を並べて見せるだけだった。主人がいない時は若奥さんがその代わりをした。持出品を並べて傍に呼ぶと、若奥さんは長い脚を畳んで行儀良い正座をされた。紺のワンピースのスカート裾から露出した膝小僧は、貝の口みたいにピッチリ閉じられていたが、修は以前に一瞬だけ見てしまった太股に妄想を逞しくした。更に、乳の饅えったような豊穣な

女人の躰から発する匂いに鼻腔をくすぐられた。人間的には未熟ながら、とっくに性愛には目覚めていた。心の中は外部から見透かされないと思えば、自分の妄想に含羞を覚える純情さはあった。

— 誰でも情欲を抱いて女人を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。マタイ伝第五章二八の警句を、修はまだ知らなくて幸いだった。

修はその頃、小遣いをはたいて中古のレコードプレイヤーを京町の裏通りの楽器屋で買った。流行っていた『山のロザリア』の歌が気に入り、日々の慰みに一人で腹一杯聴きたかった。金銭に余裕が無いので、レコードもその一枚しか買わなかった。北方の狭い間借の部屋で一人、スリーグレースの哀愁を帯びた歌声、♪ 帰れ、帰れ、も一度、忘れられぬあの日よ涙ながし別れた君の姿よ…。何度も何度もレコード盤の溝が擦り切れるほど繰り返して聴いた。修に、涙を流して別れ

た『ロザリア』はいなかったが、聴く度に中学生や高校生の頃に、密かに思い慕った色々なマドンナ達の面影が胸中を去来し涙を落とした。大学一年生の時に一寸デートしただけの演劇部の中村信子は、とっくに退学して京都に帰っており、遠い存在になってしまい、もはやロザリアでなかった。

ある日、修が鼻歌に『山のロザリア』を口ずさみながら、商いに持ち出す棚の鼻緒を物色していたら、いつの間にか傍にノースリーブのニの腕の肉も露わなワンピース姿の若奥さんがいて『山のロザリア』を歌ってくれた。

「この歌、ママさんコーラスで歌っているわよ」と機嫌良かった。

一声に色彩があるのなら、それは燃えるような紅だっただろう。もしも実のお姉さんだったら、戯れに白い素肌の眩しい上腕の肉をつねって甘えたくなるほど嬉しかった。

#### 十四 夏休み

商品売って叱られたことを覚えている。

いつも派手な着物姿の姉妹と思しき中年婦人が詰めている三郎丸市場の履物店だった。

「あなた学生さんだっけね。好い顔してるじゃない。わたしがもう十年若かったら、恋人に立候補してやったわ」と若い方が本気とも冗談ともつかない顔付きをした。修は真に受けた訳ではないけど、少し浮わついた気分させられた。

「ねえ、あんた、これ、もらっとくよ」と年上の婦人の方が女物の下駄の鼻緒を三、四束摘んでいたのので、売れたと喜び勇んで納品書を作成して渡した。だがこの商いには叱られた。

「三郎丸にはツケがいっぱい溜まっているじゃないか。帳簿付けして知っているだろう。あそこには現金売りしか駄目だと言ったはずだぞ」

商品を多量に売り上げて叱られていては遣る瀬なかつた。そんな時は富山さんが、店先に出たところで囁いてくれた。

「気にしなさんな。俺なんか符丁に關係なく  
売り捌（さば）いて、いつも文句言われてい  
るけどよ、売値はある程度任せとくれな  
いかって言い返しているんだ」と店閉ま  
いの清掃で、帚でシャカシャカ床を掃  
きながら言った。

一商品には主人手書きの片仮名の符丁が  
付いていた。それは『朝日昇るが如し』で、  
アが一、サが二、ヒが三の要領で読み替  
えるものだった。サンダルに『アサ』と記  
されていたら千二百円の卸値という具合  
で難しくはない。仕事は辛くなかったが、  
いつしか勉学の遅れが気がかりになっ  
た。夏休みに閑寂な別府の祖父母宅で  
勉強し、遅れを取り戻したくなった。佐  
賀の実家は勉強に身が入る環境でなかつ  
た。家も狭いし妹も二人いて勉強部屋も  
ない。意を決して鉄輪の祖父に手紙を書  
いた。幸いなことに、祖母の方から返信  
が来た。

一この夏は爺ちゃんとゆっくり二十日  
ほどかけて、四国廻りの旅をするので留  
守番に来て欲しい。まさに渡りに船と良  
い案配であつ

た。祖父母は鉄輪土産の手作り『別府羊羹』を、昔とった杵柄で零細ながら製造・販売し、湯治の常連客を掴んでいた。

一修にとって幸いなことに、暑い夏期の羊羹の需要は微々たるもので商いは閑期だった。鉄輪の家は旧料亭で、祖父が先の戦中に買収した二階建ての宏壮なものだった。部屋を賃貸し家賃収入もあるから温泉三昧の裕福な老後の生活だった。

一階の半分は、仕切って硝子店だった。離れの羊羹工場の半分以上を仕切って老夫婦に貸していた。この部屋の玄関には、別府の花菱ホテルだの清風荘だの有名旅館の名が入った様々な番傘が置いてあり、ここは表札の名前のほかに幾つも名前を持っているぞ、と祖父が笑っていた。正体が知れなくても家賃はきちんと払ってくれるそうだと椿の大樹の傍らの奥まった一室には、鉄輪温泉街の中心地に洋品屋を開く関西弁の老夫婦が住んでいた。そこに脚の不自由な娘さんも同居していた。

男と服毒心中未遂した際の後遺症と聞いていたが、真偽の程は定かでない。

「勉強がおろそかになりました。二年生までは一般教養課程ですが、成績が悪いと専門課程の三年生にあがれないそうです」と修は怖気ながら主人に話しかけた。

「そげなことがあるもんか。万一の時は、わしが小林先生に口を利いてやる」と主人の顔が強張って見えた。

「鉄輪の祖父ちゃん、祖母ちゃんからも旅行の留守番を頼まれていきます」と修は葵の御紋みたいに祖母からの葉書を取り出した。

「お父さん、永松さんからの頼みですよ。去年の秋に鉄輪で温泉養生して来ましたよ。別府に行ったら、よろしく伝えといてね」と意外にも大きな奥さんが援護射撃をしてくれた。

「う～む、そうか。あんたは学生で、本分は勉強だからなあ…、仕事の踏ん切りのよいところまで休んでよろしい」と卯三祖父さんに義理のある主人も仕方なく折れてくれて助かった。

た。

## 十五 先読みの極意

七月末の夕刻に別府駅に降り立ち亀の井バス発着所に向かった。修は白のワイシャツの左襟に北九大の徽章の「地球マーク」のバッジ、右襟に外国語学部のイニシャルの「F」の文字のマークを付けていた。早速、顔をベタ塗りの中年女が近寄って来た。

「学生さん！遊んでいきなさいよ。学割があるよ」

修は無視して近鉄デパートの一角の停留所へ入った。祖父母宅は久し振りで懐かしかった。祖父の長男一家に子供が三人いた。その一家が別府市街地に出た時に、長男と下の娘は連れて行っただが、爺婆だけの二人暮らしになり寂しいからと、長女の佐智子だけは鉄輪温泉に残した。中学一年生で、修との間柄は従妹になる。幼い頃は無邪気に修にじゃれついていたこともあったが、もう大人びた容貌と物腰になっていた。

一 四 国 廻 り は 八 月 早 々 に 出 発 す る そ う で 、  
意 外 な こ と に 佐 智 子 を 連 れ て 行 か ず 、 老 夫 婦  
二 人 だ け の 水 入 ら ず の 旅 を す る そ う だ っ た 。

「 学 生 運 動 は 盛 ん か ね ？ 」 と 祖 父 が 唐 突 に 訊  
い た 。

「 う ち の 大 学 で は 表 立 っ た 運 動 は な い よ 。 左  
翼 系 の サ ー ク ル の 立 て 看 板 は 一 杯 あ る け ど … 。  
色 ん な 言 論 や 思 想 が あ っ て 良 い ん じ ゃ な  
い ？ 」

「 そ ん な 生 意 気 言 っ て 、 自 民 党 員 の 爺 さ ん に  
叱 ら れ る ぞ 。 こ の 前 、 坊 さ ん の 説 法 を 聴 い た  
け ど 、 安 保 反 対 な ん て 国 益 を 害 す る っ て 言 っ  
て い た ぞ 」

「 最 近 の 坊 主 の 言 う こ と は い い 加 減 よ 」 と そ  
こ へ 春 子 祖 母 さ ん が 割 っ て 入 り 、 政 治 談 議 は  
打 ち 切 り と な っ た 。

一 修 は ノ ン ポ リ 学 生 だ っ た が 、 妙 に 訳 も な  
く 既 成 政 治 に は 反 駁 を 覚 え て い た 。 若 者 と は  
そ う い っ た 革 新 の 洗 礼 を 受 け て 育 つ も の か も  
知 れ な い 。 そ の ま ま 左 翼 宗 派 に 嵌 ま る 者 も 出

る だ ろ う 。

八月に入ったら、門司に住む春子祖母さんの妹、通称『門司婆ちゃん』が孫の中学生の女の子を連れてやって来る手筈になっていた。だから、修にとって炊事、洗濯など家事の心配もなく、勉学に専念できるのは僥倖だった。羊羹のお得意先の旅館や土産品屋には十分に在庫があるように手配済みとのことだった。

「いいかね、あんたは大学生で偉い学者先生から勉強を習ってるだろうが、人間万事何事も先読みの心が一番大事なことだけは覚えておけよ」と旅行を前に健康診断で医師から昔の徴兵検査用語で『甲種合格』の太鼓判をもらった祖父は上機嫌で冗舌だった。

「親父さんは百働会で張り切っていますよ。百歳まで働くのですよ」と明治十八年生まれの祖父に言った。

「あの人は爺ちゃんより四つ年下だよ。百まで生きるちゅうたら、爺ちゃんは、後二十三年も生きんといかんよ。もう死んでしまおう

よ」と笑って煙管（キセル）をポンと叩いてタバコの灰を火のない長火鉢に落とした。

—「先読みの心」と改めて言われて、祖父の来し方を思った。小倉で有数の大店だったにも係わらず、あっさり別府鉄輪温泉に楽隠居したのも軍都小倉への空襲を先読みしてのことだった。有り余った資産で、生まれ故郷の佐賀などに宏大な農地を買い漁っていたが、終戦後の農地法であっさりと没収され、一代で築いた膨大な蓄財も直後のハイパーインフレーションで元も子も潰すような憂き目に遭遇していた。

—そんな危機も克服して、結構裕福に暮らしている余裕は生来の先読みの心の賜物だったのだろうか。修はずっと以前に祖父から羊羹の作り方を習ったことがあった。

「寒天が溶けて煮立つ前に砂糖をバケツに量っておきなさい」

「砂糖と寒天が混ざって泡が立つ前に、アンコの分量を量っておきなさい」

「鍋にアンコを入れて棒で掻き混ぜたら、煮立つまでの時間に、砂糖のバケツとアンコの袋を洗ってしまい、最後の掃除の手間を少しでも省いておきなさい」など、何事も理詰めで煩く時間の無駄を消していた。

—祖父の秘伝の美味は、羊羹が練り上がる間に、カップ一杯の蜂蜜を注ぎ込むことだった。不味い安売りの羊羹屋は、砂糖を少なめにして大量の水飴を使うのだ、と教えてくれた。そんな記憶を辿っていたら、台所の洗い物を終えた春子祖母さんが団欒に加わった。

「小倉の駅前は変わってしまったね。わたし、もう二年前になるかな。戦時中に鉄輪に来て以来、十六、七年振りだったよ。『小倉博』見物に行ったら驚いたよ。駅も移転し駅前には新しい大通りがあって目を疑ったね。とりあえず紺屋町の方へ行ってみたけど、又しても昔なかつた大通りがあって迷ってしまい、仕方なく通行人に道を聞いたよ。生まれも育ちも小倉なのに恥ずかしかったよ」と平和通

りと小文字通りのことだろうが、修は昔の小倉の街路を何も知らないから、祖母の昔語り  
が愉快だった。船場町で羊羹店を開いた明治の草創期、祖父は住み込みの丁稚さんと車力を曳いて、戸畑・八幡、夜中には中津口から街道の黒原の坂道を越えて行橋へと、羊羹の配達に余念がなかったそうだ。艱難苦節の苦  
労話に心を打たれた。

#### 十六 黒焼けのトースト

八月一日に門司婆ちゃんが孫娘を連れてやって来た。その子は中学三年生で従妹の佐智子よりもひと回り体格が大きかった。当初二人は口も利こうとせず、互いに無視し合っていた。

一翌日好天の朝、祖父母は出立した。修は見送りに出たが、ちょうど奥に間借りの洋品屋の老夫妻も店に通うため出て来た。喘息持ちの主人はゼイゼイ喉を鳴らしながら、腕時計を持っていくかと春子祖母さんに訊いた。和装の卯三祖父さんが懐中時計を持っている

から大丈夫だと断ったが、

「ゲホッ、ゲホッ、腕時計の方が便利やさかい持って行きなはれ。ペッ！」と尚も主人は関西弁で咳き込みながら地べたに痰を吐くと、自分の総金張りの腕時計を外して、春子祖母さんに手渡そうとした。

「おいは口ば持っ取るけん、時間位そばにおる誰にでんが聞くくさ。そげなとは要らんよ」とやや興奮したのか祖父は俄かに佐賀弁になり、邪険に喘息爺様の腕を振り払うと、祖母を促してすたすたとバス停留所へ向かった。その日から、修と佐智子と門司婆ちゃんとその孫娘、四人の共同生活が始まった。門司婆ちゃんは、修が小倉の大学生と知って愛想良かった。

「昔の外専でしよう？」と訊かれた。北九州大学の前身が、小倉外事専門学校とは、大方の北九州の人々が承知していた。三度の食卓は一緒に囲んだ。

— 実は、祖母の春子さんは後妻で、修と佐

智子の実の祖母のお常さんという人は、当時は不治の面疔という顔にできるおぞましい腫れ物に罹患し、三十五歳の若さで落命していた。現代医学なら抗生物質で簡単に治癒するものだった。祖父は紺屋町から通いでいた、干支が一回り以上も若い、羊羹巻き女工の永井春子さんを後添えとしたのだった。修の物心がついた頃からすでに婆ちゃんだった春子さんを、ずっと実の祖母とばかり思っていた。

— あんたは、赤ん坊の時に汽車が好きだったよ。背中におんぶして汽車ポッポ見物に連れて行ってやったけど、背中でポッポ、ポッポと暴れるから、転んでしまったよ。長じても春子さんに懐いて何の違和感もなかった。従って、門司婆ちゃんとも血脈はないのだが、何のわだかまりも感じなかった。

— 翌日には、佐智子と門司婆ちゃんの孫娘は前日の無視合戦が嘘のように、いきなり旧知のようにお喋りしだした。子供同士の持つ変わり身の素早さだろうか。この夏休み、修

はひたすら勉強に打ち込んだ以外、たいした覚えがない。二階の北側の丸窓を開けて、暑い昼間は大抵、パンツ一丁の丸裸みたいな姿で本を広げていたので、女の子達は嫌がって近寄って来なかった。別府の繁華街に下りるどころか、鉄輪の温泉街を散策した記憶もない。

一度だけ挨拶に市街地に住む謙二さん一家を訪ねた。門司婆さんはご馳走作ってくれるかね、と伯父は言いながら、購入したばかりの小型トラックを運転して見せ自慢顔だった。これで羊羹の販売に精が出ると張り切っておられた。

朝と晩は外湯の町会共同湯の『元湯』か、市営の『熱の湯』に入浴を欠かさなかった。家の中にいるだけでも汗が噴き出る真夏の日々だった。修が寝泊りしていた二階の部屋の廊下から、庭木の下影になった縁側でお喋りに夢中の佐智子達に向かって、勉強の合間の気晴らしに、

「お～い、そこの真っ黒けの毛！」と冷やかしたことがあった。数日前に二人で海水浴に出かけ、真っ黒に日焼けしていたからだった。その日の昼飯はパン食で、私の皿には真っ黒焦げのトーストが二枚載っていた。

「この子達が、お兄さんに食べさせてやると焼いてあげたのですよ」と門司婆ちゃんが顔を崩して笑った。くだんの二人もクスクス笑っていた。さっき二人を真っ黒けの毛と嘲った仕返しだった。

十七 長靴ドロボー

九月の初め小倉に戻った。大学はまだ始業していないから終日働いた。店には森重さんという三十代の婦人がパート事務員として雇用されていた。ずっと事務を執っていた若奥さんが段々身重になって来たからだろう。森重さんは所帯持ちで幼稚園にあがる前の娘さんを連れて来ていた。

「おお、可愛い子だね。こっちにおいで、よしよし、良い子だねえ」と主人は両腕を背中

に回して女の子を抱えた。厳つい風貌に似ない子煩悩な人だった。確かにオカッパの髪型の何とも愛くるしい子だった。その日の夕方、外交から戻った富山さんと顔を合わせた。

「ねえ、親父さんから叱られなかったかい。あんたの休みの間、プリコン、プリコン、毎日のように文句タラタラだったよ」と店の隅っこのショーケースの傍でそっと耳打ちされた。

— 主人からは、「お帰り」と言われただけで、叱責も皮肉も浴びなかったので、狐につままれた気分になった。返って富山さんが信じられない人に思えて嫌気がした。それとも、祖父から土産にしなさい、と預かった四国土産のタルト菓子の効き目があったのかも知れない。そんな夕刻、セーラ一服の少女と妙な美貌の着物姿の婦人が来店した。

「隣の岩田です」と名乗られ、隣家の岩田印刷所の母娘だと悟った。岩田印刷所には五十年配の住み込み店員がいて、玄関先で顔が会

つたら会釈する程度の間柄に過ぎなかった。  
まさか深窓にこんな美しい生き物が棲息して  
いようとは、狐でも化けて出たのかと思った  
程だった。訊くと、娘さんのアメリカ人ボー  
イフレンドに下駄をプレゼントしたいという。  
修の手には負えないので早速若奥さんと呼ん  
だ。

「日本観光の記念に贈るのだったら、鎌倉彫  
の塗り物の下駄が良いですよ」と現物を見せ  
て勧め、すぐに黒い鼻緒を上げて届けること  
で話がついた。若奥さんは竹を割ったような  
性格で、てきぱきと物事を処理できる人だと  
感心した。ともかく夏休みが明けて、森重さ  
んという人が事務一般を執るので、私のバイ  
トはいよいよ外回りの商いだけになった。且  
過市場の支店の藤原さんは話好きで、そこで  
油を売って時間を潰すことが多かった。且過  
支店がシェルターの役割を果たしたのだった。  
一藤原さんは島根県人、愛想良く店舗は大  
繁盛だった。修も適宜、客の対応を手伝った。

ある時、若い男が長靴をくれと入って来た。  
修が対応し、男は色んな寸法の長靴を試し履  
きしては、一寸歩いては脱いでいた。そのう  
ち修がぼんやりした隙を見て、その男は脱兎  
の如く店を飛び出し、左手の小倉市立病院側  
の方向へ走った。修は呆気にとられて身動き  
すらしなかつた。

「アッ！」と藤原さんが店を飛び出した。店  
主は長靴ドロボーと反対方向の右側へ走った。  
右手に市場が途切れてメインストリートの平  
和通りへ繋がる路地がある。店主が平和通り  
の歩道に先回りしていたら、そのドロボー男  
が市立病院の方向から、まっしぐらに疾走し  
て来たそうだ。

一男の首根っこを掴んで藤原さんが戻って  
来たのを見て驚愕し恐れ入った。平素は温厚  
な眼が鋭く吊りあがっていた。ドロボーの足  
取りを読んで先回りするとは驚異の勘だと思  
った。

「何だよう。履き心地を試しただけじゃない

か よ う 』

「 だ っ た ら 、 何 で 全 速 力 で 走 っ て 来 た ん  
だ ！ 」 と 貧 相 な 長 靴 ド ロ ボ ー を 店 主 は 甲 高 く  
一 喝 し た 。 若 い 男 は 不 貞 腐 れ て 長 靴 を 脱 ぐ と 、  
自 分 が 履 い て 来 た 先 の ち び ら れ た 古 サ ン ダ ル  
に 履 き 替 え た 。 店 主 が 男 を 警 察 に 突 き 出 す こ  
と は な か っ た 。 二 度 と 来 る な 、 と そ の 男 を 一  
喝 し 無 罪 放 免 し た 。 修 も 叱 ら れ る 覚 悟 を し た  
時 に 、 た ま た ま 店 に 来 て い た 次 女 の 中 学 一 年  
生 の 娘 さ ん が 、

「 今 の お 父 さ ん の 顔 、 醜 か っ た よ 」 と 言 っ た  
ら 、 よ う や く 店 主 は 普 段 の 笑 み を 取 り 戻 し 、  
「 ハ ハ ハ ッ 、 あ ん た 、 靴 の 試 し 履 き は 片 足 だ  
け に す る も ん だ よ 」 と も う 平 素 の 声 音 に な っ  
て い た 。 藤 原 家 に は 中 学 三 年 生 を 頭 に 三 人 姉  
妹 が い て 、 暇 潰 し に よ く 店 に 来 て は 、 ひ っ き  
り な し に 往 来 す る 老 若 男 女 の 買 物 客 を 眺 め て  
い た 。 住 居 は 市 場 に 程 近 い 紺 屋 町 に あ っ た 。

十 八 バ キ ュ ー ム カ ー

旦 過 市 場 を 裏 口 か ら 出 て 、 平 和 通 り を 横 断

すると神岳川沿いの古船場に雑多な小店が並んでいた。田川旅館の裏手にトタン屋根の『浜野履物店』があり、そこも修が油を売るショバだった。住居ではなく一間半間口の小さな店内に、今にも崩落しそうに男物女物の下駄類やサンダル、スリッパ類が陳列というより足の踏み場もないほど積載されていた。店主は奥の畳で鼻緒をすげているか、金具をトントン叩いて女物の靴の修理をしていた。「バーの女がよく修理を頼みに来るよ」と人懐っこく笑った。年の頃が修の父と同じ位に見えて親しんだ。昔語りが面白かった。浜野さんは満州（現中国東北部）に二度も徴兵で行っていた。修の父も満州のソ満国境近辺でトーチカ造りの軍務に従事したことがあると聞いていたので、主人の満州の思い出話は興味深かった。

「今になったら命あつての物種だがね、戦争のお陰で外国見物が出来たよ。冥途の好い土産になったよ。とにかく満人の女の子は神様

みたい綺麗だったよ」

修は父から聞いていた白系ロシア人の娘のことだと思った。金髪に青い瞳のお人形さんみたいな少女が多かったそうだ。

「食い物が違うせいか、連中のウンコはパサパサして臭くないのだよ。そこへいくと、日本の兵隊の糞のベチャツと汚いったらありやしなかったね」

— 浜田さんは、人の運命の難儀でも、柳の枝に風とさらっと流し去る人だった。修は市役所衛生課のバキュームカーが、店に汲取りに来た時のことを思い起こした。ちょうど禿頭の米屋の親父が前掛け姿で配達に来ていて、やっぱり大金持ちの便所でも臭いもんだな、と笑いながら話しかけた。

「日活ホテルの一番値段の高い部屋は、一泊三十万円だそうですよ」と修が話しを向けたら浜野さんは、

「そうかね。そこに泊まったお客は黄金のウンコを垂れるのかね」と破顔した。店の前の

神岳川は護岸の下に汚泥が広がりに、真ん中辺りを濁った水が流れるドブ川だった。

十九 伯父の酔虎伝

なぜか商いが面白くなるにつれて勉強意欲が薄れていった。受講するのが面倒に感じる日もあった。もはや年輪を重ねた今でさえ、明け方にうら哀しい夢で目覚めることがある。

一若き日の修が久し振りに大学の講義室にいる。何と原書講読のページが驚くほど進捗している。そこまでテキストは全くまっさら、モノクロの光の中で、孤独の身でひたすら途方に暮れている。大概ちょっとした気配で目が覚めるが、もう大学なんて遙かな昔に卒業しているじゃないか、と胸を撫でおろし可笑しくもあり、もの哀しくもある。

中秋の頃だった。別府の謙二伯父さんの訃報があった。この船場町の家で生まれ育った永松家の長男で、従妹の佐智子の父親だ。この夏休みに挨拶したばかりだったので驚いた。

一身体がだるいと、自分で新車のトラック

を運転して病院に診察に行き、即入院となつて一ヶ月。医療加護の甲斐もなく、あっけなく肝臓がんで帰らぬ人となられた。修は忌引きの休みをもらった。主人は齒に衣を着せぬ言い方をした。

「謙二さんは四七歳だったのかね。まだ死ぬような年じゃないな。女房の顔を見たことがあるが、ハンサムな謙二さんが、何であんな不細工な嫁さんを娶ったのかね。ライオンみたいな髪をして、あれじゃ、謙二さんも嫌になり、毎晩飲み歩いて肝臓を壊すはずだよ」

別府に『観光プレス』なるゴシップ新聞があり、コラム『別府紳士酔虎伝』は人気があった。以前に謙二さんも取り上げられ、その酒の飲みっ振りは『小切手型』と揶揄されていた。必ず小切手帳を持ち歩き、飲み屋を出る際にカバンから取り出すと、その場できちんと万年筆で金額を書いて支払ったという。

その日は必修の講義があったので、受講を終えて夕刻に日豊線下りの準急に乗車した。

別府市富士見町の家には九時過ぎに着いた。  
すでに通夜の一般客は帰っていた。  
「修ちゃん、子が親より先に死んじゃいけないよ。あんたは文学を研究しているから言うけど、雨粒を考えてみんさい。高い空の上から降って来るだろう。これが親の恩というもんだよ。雨粒は地べたに当たってピョコッと跳ね返るだけじゃないかね。子供の親に対する感謝ちゅうのはその程度のことかね」と卯三祖父さんは、涙を流さんばかりに鼻水を何度も啜り上げた。長女の佐智子は、すでに修の母や春子祖母さんと一緒に鉄輪へ戻っていた。幼い小学生の長男と次女は、いきなり大勢の人達が押し寄せた通夜という非日常に戸惑った態（てい）だったが、人生の未熟者の修に慰めようもなく、何か二人に声をかけようと無理に微笑み、頬の筋肉が強張って震えた。家は二世帯住宅で、廊下の壁のドアを開けたら老齡だが健在の未亡人の両親と兄弟姉妹が久方振りに揃って通夜の宴も闋（たけな

わ ) の 様 相 だ っ た 。 と り あ え ず 未 亡 人 に な っ  
た 伯 母 さ ん に お 悔 や み を 述 べ た が 、

「 修 ち ゃ ん 、 小 倉 か ら 来 て く れ て 有 り 難 う 。  
お い ち ゃ ん は 、 あ ん た が 知 っ て る よ う に 大 酒  
飲 み や っ た か ら 早 死 に し た の よ 。 こ れ で や っ  
と 、 わ た し も 着 物 の 一 枚 も 買 え る わ よ 」 と 捌  
け た も の だ っ た 。 小 倉 の 主 人 に こ ん な こ と を  
言 い つ け た ら 、 あ の ラ イ オ ン 女 め が 、 と 頭 か  
ら 湯 気 立 て て 怒 り 心 頭 の 顔 に な る だ ろ う 。

「 こ う し た 方 が 、 早 く 酔 え る ん だ よ 」

「 う ち は 、 酔 っ 払 わ な い よ う に チ ビ チ ビ や り  
ま す よ 」 と 父 が 呆 れ た 光 景 が 目 に 浮 か ん だ 。  
謙 二 伯 父 さ ん が 佐 賀 の 家 を 訪 れ た 時 の こ と 、  
父 と 酒 を 酌 み 交 わ し て い た が 、 コ ッ プ の ビ ー  
ル の 中 に 焼 酎 を ド ボ ド ボ 注 い で 喉 を 鳴 ら し て  
呑 み 干 し て い た 。 凄 い 酒 の 飲 み 方 を す る と 驚  
い た も の だ 。 翌 日 の 本 葬 は 富 士 見 町 に 程 近 い  
海 門 禅 寺 で 親 族 の み で 行 わ れ た 。 葬 儀 場 と し  
て 借 り た だ け で 、 遺 骨 の 埋 葬 地 は 佐 賀 県 小 城  
に あ る 永 松 家 先 祖 代 々 の 墓 だ そ う だ っ た 。 こ

こ で 初 め て 北 方 支 店 の 前 川 さ ん の 母 親 に 会 っ  
た 。

「 お 兄 さ ん の 大 学 の 近 く の 市 場 に 息 子 の 履 物  
店 が あ る の じ ゃ ろ う 。 辛 抱 し て 頑 張 る よ う に 、  
宜 し く 言 っ と い て ね 」 と 挨 拶 さ れ た が 、 む し  
ろ 辛 抱 し て 頑 張 る の は 自 分 の 方 だ と 、 修 は 仏  
頂 面 を し て い た と 思 う 。 葬 儀 が 済 ん だ ら 何 も  
や る こ と が な く 、 修 は 従 弟 達 と 自 転 車 を 漕 い  
で 、 思 い っ 切 り 別 府 の 海 浜 通 り を ぶ っ 疾  
( と ) ば し た 。

— 別 府 の 秋 の 海 は 青 々 と 果 て し な く 、 天 空  
は 高 々 と 澄 み 切 っ て 、 こ の 世 か ら 人 が 一 人 消  
滅 し た こ と な ど 信 じ ら れ な い 心 持 だ っ た 。 そ  
の 日 、 鉄 輪 に 帰 っ た ら 、 祖 父 達 が 口 々 に 怒 っ  
て い た 。 位 牌 の 戒 名 の こ と だ っ た 。

「 生 臭 坊 主 め 、 お 布 施 の 値 段 で 勝 手 に 戒 名 を  
付 け て と ん で も な い 奴 だ 」

謙 二 さ ん の 白 木 の 位 牌 は 『 信 士 』 の 位 が 付  
け ら れ て い た 。 卯 三 祖 父 さ ん は 物 置 の 道 具 箱  
か ら 匏 ( か ん な ) を 取 り 出 し て 、 坊 さ ん の 墨

書きの戒名を器用に削って、筆をとると墨痕鮮やかに『居士』に書き換えてしまった。

## 二十 成金饅頭

小倉に戻って勉学に商いと、相変わらずの日常に戻った。履物問屋の一大年中行事は、秋季『履物見本市』だった。且過、宇佐町、北方の三支店の主人も奥さんに店を任せて参集した。この秋の新作の下駄の鼻緒、サンダル類などの展示会が、小倉駅近辺の貸しビルの一室で催行された。招待状を発送してあるので、北九州中の小売店から集って来て盛況だった。修もその日は受講に関係なく雑用係だった。会場に入るや開口一番、

「これから大切な新作の商品に手を触れるのだから、みんな、手を洗って来なさい」と頭髪をポマードできちんと撫で付け、他所行き  
の背広上下に身を固めた主人が小言を言った。  
全員がトイレの手洗場に向ったが、

「彼女とデートする時でも、手なんか洗わないよな」と宇佐町支店の尾渡さんが不服顔で

修の耳元に囁いた。来場する顧客はほとんど  
婦人方で、一様に盛装の和服姿で華やいだ雰  
囲気の日だった。

「有り難う存じました」と帰る顧客に来場御  
礼の『成金饅頭』を手渡す主人の姿に老舗の  
商家の習いの美風があった。成金饅頭とは大  
きなドラ焼きで、余分に用意してあったのか  
数が余ったので、修も久し振りに甘味を口に  
した。

そんなある日、明け方に若奥さんが産気づ  
いて病院に運ばれていた。とても安産で次男  
が誕生したそうだ。若奥さんが、昨日も普段  
通りに食器の洗い物をしている姿を見ていた  
ので驚いた。長女が生まれた時も極めて安ら  
かな分娩だったそうで、それがために『安  
子』と名付けたと主人が嬉しそうに言った。  
若奥さんが退院の日、これから病院を出ると  
連絡を受けると、

「今日は我が家の祝日だ」と主人はいそいそ  
とポマードで薄い髪を整え、紺の背広に着替

えて居ずまいを正し、お包みの乳児を抱いて  
タクシーから降りる若奥さんを出迎えた。そ  
んな昔気質の老人の折り目正しさに、平素か  
らずぼらな性格の修は内心で舌を巻くだけだ  
った。

## 二十一 真夜中の大鍋

大学の講義は前期と後期に分けられていた。  
十月に前期の期末試験が終ると一週間程度の  
講義休みがあった。夏休みはずっと別府で過  
ごしたし、修は気分転換に佐賀の実家に帰省  
したくなった。土日の一泊で帰ることにした。  
大きな奥さんが土産にしなさいと、小倉名物  
の鯖の糠味噌煮を、一抱えもある大鍋に手作  
りし持たせてくれた。夕刻早めに乗った博多  
行の列車は戸畑、枝光、八幡、黒崎と駅に着  
くたびに人が乗り込んで来て大混雑した。そ  
れが折尾を過ぎたあたりからノロノロ運転に  
なり、時には停止して容易に動き出さなかつ  
た。遠賀川を渡ると筑前路は秋長けているは  
ずだった。もう窓の外は暗闇であり、車内で

は列車が揺れる度に、人波が右へ左へとドド  
ッと倒れ込み、とうとう背広の青年がブルー  
カラ一風の中年男に、あんたは故意にぶつか  
っているじゃないかと因縁をつけ、大声の口  
論が始まった。口は若い方が威勢よく相手を  
黙らせた。何とか列車が箱崎に着いた。くだ  
んの中年男は降りる段になって、

「おい、話しをつけるから、ホームに降り  
ろ！」と背広の青年をホームから挑発した。  
回りの仲間らしい者が宥めたが、

「俺は売られた喧嘩は買うのだ」と息巻いた。  
だが、その途端列車の扉がパタンと閉まって  
ジ・エンドという結末、周囲の客も安堵の表  
情だった。博多駅についたら様子が明らかにな  
った。鳥栖駅の手前で、貨物列車に男女の  
飛び込み心中があったそうで、その死体が機  
関車に巻き込まれて復旧の見通しが立たない  
様子だった。とにかくホームにいた長崎・佐  
世保行の準急に飛び乗った。すでに座席は満  
席で立っているしかなかった。だが、その列

車もなかなか運行開始の兆しはなく、ようやく十時過ぎにのろのろと発車した。準急とは名ばかりで、各駅に停車はするし、その停車時間の長いこと、佐賀駅に着くのは何時のことやら腹を決めねばならなかった。不貞腐れたサラリーマン風の若い男が身軽に網棚に横たわった。専務車掌が巡回に来て、

「オイ、降りてくれ！」と叱りつけ、ようやく床に降ろした。その傍にいた恰幅の良い紳士が、

「何時になったら長崎に着くんだ。長崎に着いたら駅長を叩き殺すぞ！」と顔を引き攣らせて車掌に凄んでいた。ともかく、ポタッ、ポタッと各駅に停車しながら、やっと深夜零時を過ぎて佐賀駅に着いた。修も腹の虫が治まらず鯖の味噌煮の大鍋を抱えて、改札口で一応列車遅延の文句は言ったが、

「これは事故ですからね、どうにもなりませんよ。お客さん、とにかく準急代を払ってください」と軽くあしらわれただけだった。

— 駅前にタクシーはあったが、そんな贅沢を出来る身分ではない。覚悟を決めて歩き始めた。

— 邪魔なのは唐草模様の大風呂敷の大鍋だった。手に提げては歩き難い。胸の前で白木の遺骨のように抱えるしかなかった。家までの道順は単純なもの。県庁前の国道に出て長崎・佐世保方向へ歩けばよい。大鍋を前に抱えた珍妙な格好も、深夜更けて行き交う人も皆無で平気になった。市街地が途切れる辺りで赤ランプの交番の前を通り過ぎた。その際に、中にいたお巡りさんが飛び出して来た。職務質問で呼び止められたなら、鍋を開けて鯖の糠味噌煮を見せるだけのことだ。しばらく修の後姿を観察していたようだが、結局は黙殺して交番の中へ戻った。

— 深更に大きな風呂敷包みを抱えた変てこな学生服の男。だが、ドロボーが交番の前を堂々と通過しないと考え、挙動不審者と認めなかったのだろう。

中天に頼りなく絵筆で刷いたように黄の織  
月が照り、一面に薄っすらと群雲を見た。や  
がて人家が途切れ途切れになった国道を歩く  
こと小一時間、やっと実家に近づいた。両腕  
に疲労を感じた。お地藏さんの辻を右折する  
小道の方が実家への近道とは知っていた。だ  
が畑中の一本道で外灯もない暗がりの細道に  
は、途中に野墓もあり不気味で入りたくなか  
った。

— ヒュー —、ドロドロドロ、先の見えない漆  
黒の野道は、幼い頃に紙芝居の怪談で眺めた  
幽霊・お化け・妖怪の類をずっと心の奥底に  
潜ませて、心霊を信じない身にも怯えを生じ  
させるものだ。

臆病だが国道をそのまま進み、次のバス停  
を右折すれば、家並みのある通りが実家まで  
続いており、遠回りを承知で真夜中の道に入  
った。この期に及んで急ぐ必要はなかろう。  
午前一時半、玄関口を叩いたら母が起きて来  
た。前もって帰省は伝えていたし、鉄道事故

の ニ ュ ー ス も 知 っ て い た の で 、 別 段 深 更 の 帰  
宅 に 驚 い た 様 子 も な い 。 と も か く 早 く 寝 る よ  
う に 言 わ れ た 。

## 二 十 二 故 郷 の 運 動 会

朝 寝 坊 し て 一 人 で 遅 い 朝 飯 を 食 べ た 。 日 曜  
日 で 父 も 母 も 新 聞 に 目 を 通 し た り 、 ラ ジ オ に  
耳 を 傾 け た り し て の ん び り し て い た 。 妹 達 は  
運 動 会 に 出 か け た と の こ と だ っ た 。

「 船 場 町 の お 婆 さ ん は 、 昔 か ら こ の 鯖 の 糠 煮  
が 十 八 番 ( お は こ ) だ っ た な 」

「 少 し お 弁 当 に 追 加 し ま し ょ う か 」

修 が 昨 晩 胸 に 抱 え て 帰 っ た 大 鍋 が 卓 袱 台 に  
あ っ た 。 鯖 の 臭 み が 抜 け て 本 当 に 美 味 だ っ た 。  
お 昼 に は 海 苔 巻 き の 重 箱 を 持 っ て 学 校 へ 出 か  
け る 様 子 だ っ た 。 そ こ へ 町 会 役 員 の 印 刷 屋 の  
主 人 が 訪 ね て 来 た 。

「 お た く の 息 子 さ ん 、 昨 晩 は 大 変 な 目 に あ っ  
た そ う で す な 」 と 玄 関 に 応 対 に 出 た 母 に 話 し  
か け て い た 。 本 当 に 田 舎 の 人 は 早 耳 で 、 噂 が  
矢 の よ う に 速 く 飛 び 交 う も の だ 。 聞 き 耳 を 立

てていたら、小学校の運動会の町会対抗のり  
れ一選手として、修に白羽の矢を立てていた。  
帰省を耳にしてのことだった。

一脚力に自信はあったが、久し振りの帰省  
で駆けっこをする気分ではなかった。自慢する  
ことでないが、子供の頃に他所の庭のスモモ  
の実を盗んで、家人に追いかけられても逃げ  
おおせたものだ。母が意向を聞きに来たが、  
黙って首を振って拒絶した。食事を済ませ、  
湯飲みのお茶を啜りながら、父母と顔を合わ  
せたら自然と愚痴が口から飛び出した。

「今みたいな生活をしていたら、勉強に身が  
入らないよ」と口が尖がった。

「父ちゃんだって、東京の建築専門学校にい  
た頃、晩飯が食えない日もあって、屋台で甘  
酒を啜って勉強して暮らしたんだよ」

「そんなの大昔のことじゃないか。時代が違  
うよ。船場町の親父さんはもう昔の人だよ。  
枯れ木みたいなもんだよ」

「何ば言いようとか！」と父は顔を真っ赤に

して怒った。修は不貞腐れて自転車に飛び乗ると、あてもなく故里の野中の道を漕ぎ回った。大肥前の広野に黄金色の稲穂が頭を垂れていた。

一運動会で妹達と昼飯を済ませた父母は、早めに帰宅していた。修も早めに小倉に帰ろうと思い、午後の早い時間に家に戻った。

「二人とも、兄ちゃんに会いたいと言っていたよ。顔も見んで帰るとね」と母が妹達のことを口にしたが、それに返事をせず、空になった大鍋を風呂敷に包み、お土産にと母が近所の商店から購入した佐賀名物の菓子『丸ぼろ』を手にとり、一人バスで佐賀駅へと向かった。

自分は一体何をしに帰ったのだろうか。列車の座席に揺られて始めて考えた。故郷の山の上に白雲がまだ高かった。

### 二十三 隠密指令

帰省で里心が憑いた訳ではないが、修は親心を頼るようにならなくなっていった。何とか店員みみたいな境遇から逃れて、普通の学生らしい

生活をしたかった。

バイトの束縛から逃れ、放恣な学生生活を欲求した。それを相談に帰省したはずだったが、やはり親に面と向かって真情を吐露できなかつたのだ。

勉学に身が入らず、鬱々と日々を過ごした。そんなある日、外交から戻って来たばかりの富山さんを、主人が叱っている光景に出くわした。

「この親父さんは株券やら何やらで、一億円の財産持ちなんだぜ。俺がちょっと給料の前借を頼んだだけで、それから何かと目くじら立てられて気に入らないよ」

例によって、閉店時の床に帚を立てながら耳元に囁いた。富山さんは奥さんが懐妊しており、一升飯を炊いても、一日でペロッと食べちゃうんだ、とぼやいた。奥さんを一度だけ拝見したことがあった。富山さんが春寒い頃一度だけ風邪で休んだ日に、奥さんがわざわざ店に欠勤の挨拶に来たことがあった。

細身の身体で店に入るや真紅のコートを脱いでセーター姿になり、主人に頭に下げた姿を覚えている。それなりにスタイルも優れ、眉目を濃く描き唇も紅々と塗って、風俗店で働いている人かとも思った。身重になった奥さんが勤めを休んで生活苦があるのか、と心配した。

「あなた、ちょっと内緒で調べてくれんかね。他言無用だよ」主人のメガネの奥の目が光った。修は内密の調査を頼まれた。調査の目的は訊かなかつたし、訊いたって教えてくれなかつたろう。それは下駄の鼻緒の銘柄を指定され、二階の倉庫で在庫数を調べるだけの簡単なことだった。店には相変わらず引っ切り無しに履物関係者のほかにも種々雑多な人々の出入があった。

「旦那さん、うちのせがれはたいした奴ですぜ。勝山公園で遊んでいて、ベンチの下に財布を見つけたんですよ。何と中身は十万円でしたぜ。お陰で久し振りに豪勢な家族旅行で

湯田温泉にのんびり浸かり、美味しいもん食って、本当に親孝行な息子ですよ」

上がり口で、粗大ゴミのお払いに呼んだ作業衣姿の親父さんがタバコをふかしていた。主人は苦笑いを浮かべて返事をしなかった。それは猫糞（ねこばば）じゃないかと思ったが、たしなめても無駄口になるだけで黙っていた。

一正直の頭に神宿る。修はそんな風に蔑られて育ったので釈然としなかった。かつて宝町から船場町にかけて、紫川沿いには廃品回収業の人達のバラックが立ち並んでいたそうだが、その頃もうそんな光景は無かった。

「井筒屋ともあろうものが、財力であんな薄汚いバラック建ての店を追っ払えないのか」と主人が訪問者によくぼやいた。確かに井筒屋デパートの勝山橋側に三、四軒の居酒屋などの三角地帯があり、著しく都市の美観を害していた。一体どこに住まいがあるのやら、玄関先に停めていたくだんの親父さんのリヤ

カーには、折り畳んだダンボール箱や金屑類で満杯だった。

## 二十四年の瀬の憂鬱

昭和三十七年も師走になった。修は幾許かの蓄えを手にしていった。朝食は抜きで、昼食にはアンパンやジャムパン、夕食は廉価な学食で済ませることが多かった。外回りの仕事先ではパンを買って公園か広場のベンチで齧り、雨天だったら人家の途絶えた地域の小屋の軒先を見つけて、人目を気遣いながらパンを貪り食った。誰にも見られたくない恥ずかしい光景だった。

年が改まったら当面、アルバイトをせずに世間並みの学生らしい生活をする決心をした。父親には正月に帰省した折に了承してもらおうと思った。主人にバイトを辞めることを告げるタイミングを見ながら過ごす破目になった。今日こそは、今日こそは、と思いながら歳末の寒い日々が過ぎていった。

「あんな！ちょっと使いに行ってくれ」と紺

屋町まで頼母子講の使いで、茶封筒を渡された。正直言っても頼母子講の何たるかを全然知らなかった。言われるままに紺屋町の家を訪ねた。薄暗い町筋、格子戸の玄関は開いていて、中から着物姿の老婦人が出て来た。

「さあ、どうぞ、お上がんなさい」照明の暗い家の中からガヤガヤと声がする。何か摩訶不思議な雰囲気、自分ごとき若造が足を踏み入れて良いのかと躊躇した。

「いえ、これをただ渡して来るように言われただけですから…」と茶封筒を差し出した。婦人は受け取ると、私に待つように告げて奥へと消えた。すぐに、

「お使いご苦労様、はい、これお土産ですよ」と森永キャラメル箱などが入ったビニール袋をもらって帰った。

「あんた、クジは引かなかったのかね」と主人の小さな眼が尖った。私はクジと聞いて当惑した。クジ引きは子供の時から駄菓子屋での楽しみだった。カバヤキャラメルだって、

ターザン一家の大当たり券に胸を弾ませて買ったものだ。

一頼母子講が、クジの当たりで集まった掛金を分配するものだを知っていたれば、こんな無様な失敗はしなかった。私は滑稽なことに、一つの達成感をもって、ガキの使いのお土産を主人に手渡したのだ。

「何がお土産かね…。クジも引かないで帰って来て…」の主人の叱声に意気消沈したが、ちょうど傍にいた大きな奥さんの、

「お父さん、若い人が頼母子講を知っているわけがないでしょう！クジを引くなんて知りませんよ」の声に救われた。頼母子講とは商家の慣わしで、歳末などの節季に一定の金額を供出し合い、それをクジ引きで当選順序に従って分配する金銭融通の仕組みだった。クジを引かなかつたら当選外で、外れのキャラメルみたいな子供だましの賞品を持って帰るだけだった。無知から仕出かしたことは言え、とんだピエロを演じてしまった。そんな

こともあって修は主人の信頼を喪失してしま  
った。何かと辛く当たられた気がする。

「あなた、涙をかんで来なさい。ジュルジュ  
ルと気色悪いよ」と風邪気味で鼻水を啜りな  
がら仕事をしていて叱られた。給金を貰うの  
だから、辛いのは仕方ないと悲哀を覚えなが  
ら、別室で涙をかんで戻った。

「ねえ、これを履いてよ。見ているだけで身  
体が冷えるわ」と若奥さんが中古の黒い靴下  
をポンと投げて寄越した。

「コートが汚いよ。もう洗濯したらどうかね  
え…」と大きな奥さんからも注意されるほど  
垢まみれの一張羅のダスターコートだった。  
修は徹底した儉約生活をするうちに、すっか  
り装いに無頓着になり指摘されてみて初めて  
気がつき恥じ入った。

## 二十五 東京憧憬

歳末が押し迫ると、カレンダー一贈答客の出  
入が増えた。

「これは又、何とまあ綺麗な女の人だねえ」

と主人がカレンダーの包みを広げていた。表紙がスキー帽姿の女優鰐淵晴子の顔の大写しだった。謹言実直な主人でも、若くて美人には目がなかった。大きな奥さんも、若い時分はミス佐賀といわれる程の美貌の人だった、と母から聞いた。

「東映会館のオープンに女優さんが来とったよ。あんだ、北条きく子って知ってるね。ちよつと話をしたが、あの人も綺麗な人だったなあ」と主人が一年位前の話をした。修も根っからの東映時代劇ファンで、田代百合子、桜町弘子、高千穂ひづる、丘さとみ、大川恵子…、お姫様役の女優の顔が浮かんだが、北条きく子とは初めて耳にする名前です首を傾げた。その頃はニューフェイスで、ずっと後になって靈感女優で名の売れた人だった。

そんなある日、おっとりした大柄な美人が若奥さんを訪ねて来た。女学校の同級生で近所の鍋島眼科の人だった。年末年始だから早めに里帰りした口振りだった。美しい人を目

のない主人は、若奥さんをさしおいて、相好を崩して彼女を呼び止めると長話をしていた。やがて、幼馴染の訪問に気が付いて、台所にいた若奥さんが炊事の手を休めてやって来た。女にしては図体の大きい方の若奥さんが華奢に見えるほど、その人はグラマー女優顔負けの体付きだった。熟れた肉体の婦人同士の弾むようなお喋りに修が気をとられていたら、富山さんが店の表から手招きをした。

「俺だったら、もう大将に何でも言えるよ。一生懸命店のために稼いでいるからね、ポーナスを前借りするよ。あんたの分も言ってやろうか？」と掃除しながら話しかけて来た。

「いいえ、自分も主人に相談したいことがあるからいいです」と修は断った。この富山さんの言葉を引き金に蛮勇が湧いて、出し抜けにこの年内一杯で仕事を辞めたい、と主人に申し出た。

「期末試験の成績が悪かったら、落第して三年の専門課程に進めません」

「あんたはうちの子と思っているがね。それなら分かったから、勉強に精を出しなさい。いっそ大晦日までいて、元旦に佐賀に帰ったらどうかね」

「夜中に藤原さんも尾渡さんも前川さんも集まって来て、除夜の鐘を聞きながら、揃って年越し蕎麦を食べるのよ。昔からの家（うち）の仕来たりに参加したらどうなのよ」と大きな奥さんも口添えをしたが、修は辞めると決心したからには、心も虚ろに聞き流し一刻も早くこの店から去りたいと思った。

ともかく意外と辞意の方は素直に受け入れられた。油売りで邪魔ばかりしていた旦過市場の藤原さんにだけは、年内でバイトを辞めることにしたと告げた。

「あんたも不思議な人だねえ。あんなに楽しそうに、ここへ顔を出していたのに。船場の親父さんとは親類みたいなもんじゃないかね。遠慮ばかりして、言いたいことを言わないから、辞めたくなったのだよ。朝から恍けたこ

とを言っ て、全 くし ょ う が な い 人 だ ね え」

その言 辞 は 正 鵠 を 得 て い た 。 当 初 に 父 母 を 交 え て 学 生 生 活 の あ り 方 を 模 索 し 、 あ れ や こ れ や と 決 め 事 を し て お け ば 良 か っ た の か も 知 れ な い 。 船 場 町 の バ イ ト 生 活 に も 名 残 は あ っ た 。 ゆ く ゆ く は 生 活 の 糧 に も 不 自 由 す る か と 杞 憂 し て 、 涙 が こ ぼ れ そ う に な っ た 。 冬 休 み は 年 末 の 店 の 出 入 り も 多 く 、 外 回 り を せ ず に 客 の 応 対 だ け で 過 ご し た 。 森 重 さ ん が 席 に い な い 時 に 金 銭 出 納 簿 を め く っ て 吃 驚 し た 。 た ま た ま 目 に し た ペ ー ジ の 項 目 欄 に 、 若 奥 さ ん の 力 強 い 筆 力 で 『 富 山 横 領 分 』 と 結 構 な 損 金 の 額 が 記 入 さ れ て い た 。 そ う い え ば 、 彼 は 休 み を 取 っ て い る と 聞 い て い た が 、 こ こ 数 日 姿 が 消 え た ま ま だ っ た 。 森 重 さ ん に そ っ と 訊 い た ら 、 新 年 か ら は 定 時 制 の 高 校 生 が 住 み 込 み 店 員 で 来 る と 教 え て く れ た 。 い よ い よ 、 年 も 押 し 詰 ま っ て 、 修 は 主 人 か ら 裏 門 司 の 恒 見 に あ る 老 人 ホ ー ム の 松 寿 園 ま で ス リ ッ パ の 配 達 を 仰 せ つ か っ た 。

「お父さん、恒見は遠いのよ。道を知らない人に運転は危ないでしょう！」と若奥さんが、大風呂敷に包んで間に合う分量だから、電車とバスで行くように助言してくれた。西鉄の路面電車を『門司』で降り、恒見行のバスに乗った。養老院に配達を終えたら、日暮れの様相になっていた。ちょうど恒見の停留所から、吉田経由小倉行というバスの発車間際で、足立山の南山麓を曾根・城野と回るコースで戻ることになった。

— 冬季の早い落日の刻で、正面の車窓に八幡の空が爛れていた。

夕日は赫々と燃えているのに、おのれの心神だけは寂び色の冷涼さを感じた。私は一面の赤い夕焼けに言い知れぬ憂愁を意識した。小倉も賑やかな都会なのに、この身に沁み入るような寂寥感の源が知れなかった。今にして想えば、この世に生きる寂しさを覚えたのだろうか。無性にもっと賑やかで華やいだ都会生活を願望した。

— 山のあなたの空遠く 幸い住むと人のい  
う — カール ブッセ (上田敏訳) より  
山の彼方に緑の谷や美しい村があるなんて、  
青臭い考えは持ったことはない。むしろ思春  
期になって、ラジオから流れる歌謡曲、東京  
午前三時、有楽町で逢いましょう、銀座九丁  
目は水の上、東京ナイトクラブなどのムード  
歌謡に惹かれ、大都会東京への憧れを募らせ  
ていたのだろう。

— 東京で暮らしてみたいという潜在意識が  
芽生えていた。大都会に居住したって、人間  
の孤独感が癒されるものではない、とは年を  
重ねてこそ悟り得ることだった。返って大都会  
こそ、人の孤立心を深刻にするものだ。そ  
んなこと、考えも及ばない未熟な年齢ではあ  
った。他国の空の下にいる冷え冷えした灰色  
の愁いを心底から覚え、その日はしきりと里  
心が湧いた。結局は大晦日の日の午前中にお  
暇をもらい、実家へのお土産に小倉玉屋で正  
月用の生菓子を買うと、一度食べてみたいと

いつも横目で睨んでいた魚町中銀通りと京町通りの角の寿司屋のバッテラ（鯖押寿司）も買って列車に乗った。

## 二十六 甘美な夢

昭和三十八年の実家での正月、父は不機嫌で、

「もう年はいらぬ。年をとるのは嫌だよ」と元旦恒例の鏡餅と蜜柑と干柿を飾った床の間の神棚を拝する習いを一人だけしなかった。どうやら、修が独断で履物問屋の親父さんのもとを離れたことが気に入らなかつたようだ。新年の祝い酒に酔うと、父は本音を洩らし出した。

「親父さんに、あなたの就職も頼むつもりでいるぞ」

「学校の先生になる予定だから、それは関係ないよ」

「教員は駄目だ！わしが一番嫌いな連中だ」

「社会の中堅の仕事じゃないか」

「自分達で勝手にそう思っているだけだ。あ

んたには会社員も向いてない。営業に出て金を稼がないと月給もらうのが辛いぞ。日本の大手の会社なんか、個人商店の図体がでかくなっただけだ」

「じゃあ、残るは役所しかないよ」

「月給は安くても公務員が良かろう。福利厚生がしっかりしているしな。でも試験が難しいから落ちるなよ」

英語・英文学を履修して、それと何の関係もない仕事につくのは本意でなかった。それなら生活の余裕もないのに、無理して大学に通っていることが無価値になるではないかと思っただが、父も酔った勢いの言葉であり額面通りには計れなかった。

冬休みが明けたら、北方新町の間借先へ直行した。母屋に主人が黒崎窯業に勤める主人夫婦と中学生の息子、小学生の娘の四人家族が住み、離れが廊下を挟んで学生用の三畳程の五つの小部屋に仕切られていた。廊下の突き当たりに共同便所と洗面所があった。炊事

場も洗濯機もなかった。修はずっとこの一年、履物問屋のバイトに精を出して来たので、この間借の学生達と碌に口を利かずに過ごしてしまった。

一居住の学生は、川内・市来・宮之城の鹿児島出身者が三人、宮崎の都城出身が一人だった。川内出身の者は部屋に炊飯器を持っており、時には庭に七輪を出して魚を焼いていたこともあった。他は、学食か徳力屋などの食堂を利用していたようだった。修は間借の部屋にいる時間が長くなったが、期末試験も間近で誰とも挨拶程度の接し方しかせずにごし、暖房器具の持ち合わせもないので、蒲団を背中から蓑虫のように被って勉強に精を出した。時々やたらに喉が渴いたので、電車通りに出て、商店の店先でジュースをラッパ呑みしたら、

「オオ、寒ッ！学生さん、見てる方が寒いよ」と店主のお婆さんが呆れていた。ラジオでは石原裕次郎の『赤いハンカチ』が流行っ

ていた。二番の歌詞の♪死ぬ気になればふたりとも霞の彼方に行かれたものを…の部分  
分が耳に障った。死ぬ気になるような女友達  
がいたわけでない。死というものを歌の文句  
でも文芸においても、若者は得てして甘美に  
捉えるものであるが、もしも現実自分が絶  
望の淵に嵌まったら、何処で死のうか、どん  
な方法で死のうか、いっそ足立山の山頂で服  
毒自殺でもしてやろうか、二十歳の誕生日を  
目前に奇妙な想念に襲われた。

—もちろん、未熟者にありがちな甘美な死  
の夢でしかない。本気で死ぬなど、これっぽ  
っちの度胸もなかった。バイトを辞めたら急  
に一人ぼっちの悲哀に襲われ、心神耗弱状態  
に陥落していたようだ。思えばずいぶん講義  
をサボっていた。この期に及んでノートの大  
半が白紙だし、テキストに辞書を引いた鉛筆  
書きのメモも少ない。まっさらのページが多  
過ぎて勉学に嫌気がした。理解不能な英単語  
の分量の重さに魘（うな）された。もし落第

など最悪の結果になったら、その時こそ向こう見ずに死を選択する覚悟も生まれていた、と今では思っている。

— 若者の心理は時計の振り子のように左右に揺さぶられ、発作的に何かを仕出かすか分からないものだ。

北方の大衆食堂で晩飯を食いながら、備え付けの新聞を読んでいる、履物問屋の親父さんの写真の掲載を見つけた。小倉城の鏡開きの様子で、大きな鏡餅の目方を読む姿だった。

— キャプションに小倉観光社社長とあった。自民党小倉支部幹事長にして元小倉市助役だから数多い肩書きがあったが、その中で小倉城主に相当する『小倉観光社長』が一番のお気に入りだったようだ。

親父さんは名文家としても鳴らし、葬儀での弔辞は声涙溢れると言われたそうだった。文章は大阪の奉公時代に寸暇を見つけては新聞を熟読し、気に入った記事を帳面に手書きして文章作成能力を鍛えたそうだ。修が見せ

てもらったことがあったのは、『よろず大阪一』という記事の写しだった。大阪一の美人、大阪一の背高ノッポ、大阪一のデブ、大阪一の金満家、大阪一の健啖家など、きりがなかった。

## 二十七 運命の出会い

少し春めいた日射しの三月初旬の午前中だった。修が間借先を出て大学の図書館に調べ物に向っていて、北方の電停で小林安司教授にばったりと出会った。先生が彼なんかに面識があるはずもなかった。一年生の時に、大講義室で大勢の学生の一員として漢文学の講義を受けただけで、個人的に話などしたこともなかった。ただ何となく親父さんの知り合いの先生だということ、ピョコリとお辞儀をしただけだった。

「キミが船場の履物問屋でバイトしていた者じゃないのか？」と呼び止められた。

一額の広い面長の顔、大きな耳朶のいかにも学者に生まれたという風貌の先生の眼が訝

しげに見えた。これは勘というものだろうか。  
否、学籍簿で顔写真をリサーチしたのだろうか。  
さもなければ、小林教授が一学生の顔を見覚えて  
いるはずもない。

「はい、そうです。もうバイトは辞めました」と  
瘦身の先生と対峙しながら、狐につままれた心地で  
答えた。

「店主が心配していたがね、キミは頑張っている  
じゃないか。私は中国語学科で米英科のキミに教える  
ことは何もないけど、これからも勉強しっかりやんな  
さい」と言うや、先生は魚町行のチンチン電車に乗り込  
まれた。

一親父さんが、修のことを心配してくれていたのだ。  
かたじけない気持ちになった。その後も在学中、先生  
と親しく話しをした記憶があんまりない。実際、そん  
な小林安司教授と末永く生涯のお付き合いをする運命  
が待っているとは、人生というものは変幻自在とい  
うか、有為転変というか、機微に伴う懐の深さとい  
うものか、人が生き抜く過程には底

知れぬものが待ち受けているもので、何とも  
言い様がない。何はともあれ無事に進級して  
嬉しかった。その日、北九州市発足祝いの米  
軍楽隊の平和通りパレードを見物したが、自  
分の生誕祝いのように晴れ晴れとした。

二十八 娘のような後妻

桜井修は三年生になった。五市合併で北九  
州市立の大学となった。学費に変更はなく年  
間一万二千元で、四期に分けて三千元ずつ納  
付した。この学費だけは実家が面倒見てくれ  
たが、生活費は自分で稼ぐように言われた。  
履物問屋のバイトで稼いだ蓄えも、高価な教  
科書代などでみるみるうちに目減りして心細  
かった。

一到津に母の遠縁の溝口将一さんが住んで  
いた。

修は、なるべく早く到津に挨拶しておくよ  
うにとの手紙を貰った。若い男女の従業員が  
十数人もいる、とても羽振りの良い暮らしを  
していた。

一到津の将一さんとは、八幡製鉄御用達で甘納豆や最中の売り上げで金が唸っている、いよいよ金に困った時は、話しをしてあるから頼って行きなさい、と父からの文面にもあった。

修は意を決して将一さんを訪ねた。到津に着いたのは、値千金と称される春の宵の刻だった。もう桜の花は散っていたが、何となく艶かしい空気が漂っていた。店に入ったら、奥の座敷が騒がしかった。

「おお、修君かね、良いところに来たな。上がんなさい」と一杯機嫌の将一さんから招き上げられた。二十人程の知らない顔ぶればかりで宴席はさんざめいていた。将一さんの面長の顔は酔って紅潮し上機嫌で歓待してくれた。

一奇異に思ったのは、壮年の将一さんと見較べたら娘みたいな人が割烹着姿で台所に立って洗い物をしていたことだった。

修は知らなかったが、将一さんは離婚して

店の若い事務員を後妻に娶り、その親類や知人を集めて入籍祝いをしていたのだった。大分県の日田に近い豊後森出身の人だと、喧騒なお喋りに聞き耳を立てて知った。

一前の奥さんは、まだ小学生の息子二人と娘一人を置いて家を去っていた。今でいう略奪婚だったのだろうか。後妻さんは綺麗なお姉さんという感じの人だった。適当な頃合でその人が宴席に呼ばれた。割烹着を脱ぐと、楚々と一座の衆を前に将一さんの隣りに座った。白いブラウスに黒いスカートの清楚な姿で微笑んでいた。リンゴに例えるなら、所作の一々に青リンゴの固さが感じられた。誰かが何か話しかけても寡黙にうなずくだけ、時々伏し目がちに料理に箸を伸ばしていた。戦国の世だったら、後妻討ち（うわなりうち）という怖ろしげな習いがあったのを時代小説で読んだことがある。その人の怯えていそうな姿は、先妻から何かの仕打ちを恐れているみたいに見えた。今ここに先妻が乗り

込んで来て、後妻と口論とか髪の毛の掴み合いの喧嘩でも始めたら大変な修羅場だ、と余計な心配もした。彼女の親類筋と見える男達がしきりに、何も心配するな、と激励していた。

一財力を持ったら、男とは若い女に目移りするものか、それとも女の方が金のある男にすり寄っていくものか、若い修には全く判然としなかった。全く知らない衆の中で、黙々とご馳走になりながら、ちゃっかりアルバイトの相談を忘れなかった。若干酔っ払って、当たって砕けろの破れかぶれの心境に追い詰められていたのだろう。

「あなたの母ちゃんから、息子に何かあったら助けてやってよ、と頼まれていたよ。早速だけど、うちの息子達の勉強をみてやってくれないかね」

「分かりました」

「あなたが赤ん坊の時に、卯三爺さんが初孫で可愛がったんだよ。珍しい菓子があったら、

修に食わせると言っただけで、俺達は情けなく指をくわえて見ていたよ」

これは後日知ったのだが、当時の北九州地区の離婚裁判史上最高額の慰謝料が六百万円とか七百万円とか、修の生活レベルでは、全く想像もつかない無縁な金額で前妻との離婚が成立していた。父の言った金が喰っているとはこのことか、と思った。

## 二十九 北九州文学

修は将一さんの伝手で、八幡の七条電停近くの国鉄（現JR）職員宅の中学生と、当の将一さんの小学生の息子達の家庭教師をしながら暮らすことになった。

一電車賃を少しでも浮かすために、運動靴を買ってバイトの帰途は魚町から北方までの約四十分の道程を歩いた。

やっと、学生生活らしい目途がついたので、念願の文芸部に入った。年に二回、六月と年末に機関誌『北九州文学』を三百部ずつ発行し、昼休みに学食のある厚生会館の前で販売

するが、その装丁印刷代は、冊子の売り上げ  
や学友会の助成金位で間に合うものではない。  
とにかく部員による広告獲得が大仕事だった。  
広告をもらって来たのに作品が掲載されない  
と不満で、早々に退部する者も珍しくなかつ  
た。真っ先に船場町の履物問屋を頼った。

「そうだな。上手な文章を書けるようになり  
なさい。もちろん協力してやるさ」と名文家  
を自負する主人は機嫌良かった。但し、広告  
の内容は履物問屋でなく『船場駐車場』でキ  
ャプションは[小倉船場町 明治屋角より五  
十メートル]だった。

—そこは戦中まで主人一家の住まいだった  
土地だった。駐車場はまだ土地を整備中で開  
業していなかった。次に羽振りの良い旦過市  
場支店の藤原さんにもお願いした。藤原さん  
は[北九州大学指定、履物ならなんでも！]  
と要望があった。ついでに、すっかり顔馴染  
みになっていた向かいの杉浦貸衣装店の女主  
人にもお願いし快諾された。問題は機関誌

『北九州文学』第十七号の上梓の後のことだった。

— 実は、旦過市場には、もう一軒「岡本履物店」があった。単なるライバル店の関係でなく、藤原さんと岡本店主が個人的に犬猿の仲だとは知らなかった。出来上がった機関誌を配付に藤原さんを訪ねたら、早速広告のページを開かれた。何と仲良く旦過市場支店と岡本履物店の広告が肩を並べていた。部員の誰かが岡本履物店からも広告をとっていたのだ。修は迂闊にも広告欄なんか眼中になかった。

「こんな野郎と一緒に並べて載せるなんて、気色悪いな！」と嫌味を言われ肩を竦め、頭を掻いて逃げるように立ち去った。だから、年末の『北九州文学』第十八号には、部長に頼んで岡本履物店から広告をとらないようにした。第十八号では、藤原さんから旦過市場支店と前川さんの北方市場支店の双方を併記するよう頼まれた。

一問題はもう一つ、前号では新入りの修の作品は掲載されないが、今度は何か発表しなければならぬ。修の作品が掲載されて、船場町の店主の目に触れることになる。

修は怖気づいて一計を案じ、『船場駐車場』は敬遠し、京町の老舗履物店『カクシン』に広告をお願いした。広告の謝礼に機関誌を持参し、名文家の店主から下手な作品を笑われたくなかった。学生時代『北九州文学』に掲載した一品を、青春時代への旧懐と含羞を込めて紹介しよう。

#### 海流

(遺書の中で姉は十六歳の少年に龍になれると云った)

不幸な姉は志摩の海に身を投げて死んだ。当時高等学校の生徒だった私は死体を確認し収納するため遠く紀伊半島東端に近い岬のホテルに行かねばならなかった。もう季節は初秋だったのだろうか。それとも南の海で発生した台風が本土に接近して来た

の だ ろ う か 。 妙 に 冷 や 冷 や し た 風 が コ バ ル  
ト 色 の 空 か ら 終 日 吹 き 込 ん で い た 。 翌 日 の  
午 後 私 は ホ テ ル の 支 配 人 に 連 れ ら れ て 姉 が  
た ま ゆ ら の 玉 の 緒 を 絶 っ た 現 場 を 尋 ね た 。  
そ こ は 岩 礁 の 累 々 た る 荒 磯 で 波 頭 が 白 く 裂  
け て 散 る 運 動 を い た ず ら に 繰 り 返 し て い た  
が 、 不 思 議 と そ れ に 調 和 し た 沖 の 波 々 と  
島 々 の 位 置 の 静 け さ 。 夕 暮 、 私 は 波 の 音 の  
響 く ホ テ ル の バ ル コ ニ ー の 籐 椅 子 に 腰 か け  
て 霧 が 流 れ る 海 上 を 見 つ め た 。 幾 年 月 を 経  
た 今 で も 私 の 臉 を 去 ら な い あ の 暮 方 の 燈 台  
と 燃 え る よ う な 紅 い 鉢 植 え の 木 。 紫 も 紺 色  
と も 判 別 せ ぬ 海 の 涯 の 乱 れ 雲 の 薄 い 残 照 。  
新 聞 は 姉 の 自 殺 死 の 原 因 を 恋 に 破 れ た 苦 痛  
だ と 報 じ た が そ れ は 誤 解 だ っ た と 確 信 す る 。  
彼 女 は 唯 だ あ の 岬 を 白 く 洗 う 冷 た い 海 流 の  
瞳 が 欲 し か っ た の だ 。 そ れ で 命 を 賭 け て み  
た だ け な の だ 。 あ の 晩 、 私 は 海 浜 ホ テ ル の  
一 室 で 光 を 形 質 し な が ら 眠 り 、 龍 に な っ た  
夢 を 見 て も の 哀 し く 目 覚 め た 。

今思っても、父母の仲人だった身内みたいな店主に恥ずかしくて見せられる代物ではない。

三十 熊本観光

夏休み前に恒例の『九州地区大学文芸部総連合大会』（九文連）に出席した。熊本地区の熊本大、熊本女子大、熊本商科大の共催だった。修は新入部員ながら志願して出席した。総会が終り小倉に帰ってから、

「ただ何かがあるのだろうと目標もなく参加するのはいけないことだ」と修にあてつけの批判めいた陰口を叩く下級生がいたことを知った。修の好みと程遠い難解な詩文を書いて自己満足している生意気な二年生だった。

— その男の持論だった。詩とは、ひたすら自分のために作るもので、絶対なるものを把握したいのだという。修は、あらためて我が道を征く、即ち抒情詩を創ることに意地を燃やした。

一人あってこそその世の中じゃないか。犬や猫にも読ませるのか。他の人間の感興を得ることにも考えなく、自己満足の社会的に無価値な詩作ばかりして何の意味があると言うのだ。

熊本へ行ったのは、同学年の高西正信（米英学科）、佐藤瑞光（中国学科）の両氏と修の三人に、西南女学院短大の二人を加えた五人連れで、いわば北九州地区代表という面をして、メイン会場の旧制五高名残の緑濃い熊本大学のキャンパスに乗り込んだ。初日の総会の印象は青臭い空疎な観念論のオン・パレードの印象しかない。夕刻のレセプション会場は熊本商科大学の学生食堂の一部を拝借していた。文芸部顧問の教授の歓迎挨拶中、体育会系のタイツ姿の連中が他校の女子大生の姿を見て興奮したのか、はしゃぎ騒ぐ声が喧しかった。先生が静かにするよう注意したら、一人がわざとドシン、ドシンと床を踏み鳴らして出て行った。そんな小児的な自己顕示欲は笑うしかないが、修自身も又そんな偏狭

な心理を持ち合わせていたかも知れない。人間の感情なんて似たり寄ったりで、それをアクションに移すかどうかは問題だと思う。

— その先生は、諸君の作品を読むのに大層な努力と忍耐が必要で、一つの拷問みたいなものだ、と皆を苦笑させた。翌日は分科会で、修は西南女学院の朝田さんらと詩部門のシンポジウムに参加した。やはり、批評の対象として提出のガリ版刷りの詩の冊子は、修にとって難解を通り越したチンプンカンプンな言葉の羅列で、何とも言いようがなかった。結局、地元の済々黉高校卒の佐藤瑞光氏の案内で、蒸し風呂さながらの夏の熊本の繁華な街路、名所熊本城など、汗を滴らせての観光だけが思い出に残った。

— 帰途は大変、人身事故で鹿児島本線の上り列車の復旧の目途が立たず、仕方なく阿蘇を通過して大分に出る豊肥線に振り替え乗車を余儀なくされた。外輪山を抜ける長いトンネルでは、車内に蒸気機関車の煙が充満し、乗

客の男達が不貞腐れて吸うタバコの煙も混じって息苦しく、窓外の暗闇と轟音を恨めしく思った。大分から日豊本線の夜行列車で小倉へと向った。みんな疲れて目を瞑っていた。別府を過ぎる時に、修は一人窓外の黒い影をなす鶴見連峰の中腹の鉄輪の仄かな町灯りを眺めた。早寝の祖父母はとっくに寢床に就いたか、従妹の佐智子はまだ勉強しているのかな、と想像した。

小倉に到着した頃は、もう深夜一時半を回っていた。朝田さんらは自宅のある黒原へタクシーで向った。連れの女子は自宅に泊めるのだろう。修らは四年生の松田文芸部長が住む北方市場二階のアパートへ向った。九文連の次第を報告するためだった。まだ学生にあっては宵の口みたいな時間帯であって、先輩は、

「今、魚を食べたばかりだから臭いだろう。それにしても事故とは大変で疲れたろう」と労いながら消臭スプレーを四方に吹きまくっ

た。四人で明け方まで雑談したが、修は念願の「抒情詩集」を発行したい旨を部長に熱弁して了承を得た。当時、北九州地区の大学生の詩は、北九大の『北九州文学』、同大詩部門の『奔流』、西南女学院短大の『秋霜』『凸凹』、東筑紫短大の同好会の『むぎ』、それに北九州地区大学文芸協議会の『炎群』の印刷物があった。九工大や八幡大ではガリ版刷りの冊子を発行していたと思う。

三十一 再び船場町へ

夏休み直前の頃だった。涼しげなベージュ色のスーツの小林安司教授と廊下で出会ったので挨拶した。

「船場町の親父さんは元気にしているかね？」

「最近は無沙汰しています。今は駐車場経営にも手を広げられていますよ」と形通りの挨拶に続けて、文芸部の中に同好会『抒情文芸研究会』を設け、詩集発行を計画しているので、その折には顧問になっていただけない

か、せめて挨拶の一文でも書いていただけな  
いかと相談した。

「文芸部には佐藤教授が顧問でいるじゃない  
かね。僕はそういうのは遠慮するよ」とあっ  
さり断られた。

修の頼りは文芸部同志の大本さんだった。  
下級生を「さん付け」で呼ぶのは、彼の方が  
ずっと年上だったからだ。彼の助言で、抒情  
詩ならむしろ女子大生の方が得意だろうと、  
熊本にご一緒したばかりの西南女学院の朝田  
さんに原稿募集の協力依頼をした。朝田さん  
は文芸仲間を引き連れて北方を訪れた。

一平素は殺風景な北九大文芸部室が、突然  
煌びやかな花園になった。修の抒情詩に対す  
る情熱は共感してもらえたようで、夏休み明  
けの九月には原稿を持参してくれる約束にな  
った。夏休みの帰省前に、船場町の履物問屋  
に何気なく挨拶したら、逆に相談があった。  
すでに『船場駐車場』はオープンしていた。  
夏休み明けから詰所の二階に寝泊りしたらど

うか、という話だった。ガスコンロ、洗面所、トイレの設備はあった。駐車場の営業時間は、午前八時半から午後十時まで、時間外の夜間の車両の出入庫はなく、客の相手もないので、家賃なしで自由に住居として使えるとは有り難い話だった。遅番の仕事を手伝えば、今やっている家庭教師代以上の報酬を支払ってくれるというので、私は取り敢えず北方新町の間借を解約して、船場駐車場管理事務所の二階に僅かな荷物を移した。家庭教師のバイトをしていた七条の家には断りの挨拶に行った。

「息子が、もう英語は自信がついたので、今度は数学の勉強に身を入れたいと言っていますよ。こちらも九工大の学生さんに勉強を頼もうと相談していたところですよ」とあっさりしたものだ。その足で、将一さんの店舗にも顔を出した。

「あなたの良いようにしなさい。どうせ息子達はろくに勉強しなかつたろう。あなたが帰った後で、拳骨を振り上げて勉強しろと何度

も叱ったんだよ」と笑われた。

— 確かにこの家の息子達はお兄さんと懐いてくれたが、その日教室で起きたことのお喋りばかりで勉強を嫌った。修は親の影を感じなかったが、どこからか親は子供の姿を見ているものだ。勉強が終る頃を見計らって若い後妻さんが来ると、映画館の招待券をくれた。大映、日活、東映、東宝と選り取り見取りだった。適当に一、二枚もらって帰ったが、何の映画を見たのかサッパリ記憶がない。その点、自身が身銭をはたいて三郎丸界限のオンボロ映画館で見た大映の『御身』は、今でもおぼろげに筋まで覚えている。叶順子二十六歳の女優として脂の乗った盛りの作品だった。やはり身銭を切らないと何事も身に付かないようだ。

三十二 相場師と起重機操縦士

九月から船場駐車場の詰所に住み込んだ。駐車スペースの大半が井筒屋デパートの配達車で占められていた。元小倉市助役で自民党

小倉支部長の親父さんは、さすがに顔が広く  
駐車場開所式の祝いの宴で、来賓代表で乾杯  
の音頭をとったのは、井筒屋社長の菊池安右  
衛門さんだったそうである。駐車場の管理人  
は冗舌な赤座さんと寡黙な米倉さんという、  
全く対照的なタイプの二人だった。赤座さん  
は下関から通う元相場師だった。本人の口か  
ら聞いたのではない。到津の将一さんが、所  
用の帰りに船場駐車場に立寄った。赤座さん  
を一目見るなり、修を表の路上に誘い出した。  
夕刻の六時頃だったと思う。バイトは七時か  
らでよかったが、その日の午後に受講や部活  
もなかったら、早めに駐車場詰所に入り雑談  
をする日々だった。

将一さんは路上に停めた自分のライトバン  
を常々チンドン屋みたいな車だろうと笑って  
いたが、実際ボディを赤と青の仕様の明治屋  
の宣伝でスッポリ塗装していた。これも商取  
引上の付き合いだろう。

「あんな、凄い男と一緒にいるじゃないか

ね！あの男の素性を知っているのかい？」

「いや、何も聞いていませんよ」

「もうだいぶ前で時効だろうが、あいつはお尋ね者で新聞にデカデカと載ったことがあるぞ！下関の小豆相場で何億円も穴をあけて遁ずらし、地下に潜っていた奴だよ。とにかく気を付けろよ」と言うのと運転台に乗り込み去って行った。

— 赤座さんは確かに大言壮語する人だった。だが、その愉快的話し振りに修は聞き入り飽きなかった。

「あんたは戦争の話が好きなのだね。僕は運だけで戦地から生還したんじゃないよ。頭は生きているうちに使うもんだよ。敵陣から大砲の弾が飛んで来たら、そこに着弾の大きな穴が出来るんだ。僕はすぐにその穴の中へ飛び込んだよ。仲間の兵隊と一緒に入れと誘うのだが、みんな怖がって入って来ないんだ。一度弾が落ちた痕には二度と弾は飛んで来ないのに、そういう臆病者に限って、うろたえ

て敵の弾にやられたんだ」と得意満面だった。

「鉄甲の緒を固く締めろと言うだろう。あれは大間違いだからね。僕はいつも緩々（ゆるゆる）に被っていたよ。その方が、弾が甲に当たっても跳ね返って、横っちょに弾くのだよ。一度眉間に命中したね。やられたと覚悟したが、何ともないんだ。甲の緒を緩めていたから、弾が甲の内側を一周して外に出たんだよ」とこれはどうも眉唾ものだが語り口が面白かった。髪に白毛が雑じっていたが、浅黒く日焼けした肌も精悍で、眉目の彫りの深い頑丈な体格の初老の紳士だった。

米倉さんは、八幡製鉄の関連会社で主に起重機の操縦ばかりして定年になり、管理人に採用された人だった。まるで口を開いたら損とでも考えているような小柄な老人だった。いかにもブルーカラーの出の地味さが、元相場師の赤座さんと対照的だった。

三十三 マダムと若奥さん

残暑も消えた秋口のある日、赤座さんから

頼み事をされた。

「若松の競艇場にどうしても行きたいんだよ。  
明日の二時にここにきてくれないかね。勝つ  
たらお礼をするよ」

修は競艇について蘊蓄を垂れられた。人が  
操縦する競輪は、選手の手心自在で予想は全  
くあてにならない。畜生が走る競馬も走って  
みないと判らない。大方が運任せで予想は難  
しいそうだ。

「モーターボートは機械だから正直なんだ。  
メカは嘘を付かないんだよ。最初に試走のエ  
ンジン音の調子とタイムをきちんと計れば予  
想を裏切られることは少ないよ。配当の儲け  
幅は少ないけど、固いギャンブルなんだ」と  
カバンに忍ばせていたストップウォッチ二個  
が並列に嵌め込まれた手製の板盤を見せてく  
れた。常時携帯しているとは根っからのギヤ  
ンブラーか、それとも家人には見せられない  
ものだったのかも知れない。翌日、午後は必  
須科目がなかったので、赤座さんの期待に応

えて二時に駐車場に着いた。

「戸畑からタクシー疾ばして帰るから心配しなさんなよ」と赤座さんは、秘密兵器を忍ばせたカバンを提げていそいそと出かけた。ギャンブルの虫が騒いでいたのだろう。船場駐車場は月極車両がほとんどで、飛び込み客は滅多にいなかった。

一月極客にはキーボックスに吊り下げたエンジンキーを手渡せば良かった。飛び込みの客には空いたスペースに適当に駐車してもらい、キーを預かり時間などを手書きした預り書を交付した。

魚町銀天街の洋裁店の車両の出入は激しかった。黒いバリツとしたハンサムな背広姿の店員が来たかと思うと、入れ替わるようにシックな洋装のマダムが瀟洒な乗用車から颯爽と降りて来て、微笑みながらキーを差し出した。時には白い細面の美貌に粋なサングラスをかけていた。

「ありゃ、一緒に寝てみたいいい女だなあ。

本店の若奥さんもチャキチャキと確りした人  
だけど、女の色気で二人を勝負させたら、て  
んで歯が立たないだろうね。マダムのKO勝  
ちだね」と平素から赤座さんも目尻を下げて  
軽口を叩く程にお気に入りの女人だった。修  
も態々（わざわざ）首を回して去って行く黒  
いタイトスカートの裾から伸びた白くて細い  
ふくらはぎに見惚れたものだった。

だが、修にとって若奥さんは身内みたいな  
人だった。鼻頂目かも知れないが、いかに洋  
裁店の女主人の粉黛を凝らした容姿に優雅さ  
があっても、見較べてしなやかな柳腰から生  
えたように長い脚、顔も知的に瑞々しい若奥  
さんが女の器量で熟年マダムに負けているな  
んて、赤座さんの言い草が気に食わなかった。  
お相撲好きの若奥さんにふらちな妄想を逞し  
くすれば、マダムなんか若奥さんの長い脚で  
刈られて転ばされ無様に尻餅をつくだろう。  
マダムの方こそやつつけられて完敗さ、と赤  
座さんに内心で反駁して溜飲をさげた。

三十四 酔っ払いにヤクザ

赤座さんの代わりに自動車の番をしつつ、飛び込み客もないので、所在無く表の通りを見つめていた。小腹がすいたら駐車場の隣りにあった天理教会の入口のちっぽけなタコ焼き屋に行った。店の親父さんは、「配達してあげるよ」と愛想良く返事し、すぐに前掛け姿で長靴の足音をペタペタと立てながら持参した。佐賀にタコ焼き屋は見かけず、小倉に出て来て初めてタコ焼きの味を知った。

— 独特の臭みのある醤油タレに削り節や青海苔がタツプリかかったタコ焼きは癖になる味で何度か注文した。今になっても本場大阪のタコ焼きより、あの頃に食べた小倉の『天理教のタコ焼き』が旨いと思う。人の舌は最初に気に入った味を生涯最高と思うのかも知れない。

前日の晩の九時頃だった。いつ場内に忍び込んでいたのか、三十代と思しきネズミ顔の

男が何と奥の開けていた窓から飛び込んで来た。床に這い蹲ったまま男は小声で言った。

「おい、ちょっと助けてくれよ。紫川で女を冷やかしていたら、男に追っかけられたんだ」と哀れな目つきだった。誰も追っかけて来た者はいなかった。男は安心して立ち上がった。修も夜遅く船場町の通りを歩いていただけで、

「坊や、ちょっと遊んで行きなさい。ねえ、坊や！」と後ろから和服の年増女に低く野太い声でしつこく付き纏われ閉口したことがあった。紫川沿いの道路は進駐軍がいた時代から、春を売る女の名所で、警察が何度取り締まりしても、イタチごっこだったそうだ。

「学生さん、アルバイトとは感心だな。俺は長崎の五島の出身だよ。日雇いで毎日大変なんだよ」と貧相な男は薄汚れた開襟シャツにヨレヨレのズボン姿で、基よりホワイトカラー一族には見えなく、やはり肉体労働に従事している口振りだった。やっとなどぼりが褪

めたのか、

「仕事の邪魔をして悪かったな。学生さんよ、お礼だ！あんに五百円やるからお釣りをくれ」と男がポケットから千円札を取り出した。ラーメンの七、八杯も食える金額だったが、お釣りをくれとは胡乱でけち臭い奴、お金をもらうのも嫌気がした。差し出されたお札の受取を丁重に断った。

「ヤイ、俺の折角の好意の銭がもらえんと言うのか」

「いや、別に、自分は何もしていませんから…。ただここで仕事をしていただけですからね、頼みますから帰ってくださいよ」と平身低頭して安酒の臭いのプンプンする男に立ち去ってもらった。

赤座さんは休日に単車のハーレーを乗り回していると言った。駐車場は客が勝手な場所に適当に駐車していたが、彼は実にまめに預ったキーを握っては、車のエンジンをかけて移動させ、せっせと空きスペースを広げてい

た。それよりか、駐車スペース作りを名目には様々なタイプの車両の運転を楽しむマニアと  
思えた。

このバイトを始めて二日目の夕刻だった。  
駐車場に顔を出した途端、

「あんた、大学で呼び出し放送されなかったかい？」と赤座さんの出し抜きの質問だった。  
小倉署の刑事が来たそうだと。駐車券を調べて、クシャクシャの一枚を押収して行ったという。

「男が車を出しに来た時、あんたが書いた字の預かり書で、皺くちやだったから変だなあ  
と思ったよ。角刈りのアンチャンだったよ。  
返してやったけど、前の晩に預けた者と同一人物かどうかは、アルバイトの学生に聞いて  
みないと解らないと答えておいたよ」

「いいえ、学校で呼び出し放送なんか聴きませんでしたよ」

言われてから明瞭にその男の人相、着衣を思い浮かべた。黒い高級車を駐めると窓口に  
来たのは、見るからにヤクザ風な五分刈り頭

で、細い目から鋭利な眼光を放っていた。年の頃は三十前後に見えた。紺色に縦縞の入った背広を着ていた。決まりで車のキーは詰所に預かることになっていた。

「鍵なんか預けられんよ！」と男はぶっきら棒に断ると、あっ気にとられている修をひと睨みしスタスタと道路へ出て行った。その晩、ネオン街のビルの一室でヤクザの殴り込みの傷害事件があったそうで、その男もその一味だと思った。だが、その後も警察から修への呼び出しはなかった。皺くちやになった車の預り書を持って来たのは、その際の乱闘のせいではなかったのかと思っている。

三十五根っからのギャンブラー

その日、赤座さんはきちんと約束の時刻にタクシーで戻った。

「いやあ、済まなかったねえ。最終レースで大失敗したよ。最初は調子良く勝っていたがね。十五万程貯まったから、百万円にしよう」と最終レースに有金を全部ぶち込んだら大ス

力だったよ」と大外れしたのに落胆もなく普段の顔付きで語った。修はギャンブラーとは一風変わった太っ腹な思考をする人達だと知った。初手から端金を手にする気がないのだ。勝負に勝つことに拘りがあり、せっせと小金を稼ぐことを潔しとしない人達で、修のようにコツコツと金を貯めねばならない暮らしの者には真似もしたくなかった。

—もう片方の相棒の元起重機屋の米倉さんと二人だけの時に、赤座さんを話のネタにしたことがあった。

「わしは赤座さんに忠告したんだよ。何でレースに勝っている最中に止めないのかね、何ですってんてんになるまでやるのかね、とね。折角勝っているのだったら、せめて帰りのタクシー一代の千円札だけでも、その時にポケットにしまっておきなあってね」

修もその意見に異存はなかった。現役をひたすら起重機の操作で慎重に過ごした人と、切った、張ったと相場で暮らした人では、思

考回路が全く違うのだらうけど、若い修の心も一か八かというギャンブラーの心象とは乖離を覚え理解に苦しんだ。

「この前、米倉の爺様にタクシー代位は残しておけ、と意見されたからね。戸畑からタクシー疾ばして帰って来たよ」と始めて口元を綻ばせた。結局、修に一銭のご褒美もなかったが、元々期待もしていなかった。

### 三十六 スター専科

ある夕刻、赤座さんも帰宅の途に出て、修が一人勤務していたら、見覚えのある顔が詰所に入ってきた。

「ここにいたのかね。やっと探し当てたよ。部屋を出る時はきれいにしてくれないと困るね。壁の写真を引っ剥がすのに大変だったよ」と間借していた北方新町の家主で、通勤の帰りに一言文句を言い立ち寄ったという。元々漆喰に落剥もある汚い土壁だったので、読み終えた週刊誌の表紙なんかを貼っていた。映画女優ばかりで、岸恵子、有馬稲子、久我

美子、岡田茉莉子、浅丘ルリ子、北原三枝、  
南田洋子、吉永小百合、司葉子、小山明子、  
山本富士子、若尾文子、八千草薫、丘さとみ、  
大川恵子、佐久間良子、三田佳子等々、錚々  
たる人気スターばかりだった。この女優達が  
住んでいる大都会への居住願望が腹の中に膨  
らんでいと思う。一枚、一枚と貼っているう  
ちに、いつしか壁一面になってしまっていた。

一田舎育ちの修にとって、類稀なる女神の  
ような美女ばかりで、勿体なくてそのままに  
して部屋を出たが、やはり常軌を逸した行動  
だった。

修は素直に詫びを言うしかなかったが、家  
主もひとくされ文句を垂れたら気が晴れたの  
か、すぐにバイト頑張りなさい、と励まして  
出て行った。

部室では抒情詩の原稿が集まりだした。四  
年生の松田文芸部長を筆頭に四人が協力して  
くれた。西南女学院の朝田さんが部員の詩を  
持参した。その他、桜井修の詩のファンの女

子演劇部員が紹介の者や、イデオロギー抜きに付かず離れずの関係の村山信吉が紹介の者からも抒情詩の提供があり、都合自分の作品も含めて二十五編の詩と短歌七首が手元に集まった。

— 小冊子の詩集を発行するには十分な量だった。十一月二日から十日まで大学祭で、修は文芸ゼミナールで『井上靖詩集について』の演目で発表することが決まっていた。キャッチコピーは“主に彼の詩集「北国」についての詩精神を”だった。

— 散文詩特有の言語感覚、『作者の客観的で冷静な観察は現代にどのような可能性を示唆しているのか』。

小賢しいことを書いたのも若気の至りだろう。それまでに、何とんでも抒情詩集の上梓を完了しておこうと決意した。十月になつたら佐賀へ帰省し親戚の印刷所に原稿を持ち込む算段を立てた。それにしても圧倒的に女性の作品が多い詩集は、百花繚乱の華やぎがあ

り、スター専科の面目躍如の観がした。

### 三十七 三姉妹

朝夕が冷えて秋の気配も濃くなった九月下旬、履物問屋気付きで別府の春子祖母さんから手紙が届いた。祖母は後妻で血の繋がりはなくとも、修にとっては生まれついで祖母だった。祖母の実弟が紺屋町に住んでいた。それは父母からも聞いていたが、以前から家同士の付き合いはなかった。手紙には、近所に自分の第一家が住んでいるから、日曜日にも遊びに行ってきたさい、と記してあった。早速次の日曜日に訪ねた。

一何と驚いたことに一軒家を構えているのに、表通りに面した木工所の中を断って抜けないと玄関に辿り着けない。家は奥まった土地に建っていた。木工所が閉まった夜間や休日などは、何処か細い路地裏から入られるのかも知れない。あらかじめ電話連絡して訪ねたので一家揃って待っていた。主人は魚町銀天街の背広屋の店員だった。前職は鍛冶屋だ

ったと聞いて仰天した。

一汗まみれで熱い鉄塊を一徹に叩く鍛冶屋の親父さんの姿。そんなイメージはない人だった。だが、繁華街のお洒落な店舗で来客に柔和に対応される姿を想像するには落差があり過ぎた。奥さんは手紙に書いてあったように慢性の偏頭痛持ちで、時には愛想の笑みを見せたが終始浮かない顔をしていた。奥さんに、

「北方ってずいぶん田舎ね」と真顔で言われたが、小倉の都心部とはいえ、こんな路地裏にいて北方を小馬鹿にする滑稽な口振りにはあきれた。子供達は三姉妹と末っ子の中学生の息子の四人だった。

「九大に行っているのね」と粉黛の濃い長女が言った。

「いいえ、小倉の大学です」と修は福岡市の旧帝大生と間違われたのかと慌てて答えた。

「じゃあ、やっぱり九大生じゃないの」と念を押された。小倉の人には、北九州大学生を

九大生と呼んでいる人達がいるのだ。長女は修より五歳位年長であり、仕事は夜の接待業のため、お客さんとの話題作りに新聞記事には念入りに目を通して出勤すること。次女も二歳ほど年上で、魚町銀天街の玩具屋の店員さんだった。

「友達と三人連れで鉄輪のお祖母ちゃんの家泊まったことがありますよ。温泉三昧と地獄巡りの楽しい旅でした」と笑みを絶やさないう人だった。三女は修と同じ年だった。あまりお喋りはせず、戸畑の缶詰工場に勤め、年から年中出刃包丁を手には、鯖の頭と尾っぽを切り落としたり、腹を割いて腸を出したり、適度な大きさに輪切りしたり、単純作業の明け暮れで、すっかり仕事に愛想を尽かした憂鬱な顔つきだった。

一中学生の息子は、客の訪れにも表情ひとつ変えず寡黙で反抗的な年頃だった。大人に楯突いて子供は育つものだ、と自らを省みて思った。

「うちのお父さんは太鼓打ちの名人だったのよ」と祇園太鼓の話題を奥さんが口にした。

「うん、口で説明するのは難しいな。とっても厄介な撥捌きがあってね、紺屋町でそれが出来たのは、私一人だったよ」と主人は満更でもない顔をした。修は昼飯をご馳走になったが、最初から湯飲み茶碗にお茶を注がれ、皆がお茶を飲みながら食事するのが風変わりに見えた。佐賀の実家では食事が済んで、初めて母がおもむろに湯飲み茶碗を取り出し、ヤカンの番茶を注いで飲んでいた。考えてみたら、鉄輪の祖父母宅では、佐賀県人の祖父は食事の終いに茶を飲み、小倉育ちの祖母はお茶を飲みながら食べ物を口に運んでいた光景を思い出した。長女に高校時代のアルバムを見せたら、トップページの遠い山並を背にした校舎の写真を見るなり、

「まあ、こんな田舎の学校を出たの」と呆れた顔をされて心に深手を負った。大学を出たら、闇雲に大都会の東京へ出てやる。心の芽

が、もはや苗へと育っていたと思う。

三十八 秋天高い日

十月の月上旬、駐車場のバイトを休ませてもらい、抒情詩集の原稿を携えて帰省した。詩集の印刷は父の口利きで、同じ町会の印刷所に依頼していた。夜遅く着いて町の銭湯へ行った。風呂上りの家路に近道の裏小路へ入ったら、秋の夜風に銀木犀の花の香りが一面に漂っていた。修は詩集の題名を迷わずに『木犀』とした。町会世話役の印刷店主が開口一番に懸念した。

「広告を取らなかつたのかね！」

「ええ、売り上げで何とかしますよ」

清水の舞台から飛び降りるとか、底なし沼に踏み込むような豪胆な気持ちはなかったが、泥の水溜まりにジャブッと足を突っ込む程の向こう見ずさはあった。何か季節感のある巻頭詩を置くようにアドバイスされたので、急遽徳富蘆花の詩文から引いた。

柿の落葉を踏みて後山に登る。

黄 芽 蕭 々 と し て 乱 れ 、 龍 膽 の 碧  
棘 の 實 の 紅 と 徑 を 綴 る

敢えて原文通りに旧漢字として威厳を示した積もりだった。編集後記には、難解な現代詩を作る連中への常日頃の鬱憤を込めて、思いの丈を署名入りで綴った。

【「木犀」は抒情詩集である。何故に抒情文芸に限られるか？疑念を抱かれる人もいると思う。我々は繁雑で飢渴した現代社会に、忘れられがちな遠い祖先から育まれて来た、伝統的な叙情性の復興を思うのであるし、又現代的な叙情性を研究してゆくのである。

いかなる時代においても、人は本能的に叙情性を求めるものである。そのような目的から「木犀」を創刊したのである。すなわち、形而上学的ポーズの難解現代詩に刺激されたせいもあるが、先ずとかく行き詰った、今日、評される抒情詩的世界に今一度、立ちいり、そこに何か新しい文学の可能性を期待するのである。しかしそれはもとより至難な業であ

れば茫洋とするのみだが、若い詩への情熱で秋も深い日、未熟ながら詩集を発行できた事を喜ぶものである】

原稿を印刷所に届けた日、遠く山脈の頂きに白雲が悠々と流れ、秋空は高く澄み切っていた。

### 三十九 木犀の花の香り

念願の抒情詩集『木犀』は大学祭や、その後の北九州地区大学文芸協議会の交流の場で、あの手この手の人脈で、八方手を尽くして売り捌いた。精々二十頁の小冊子を三百円で売る目算は仲間の猛反対で潰され、結局は一部百円で頒布した。ほぼ完売はしたが、当然ながら印刷代の請求額に遙かに届くものでなく、貧乏学生の修が残額を月賦払いにし、やっとこさ完納したのは、何と大学卒業間際の三月だった。広告取りを端折ったツケは大きかった。

— 小林安司教授にも話を持ち込んだ行き掛かり上、一冊贈呈した覚えがある。どんなコ

メントがあったか全く記憶にない。西南女学院の朝田さんからは、修が独断で原稿を添削したことに、憤慨までとはいかなくとも皮肉は言われたし、協力校として勝手に短大名を記載したことも校則に触れると文句をつけられ、青春のほろ苦い体験となった。しかし、詩集を発行したことで、修の文芸部での立居地も自ずと明確になった。何よりも文芸部以外にも交流の人脈が拡大した。そうなる問題とはバイトと住環境だった。何よりも日曜の休みもない夜の駐車場管理を辛く感じた。家賃が不要で生活費も稼げるメリットはあったが、広がった交友に支障を覚えた。夜のコンパに誘われても断らざるを得なくて空しかった。

— 余程の急用でもない限り、主人の家人に代理を頼むわけにはいかない。それに朝の清掃の小母さんには当初から困惑した。

船場町の路地裏の住人だった。朝の建物清掃を幾つも掛け持ちしていて、船場駐車場が

一番乗りだった。呼鈴を押すと大音響のベルの音が狭い部屋に鳴り響いた。朝六時ジャスト、夢うつつの安眠を爆裂させるが如きこのベル音には、自然と不機嫌にさせられた。だが、この小母さんも仕事で詮方ないのだろう、と思うと口に出して文句は言えず、腹に憤懣だけが貯まりに貯まった。それで階段を降りて、相手の朝の挨拶に無言で目一杯不機嫌な顔を晒し、精一杯の抗議の意思を示して憂さ晴らしをした。小母さんは手際よく窓を拭き床を掃き、便所や洗面所を磨くと、丁寧に一礼し次の建物へと向った。十一月になったら、駐車場のバイトにすっかり嫌気がさした。現代思想研究部の村山信吉に、このバイトの後任に誰か後輩を紹介してくれないかと相談した。早速、後輩を連れて来た。

「家賃がタダとは良いことやがな。この兄ちゃん、吹田の出身なんや。親の仕送りが乏しうて苦勞しよるで、助けてやりいな」と堺出身の彼は得意気に鼻の穴をふくらませた。修

は、黒縁メガネにあごの張った実直そうな後輩のブレザーの襟に『日中友好協会』のバッジが張り付いていたのが気になったが、ともかく主人に紹介して了解を得た。その後輩はしっかりしていて、きちんと勤務条件を交渉し、朝の六時起床は七時半に変え、赤座さん、米倉さんとシフトを交渉し、しっかりと休日確保していた。修は、父母の仲人だった人ゆえに、主人と身内同然なものを覚えて、その辺のことを曖昧に遠慮して、自らの首を縛っていたのかも知れない。

#### 四十 葉山荘の青春

さて、秋も長けて勝山公園の木々の葉も彩りを深めた十一月半ば、修は学生課の斡旋で北方の葉山荘という二階建て木造アパートの一室に入居した。北九大生が十二、三人ほど暮らしていた。月額八千円で夕食と共同風呂付、各部屋とも六畳二間で奥の窓際の板張りに洗面所とトイレがあり、部屋は襖で仕切られ二人入居となっていた。修は一年後輩で岩

国出身の商学部の山村君と相部屋だった。

「皆さん、ご飯ですよ」と夕食の準備が出来たら大柄な体格の大家の娘さんが触れて回った。夕食は五時から七時の間に大家宅の食堂で供された。ご飯は娘さんが甲斐甲斐しく装ってくれた。風呂場はアパートの庭に小屋がけで、週に三回焚かれ、九時までのオープンだった。大家さんの家族は、五十代の一癖も二癖もありそうな浅黒い角顔の主人と小太りで上品な奥さん、それに二十歳過ぎの瞳の大きな娘さんとおませな口をきく女子中学生の四人暮らしだった。奥さんも文学少女だった。そう、早速スペアの詩集『木犀』を贈呈したら大層喜ばれた。

一奥さんの不満は、普段から主人がろくに家事もせず、昼間はごろ寝、暗くなるとふらりと酒場に出かける甲斐性なしということだった。

大勢の学生の晩飯を毎日休みなしで準備するのは、女衆にとって大変な労務だったと思

う。もちろん、冬休み、春休み、夏休みは学生もアパートを空けて帰省したので、その間が家族の休暇だった。アパート代の月額八千円は、帰省して食事をしなくても変わらないという決まりだった。これを不満に思う者はいたが、食事は普段から結構なご馳走が出ていたので、大家さんに面と向かって文句をつけなかった。要するに、飯を食おうが食うまいが、住んでいようがいまいが、定額だということだ。

「男は家にいるだけで価値があるものだ。女だけの世帯だったら、世間に見くびられて大損するんだぞ」と群れを率いる牡ライオンみたいな主人の言い草だった。確かに学生を黙らせる迫力のある面構えだった。奥さんは、修が文芸部員と知って親しく話し掛けてくれ、亭主の愚痴も聞かされた。主人も相当な不良中年で、我々学生が食後に女談義をしていたら、薄ら笑いを浮かべて座に加わり、

「この前、新入りのバーの女を飲み仲間て無

理矢理床に押さえ付けパンチィを脱がせてや  
ったよ」などと悪乗りをした。

一葉山町は新興の造成地だった。葉山荘か  
ら学校へ通うには自衛隊の敷地内を抜ける金  
網の高いフェンスで囲まれたバス通りへ出る  
小道か、小倉刑務所の高い塀沿いに若園町方  
面に歩く二通りの経路があった。いずれも殺  
風景この上ない景色だった。

修は駐車場のバイトを辞めたので、このま  
まだと生活資金がいずれ底をつく不安を覚え  
た。かねてより知り合いの北方市場の前川履  
物店（支店）を訪ね、借金の申し出をしたら、  
奥さんが露骨に嫌悪の表情を顕わにしたので、  
すぐに無かったことにして到津の将一さん宅  
を訪問した。

「あんな、あんな駐車場の詰所に寝泊りして  
バイトしていたら、勉強になるもんかね。金  
を返すのはいつでも良いからな。お母さんか  
らも、息子が金に困って来た時は貸してやっ  
てくれないかと頼まれていたよ」

心は見えないが、意外に将一さんは気前よく一万円札をポンと渡してくれた。図々しいと思ったが、ついでに家庭教師の口の相談もした。

「そうだな、（西鉄）ライオンズのファンクラブで懇意にしている日明の肉屋に頼んでやろうか。市場のボスだから顔が物言うだろうよ」と引き受けてくれた。日明と聞いて、修は幾分たじろいだが、家庭教師の口があるのなら文句はなかった。その日は若い後妻さんの手料理をご馳走になった。彼女は大変な猫好きで、すでに五匹ほど食卓の周りをうろろろしていた。この猫が次々と増えに増えて大変なことになるとは、誰もゆめにも思わぬことだった。

#### 四十一 再度の日明の町

修はすっかり自由を得て文芸部の仲間と過ごす時間が増えた。講義室に行かず部室に直接顔を出すことが多くなった。講義のない合間は部室で雑談して過ごした。詩集『木犀』

を通じて他の演劇部などのメンバーとも顔馴染みになっていた。到津の将一さんからは早々に連絡をもらった。紹介された家庭教師のバイト先は、日明の電車道沿いの西江さんというサラリーマン家庭で、年明けに受験を控えた大門の思永中学の三年生で痩せぎすの背の高い子だった。突然家庭教師をあてがわれて固い表情をしていた。

「小倉城の近くの良い学校に通っているね」と修は、彼の凝りをほぐそうとお愛想で話し掛けた。軽く頷いたようだが、それがどうしたという浮かない様子で、目を合わせようとしなかった。そばの母親は柔和な表情をしていた。

「やっとお陰さまでうちの子も勉強する気になりました」

受験まで余すところ三ヶ月ほどだった。嫌がる馬に水を吞ませるのが困難なように、勉強嫌いな子供に勉学を強いるのも至難のことだ。英語、国語、社会、数学など満遍なく教

えてやって欲しいとの親の希望だった。成績は帰り際に母親が囁いてくれたが、真ん中よりだいぶ下位にいた。週に三回、七時から九時までという学習時間の取り決めをした。

もう一人の家は、日明電停で降りて米良外科医院の角の平松の橋を渡り、道なりに百メートルほど進み、左手に入った横丁の一軒家だった。私立中学二年生の女の子が一人セーラー服姿で待っていた。教えてくれるのは英語だけで良いという。夫婦共働きなのか、親の姿は帰るまで見えなかった。こちらの方は、週に二回、五時から七時までという希望だった。従って、修は葉山荘の夕食が無駄になるのを承知で、夕飯を食べずに直行せざるを得なくなり、空腹を抱えて勉強を教える始末だった。お腹がグウツと鳴った時は、笑って誤魔化した。アパートの食事は時間切れで片付けられてしまうので、帰り道に魚町界限の路地裏の大衆食堂でうどんカレーメンを啜った。

一日明は新入生の年に住んでいた街で、顔

見知りを探せば簡単に見つかったと思う。何よりも間借していた親戚の海苔屋の長池さんが住んでいた。

バイト口を紹介してもらった肉屋さんにお礼の挨拶した足で、一度だけ長池さんの店に顔を出した。だが、修がズルズルとご無沙汰したせい、言葉少なく不機嫌な表情が読まれて取れた。何となく気まずい居心地の悪さを覚え、すぐに辞去して二度と顔を出さなかった。品物配達の仕事をした岩松屋も主人の不慮の死去で消滅し、高校受験の息子に勉強を教えた花村さんの履物店も、娘さんの家出や主人の病死で廃業し、とっくに四国の奥さんの里に引っ越しており、正直言ってこの町のことに関心を覚えなかった。佐賀県出身で日明交番勤務の松田巡査も、すでに城野の交番に配置替えになっていた。修は辛い思い出しかない市場を避けて、家庭教師のバイトが済んだら、そそくさと日明の町から逃亡するよう家路を急いだ。

平松の女生徒からは一ヶ月で、

「英語の勉強は難しくて…、将来はデザイン  
の専門学校に行きたいからもういいです。こ  
れ、お母さんから預かっています」と月謝の  
入った封筒をもらった。とうとう、この女の  
子の親の顔も見ずにバイトは終わり、西江さ  
んの息子さんに週三日教えるだけになった。  
これで修のチューデントライフに余裕が出  
来たとも言えた。文芸部仲間では、一学年下  
の大本さんと親しくした。後輩だが年齢はず  
っと上の人だった。長年の病氣療養から回復  
して入学した人で、その間の独学の英語で、  
すでに原書の解釈能力も和文英訳も英会話も、  
実力では教授もたじたじの域に達している、  
と専らの噂だった。守恒のバス停辺りから田  
圃の道をくねくねと紫川の方へ十分程入ると  
農家の集落があった。その一軒の屋敷の離れ  
に間借りしていた。

一何しろ、試験前になると、テキストの試

験 範 囲 の 難 語 や 熟 語 の 和 訳 と 予 想 問 題 の ガ リ  
版 原 稿 を 作 成 し 、 謄 写 版 で 刷 っ て ク ラ ス メ ー  
ト に 一 部 五 十 円 で 販 売 し て い た と は 恐 れ 入 っ  
た 。

修 と は 気 が 合 い 、 夜 半 の 二 時 位 ま で お 茶 を  
啜 り な が ら 話 に 興 じ た も の だ っ た 。 井 上 靖 の  
『 楼 蘭 』 の 一 読 を 勧 め た ら 、 す で に 英 訳 本 の  
方 で 読 ん で い て 、 中 国 西 域 に あ っ た 彷 徨 え る  
湖 と 共 に 栄 え 、 湖 と 一 緒 に 滅 び 、 歴 史 と い う  
時 間 の 砂 に 埋 も れ た 古 代 国 家 を 描 い た 感 性 の  
あ る ロ マ ン だ っ た と 誉 め た 。 泊 り 込 む こ と は  
し な か っ た 。 月 明 り の 深 更 の 道 を テ ク テ ク と  
北 方 の 葉 山 町 ま で 歩 い て 帰 っ た 。 当 然 人 影 ひ  
と つ な く 町 は 寝 静 ま っ て い た 。 否 、 自 衛 隊 構  
内 を 通 過 す る 時 に 、 た ま に パ ト ロ ー ル す る 歩  
哨 の 自 衛 官 と 出 逢 っ た 。 お 互 い 素 知 ら ぬ 振 り  
を し た が 、 学 生 が 深 夜 ま で 徘徊 し て 、 不 寝 番  
の 彼 ら に は 内 心 不 快 だ っ た か も 知 れ な い 。

修 は 卒 業 論 文 の 研 究 テ ー マ に 英 国 十 八 世 紀  
の 桂 冠 詩 人 ウ ィ リ ア ム ・ ワ ー ズ ワ ー ス を 選 ん

でいた。図書館で色々と調べることが面倒な時は、恥も外聞もなく大本さんに訊いた。まさに英語に関しては博覧強記、生けるブリタニカ（大百科事典）であり大いに助かった。大本さんは広島大学大学院に進み、出身地の香川大学教授まで出世した。

#### 四十三 警察沙汰

それにしても、その後小林安司教授との接触はなかった。そう広くもない大学構内なのにすれ違うどころか、姿を見かけた記憶もない。船場駐車場のバイトを辞めたら、履物問屋との足も遠のいた。それでも年末に一度だけ後釜の後輩の様子を見に行った。夕刻、顔を出したので赤座さんと後輩が一緒にいて、ちょうど車のキーを預けに来た顔見知りの雑貨問屋の柏野商店の従業員も詰所の中へ入って来た。

「おや！元気そうだね。あの後、また刑事が来たよ」と赤座さんが口を開いた。

「エッ、あのヤクザの事件のことですか？」

「違うよ！あの堅物の爺様がとんでもないことを仕出かしてね」

赤座さんの説明によると、魚町の月極契約の電機屋の店員に米倉さんがすっかり丸め込まれ、店員が店から勝手に持ち出した電器製品を、詰所の倉庫に隠匿して幾許かの謝礼をもらう横領犯罪に手を貸していたという。

—単純な思考をする人は、頑固に見えて意外にお人好しなのである。

電機屋の不良店員は、普段から赤座さんの剛毅な気質よりも、頑迷で一本気そうな職人氣質の米倉さんを組み易しと看破り、犯罪の片棒を担がせたのだらう。逮捕はされなかったが、小倉署の刑事課で取り調べを受けて気落ちし仕事を辞めていた。後輩の方は複雑な返事をした。あまり有り難い仕事ではないが、生活のために頑張るしかないと言った。

「村山先輩も先週来たんですよ。夜中に酔っ払いが悪戯で門の呼鈴を押すので困っている」と相談したら、そんなのベルに紙切れを挟ん

で鳴らんようにしとけ、ですって。その通りにしたらジューとも鳴らず、掃除の小母ちゃんが呼んだのも知らずに熟睡ですよ」と少し笑顔になった。

「今日はついてないよ。さっき行橋から帰りに白バイに捕まったよ。ちょっとスピードを上げて帰りを急いだだけなんだよ」と柏野商店の三十年配の店員がぼやいた。

「あいつら、税金ドロボーですよ」と後輩が無表情で吐き棄てるように言った。

「いや、あの人達もああいう仕事をしているのだから…、すみません、すみませんと何度も謝りながら交通切符を切ったんだよ」

「警察にはノルマがあるのですよ。仕事のうちっかりミスだから、事業主が罰金を肩代わりするよう交渉したらどうですか。そのために労働組合を結成したらどうですか？」

「いやあ、そんな大それたことを…。店は儲かってもないから首を切られますよ」とその人は鼻白んだ。村山信吉の後輩だけあって、

十分にその薫陶を受けていた。

赤座さんが背広に着替え、帰り支度をし出したので、修は一足先にその場を辞去した。そばの福田屋うどん店のカウンターには、日活ホテルの夜間フロントの女性達が、丸椅子を押し潰しそうな太いお尻を並べて一斉に食事中だった。制服の紺のスカートの裾から白く長い足を一様に高く膝を組んでいて、思わず足を止めたくなるほどの壮観だった。修は船場町に来たついでに、履物問屋にもご機嫌伺いの挨拶をした。奥さん達は奥の台所にいたので帳場の主人に会った。

「小林先生には会うね？」

「いいえ、中国学科の教授ですから滅多に会いません」

「そうかね。これからの日本は英語が益々大事になるから、しっかり勉強しなさい。アメリカと友好的にするしか、今の日本に発展の道はないよ」

主人が忙しそうに帳簿を捲りながら相手を

するから、早々に辞去しようと思った。目敏く若奥さんが修の姿を見つけて小走りに出て来た。

「まあ、お元気そうね。駐車場は赤座さんが頑張ってくれてね、お陰さまで黒字経営なのよ。今度ゆっくり遊びにいらっしやいね」と奥へ戻った。相変わらずチャキチャキとせわしく行動する人だった。その翌日のことだった。

— アメリカのケネディ大統領がテキサス州ダラスで白昼銃撃により暗殺された。『巨星墜つ！』の大見出し、ジャクリーン夫人の隣りで前のめりに崩れる大統領の写真の号外を小倉の街でもらい衝撃を受けた。時に昭和三十八年十一月二十三日の午前中だった。北方の町は穏やかな晩秋の日和だった。

#### 四十四 小倉の大雪

修は受講と文芸部の部活と日明までの週三回の家庭教師に明け暮れする日常だった。冬休み前、年内最後のバイトをした晩、珍しく

西江夫人が玄関まで見送りに出てくれた。

「先生、息子の二学期の成績が、ぐんと上がりましたのですよ。年が明けてからも宜しくお願ひしますね」と丁重に礼を述べられた。年が明けたら自分の期末試験に集中しなければならなかったが、何とか志望校に合格させてやらねば、と責任を感じた。

昭和三十九年の正月を実家で迎えた。すぐ下の妹は高校二年生、末の妹が小学校五年生だった。春になったら自分は四年生になり、両親の関心事は就職問題だった。修はどんな職業を選ぶか確たる気持ちを持っていなかった。就職に関しては、父も母も何も言わなかった。東京に出たいとは、これまでも時折口にしていた。

「東京に出るよ」と初めて断定的に言った。

「別府の春子祖母ちゃんが大阪くらいにしたら、と言っていたよ」と母が心配顔になった。

「どうせ田舎を出るなら、首都の東京が良いよ。出版会社が良いな」と修は華麗な花の都

の映画・芸能界をイメージして口にした。

「船場町の親父さんは顔が広いから、NHKにも東洋陶器にもコネがあるそうよ」と母が言った途端、それまで無言だった父が、

「東洋陶器は便器ばかり作って気にいらんな。やめとけ！」と不機嫌そうに呟いた。

「自分の良かごとしたら…」と母も匙を投げた。

「そう、良かごとしんしゃい」と父も就職の話から降りた。

その年は例年になく降雪が多かった。二月は来る日も来る日も雪が降り、毎日のように学校や北方の電停まで銀世界を雪中行軍した。

小倉にこんな長期間、積雪が消えないのは、近来稀な事だとラジオのローカルニュースで言っていた。修は貧乏学生で電気炬燵もなく、日暮れ早々に蒲団に潜り込んでテキストとノートを開き、まるで無精者だと自嘲するしかなかった。相部屋の山村君が、

「先輩に限りませんよ。大体の者がこの時間

から蒲団に潜り込んでいますよ」と自分も同じ格好で勉強していた。期末試験が済んだら虚脱したようになり、文芸部室に通学する形となった。他のサークルの部員も同様に緊張が解けたようで、何の意図もなくお喋りにやっけて来て、部室が一種のサロンと化した。

一文芸部員や出入者にアカハタ（現赤旗）を購読している学生は珍しくなかったが、政治・イデオロギーを話題にすることもなかった。

春が来て進級したら、何となく煙たい四年生もいなくなり、やっと思い通りの活動ができるようになる、と修は内心ほくそ笑んでいた。勉強を二月の末日まで教えた日明の西江さんの息子は気になった。三月半ばの頃には、大衆食堂に入っては備え付けの新聞で高校合格者掲載の紙面を探した。西江さんの息子は希望通りの私立高校に合格していた。真っ先に母親の喜ぶ姿が目につかんだ。一学期だけ教えた八幡七条の男の子の名前も八幡高校合

格者の氏名の中に見つけて安堵したものだっ  
た。修との年齢差を思えば、その子供達も又、  
すでに還暦を過ぎた身となっていて、月並み  
だが人生とは須臾の間、光陰矢の如しを実感  
している。

#### 四十五 春愁

春になり待望の四年生になった。だが、実  
際四年生になってみたら、四年生の姿を見て  
凄いなあと内心思っていた入学したての頃の  
自分が漫画みたいに滑稽に思えた。四年生に  
なってみても、自分の英語力が向上した実感  
もなく、ただ歳月のみが過ぎたのを知っただ  
けだった。それに否応無く就職の二文字が重  
く覆い被さって来た。

一卒業論文も気になった。米英学科の学生  
の卒論は英文に和訳文を添えて提出し、英単  
語で凡そ五千字程度の決まりだった。

ゼミナールの先生は若手の長谷川助教授だ  
った。この新進の先生は純心な性格のようで、  
講義中に原文を朗読し、何と文章が美しいの

か と 感 激 し て 自 己 陶 醉 に 浸 る よ う な 人 だ っ た 。  
だ が 、 試 験 と な っ た ら 斬 新 的 な 問 題 ば か り で  
手 厳 し く 、 欠 点 で 単 位 が 取 れ ず 卒 業 で き な い  
学 生 も 珍 し く な か っ た 。 カ リ キ ュ ラ ム は 当 初  
か ら 父 が 猛 反 対 の た め 、 幸 か 不 幸 か 教 職 課 程  
を 踏 ま な く て 良 か っ た 。 だ か ら 、 週 に 三 日 も  
通 学 す れ ば 、 卒 業 に 必 要 な 単 位 を 悠 に 充 足 し  
た 。 こ の 期 に な っ て 、 別 府 の 春 子 祖 母 さ ん か  
ら 、 毎 月 一 万 円 仕 送 り し て く れ る と い う 嬉 し  
い ニ ュ ー ス も 入 っ て 来 た 。

一 卯 三 祖 父 さ ん で な く て 、 春 子 祖 母 さ ん 名  
義 で 仕 送 り し て く れ る と は 、 何 か 下 心 が あ る  
か に も 感 じ た が 、 駐 車 場 住 み 込 み の バ イ ト な  
ど で 散 々 辛 い 思 い も 味 わ っ て い た か ら 、 天 に  
も 昇 る 心 地 に な っ た 。 こ れ で 就 職 活 動 や 文 芸  
活 動 に 専 念 で き る と 思 っ た 。 先 ず 魚 町 の ナ ガ  
リ 書 店 で 国 家 公 務 員 上 級 試 験 の 短 答 式 模 擬 問  
題 集 を 立 ち 読 み し て み た 。 英 語 は と も か く 他  
分 野 の 問 題 は と て も 歯 が 立 つ も の で な か っ た 。

一 こ れ は 一 年 生 の 頃 か ら 目 標 を 立 て て 挑 戦

すべきものだった、と愕然と肩を落とすしかなかった。レベルを落として短大卒の国家公務員中級試験を受ける発想もしなかった。とにかく求人が始まったなら東京の出版社を志望しようと思った。

成績は『優』の数が二十個以上あったので、学校から推薦状がもらえると知って気楽になっていた。葉山荘には新入生が四人入居になった。京都市の太秦、三重県の亀山市、兵庫県姫路市、広島市の出身で、最上級生の修を頼りに近づいて来た。

五月の連休に亀山の子の母親とお姉さんが、小倉観光を兼ねて息子の顔を見に来た。彼から博多にも連れて行きたいと相談されたので、ついでに他の三人の新入りにも呼びかけた。ちょうど博多どんたくで賑わっていた。広島片山君は福岡天神のビル街を見て、広島に帰ったみたいだ、とはしゃいだ。小倉の繁華街とは又異なる花の都のムードを感じたのかも知れない。梅雨の頃になって、葉山荘で相

部屋の山村君が突如“晴耕雨読”の生活をした  
たい、と退学し郷里の岩国に帰った。その後  
釜に入居して来たのは一年生で、長崎市出身  
の山中君だった。

#### 四十六 長崎への旅

その年の九文連総会は長崎地区の当番だった。  
七月六日、七日の土日の開催で長崎大学、  
県立短大、活水短大が共催した。修は昨年か  
ら文芸活動には執心していた。北九州地区の  
九州工業大学、八幡大学、西南女学院短大、  
東筑紫短大の文芸部メンバーと互いの文化祭  
などを通じて交流していた。長崎へは、北九  
大から十名、西南女学院短大から五、六名、  
九州工大から二名とかなりの人数になったが、  
修は積極的に交流していたので他校のメンバ  
ーともほとんど顔見知りだった。会場は長崎  
大学の学芸学部の講義室だった。

— 総会は相も変わらない空疎な観念論ばかり  
りだった。青臭い文学論やプロレタリア文学  
論などに興味はなかった。

早く時間が過ぎて懇親のレセプションの始まりを願っていた。宿泊先は長崎市内の高台にある立山町のユース・ホステルだった。昨夜の医学部学生ホールでのレセプションの酒で、すっかり深酔いしてしまった。偶々同じテーブルに隣り合わせたのが別府大学の女子学生だったので話が弾んだ。だが、出身地は遠い福井県の小浜市とは意外だった。酔っ払って寝たので朝早く目覚めた。屋上へ上がったら、まだ早暁なのに強烈な夏の日射しを浴びて、長崎港を眼下の海が油を流したようにキラキラと光っていた。もう女の子がひとりキャンバスを立てて写生していた。あまりにもキャンバスに集中していて、声を掛けるのも遠慮した。

二日目は詩部門の分科会のシンポジウムに出たが、プリントはカラカラに乾いた砂漠の砂みみたいな意味不明の文字の羅列ばかりで共感するものは何もなかった。

一串刺しの団子みたいに、単語を並べて悦

に入っている現代詩ばかりだった。女子大生の作品の方にまだ叙情性を感じた。男子の発表者は抽象的で感性もなく、ただ解読不可能で、意味不明な日本語を延々と聞かされた覚えしかない。

帰途は長崎駅始発の普通列車に乗って、鳥栖で鹿児島本線の上り快速電車の山口県小郡行に乗り換えた。修が長崎駅で真っ先に乗り込み窓際に席を取ったら、西南短大の女子三名が争うように雪崩を打って同席した。椅子取りゲームのような勢いで、修は隣席の部長の朝田さんの大柄な体で押し潰されそうになった。前に座ったのは副部長格の折口さんで八幡の春の町に住んでいた。この人は汚れなきエンゼルというイメージがピッタリ、その潤んだ瞳に憧れた男子学生は五万といたのではないか。ただし、水清ければ魚住まずの類で、その神々しいばかりの清純さには近づき難く、男子学生で付き合いをした者はいなかったと思う。しかし、一体何を喋って車中の

長い道中を過ごしたのだろうか。何も覚えて  
いることはない。

—やはり人生なんて、ほとんど空虚なもの  
だと思う。

斜向かいにいる小久保さんは、顔を合わせ  
て見て、朝方に海の絵を描いていた人のよう  
だったが確かめてみななかった。遅日の候で、  
佐賀駅を出た辺りで、ようやく窓外は日暮れ  
の様相になった。筑紫平野の薄闇に溶け入る  
ように民家の灯が点々と流れた。通路を挟ん  
だ席では、我が北九大の男子四人がポケット  
ウイスキーの酔いで景気よく『関の五本松』  
など民謡を高吟して盛り上がっていた。鳥栖  
から博多まではラッシュ時の混雑で立った。  
小久保さんだけはずっと私の傍にいた。家が  
姪の浜だと博多で降りたが、修は後ろ髪を引  
かれるのと真逆に、別れの一瞬だけ彼女の後  
ろ髪を引っ張ってやりたい衝動に駆られた。  
この人の詩は今も忘れていない。

願 い

Y O K O に

何 も か も

お 喋 り し て 下 さ る

約 束 で し た

だ の に

背 を む け た

あ な た の 肩 に

私 は 寂 し さ を

み つ け て し ま っ た の で す

心 の 中 を

透 明 に し て し ま っ た ら

貴 方 の 想 い を

瞳 の 底 に

写 す こ と が

出 来 る の で し ょ う か

昭 和 三 十 八 年 十 一 月 発 行

西 南 文 芸 「 で こ ぼ こ 」 No. 2 よ り

四 十 七 東 京 ・ 京 都 見 物

夏 休 み の 帰 省 直 前 の こ と だ っ た 。 学 生 課 の  
壁 に 一 際 大 き な 『 警 視 庁 大 卒 警 察 官 採 用 』 の

張り紙を見た。幹部候補生として給与、昇進面で優遇する主旨が毛筆の書体で太々と印刷されていた。日常が判を押したようなものでなく、昼夜関係ない警察官の人生も退屈しなくて良いかな、と心惹かれた。その日、母から夕食時に電話があった。船場町の親父さんに就職のことを相談してくれていた。

「今日の日明の放送局長さんは船場町生まれの人よ。紹介してやるから、明日の十時に来てくれとのことよ」

修は翌日、親父さんと一緒にタクシーで日明の坂を上がり、頂上に建っているNHKの放送局長室に案内された。日明の坂の上は緑濃くセミがうるさく鳴いていた。

一昨日の電話で母は、若い頃の局長はニュース読みが下手で、船場町の笑いものだったと言った。

面会してみたら、人品骨柄秀でて貫禄のある方だった。放送局の事業一般を柔和な顔で説明され、採用については大学に求人票が出

ているとのことだった。修は前々から学校推薦で東京の大手出版社の入社試験を受ける手筈になっていた。一応、学生課にNHKの求人のごとも訊ねたが、推薦は一社に限るといへもない返答だった。

七月末の盛夏に上京した。学割で東京・小倉間は運賃千二百円、それに急行券の三百円を足して片道千五百円の旅費で行けた。この年留年した先輩に聞いたら、一流出版社は若干名の募集に数百人が受験するそうだった。入社試験に当たって事前調査票があり、『弊社の社員に親族・知人がいますか？』の項目に縁故採用が優先かと諦めが先に立った。試験は何も難しく感じなかったが、当初から合格を度外視の物見遊山の積もりでいた。試験も済んだ翌日、ハトバスに乗り、松の緑が砂に映える皇居前広場、二重橋、靖国神社、銀座通り、上野公園、浅草寺など定番の東京観光コースを見物した。帰途は京都で途中下車した。あらかじめ打ち合わせておき、葉山荘

で知り合った新入りの京都出身の井下君と駅頭で落ち合った。

—この五月の土日を使って、彼を泊りがけで別府の卯三祖父さん宅に遊びに連れて行き、湯の街観光をさせていたので、そのお返しみたいなものだった。別府への旅には、月々の仕送りをしてくれる春子祖母さんに顔見せし、お礼を述べる目的も秘めていた。

真夏の京都盆地は地の底から暑かった。だが、さすがに千年の古都、井下君の案内で、豊かな緑陰を求めながら、丸山公園、清水寺、金閣寺、銀閣寺、嵐山の渡月橋など、市電や市バスを使い駆け足で巡り、その日の夜行列車で佐賀へと向った。当時、佐賀県立高校の男子生徒のみ、伝統的に修学旅行に行かない不文律があったから、修には初めての長旅だった。

#### 四十八 警察官への道

案の定、出版社からは梨の礫だった。警視庁の大学卒警察官採用試験が、すぐに頭を過

ぎった。応募用紙は全国何処の警察署にも置いてあると記載されていたし、試験場所も全国の県庁所在地を巡回していた。思い立ったが吉日と郷里の佐賀警察署を訪れた。係員から佐賀県警も受験するよう勧められたが、大卒の募集はなかったので、警視庁の方だけを受験した。採用試験会場は佐賀警察署の講堂（訓授場）で、高校生の受験は五十人位いたが、大学生は佐賀大生二人、福岡大生二人に修の五人だけだった。高卒予定者とは別の小さな会議室で、一般常識の短答式三十問に小論文の『ヒューマン・リレーションについて述べよ』の筆記試験、すぐに続いて面接を受けた。試験官は警察学校の額賀警視と名乗り、東北訛りの強い人だった。

「警察官志望の動機は…」

— 社会正義を守るためです…。

「支持する政党は…」

— 民社党です。

「その理由は…」

— 中小企業の味方だからです —

こんな問答が記憶に残っている。とにかく人生に退屈しない、不規則な勤務をする願望になっていた。支持する政党では自民党と言っても良かったが、何故か突如保守政党への反発心が湧いて来たのだから、若者の心理とは特異な動きをするものだ。父が零細の土地・家屋測量士だったから、咄嗟の思い付きで、民社党と答えたに過ぎなかった。

— 支持する政党について、「特にありません」の返答が正直な心だったかも知れない。

後々に知ったことだが、警察では体制内政党という言葉で自民党、民社党を保守政党と認めていた。民社党で辛うじてセーフだった気がする。試験の結果は午前中に発表された。修の他に佐賀大生と福大生が一名ずつ計三人が合格していた。午後は町医者健康診断を受けて解散になった。身元調査があって、正式の採用通知は十一月頃と聞かされた。因みに、翌春四月の警視庁警察学校の入校日に他

の二人の顔はなかった。

四十九 黒い瞳

修はノンポリ学生で、左翼の集会やデモと無縁だったので、警察の身元調査への不安は皆無だった。もうすっかり採用された気分になり、その後は就職活動をしなかった。

秋口からは文芸部の活動に精を出した。受講日は週に三日しかないので、自然と部室に入り浸りになった。ある日、文芸部のファンでしょっちゅう部室に出入していた中山園子からコンパへ誘われた。店で開くのではなく、北方競馬場から程近い民家の一室だった。メンバーは男女半々で、幹事役達が飲み物や菓子類を持ち寄った安い会費制だった。今の若者言葉でいうと「家コン」だった。村山信吉の顔があったので、メンバーの凡その素性の察しがついた。文芸部一年生でアカハタを読む女子もいた。部室でカバンからアカハタを取り出していたが、記事を話題にするとはなかった。かねてより顔見知りの他クラスの

四年生で、演劇部の女ボス的存在の山田由香里もいた。彼女がこの部屋の主でコンパの主宰者だった。時折、平和とか民主主義とかの言葉が耳朶を掠めたが、特に政治的な話題もなく、駄洒落や近況を話すうちに適度にほろ酔いになり、母さんの歌やロシア民謡の黒い瞳、カチューシャ、赤いサラファン、トロイカ、ともしび、一週間の歌などの合唱会となった。新入りの修は男芸者になって満遍なく皆に話しかけ媚びて廻った。

「あなたのゼミの研究課題は何なの？」と少し頬を朱に染めた山田由香里の目元から普段の陰しさが消えていた。ワーズワースだと答えたら、さすがにワーズワースの邦訳の詩文を誦んじていた。

「まあ、素敵じゃないの！エリア・カザンの『草原の輝き』ね。花美しく咲くとき再びそれは還らずとも嘆くなかれその奥に秘められし力を見出すべし」

「さすがに女優は暗記力があるね。ナタリー

ウッドが主演で、最愛の初恋の人と結ばれな  
かったから、その愛は不滅だったというスト  
ーリーだったね。でも僕は、ワーズワースの  
お説教的なところが嫌いなんです」

修はすっかり酔いも回って、三年生ながら  
演劇部の中心メンバーの野川百合子と何ら訳  
もなく意気投合して家路を共にした。中山園  
子も一緒だったが、彼女は博多から通学して  
いたので北方の電停で別れた。そこから百合  
子と二人だけになった。修はその挑むような  
黒い瞳の魅力に憑かれてしまい、その足で送  
って若園町のアパートの部屋に上がりこんだ。  
きちんと整頓された女子の部屋は清潔で、窓  
のピンクのカーテンに色っぽいものを感じた。  
酔い覚ましにお茶を何杯もよばれた。岡山県  
出身の彼女と、互いに故郷自慢合戦をして過  
ごしたと思う。さっきのコンパの途中、少し  
妬いたような中山園子の

「野川さん！桜井さんが好きなの？」と冷や  
かすような声が喧騒の中で聞こえた。

— 嫌 い よ !

と 応 え た 野 川 百 合 子 の 声 も 聞 こ え た が 、 額 面  
通 り に は 受 け 取 れ な か っ た 。

五 十 遠 距 離 通 学

就 職 が ほ ぼ 決 ま っ た 感 じ に な っ た ら 、 ゼ ミ  
の ワ ー ク ワ ー ス の 研 究 を 除 い て 、 勉 学 意 欲 は  
遠 の い た 。 す っ か り 快 速 電 車 が 普 及 し 、 週 に  
三 日 の 講 義 く ら い 佐 賀 の 実 家 か ら 通 う の も 可  
能 だ っ た 。 所 要 三 時 間 程 度 と 格 段 に 近 く な っ  
て い た 。 佐 賀 駅 を 朝 七 時 過 ぎ の 列 車 に 乗 れ ば  
十 時 に は 小 倉 駅 に 到 着 し 、 北 方 線 に 揺 ら れ て  
二 時 限 目 の 講 義 に 間 に 合 っ た 。 帰 り は 夕 刻 六  
時 過 ぎ の 小 郡 発 の 下 り 快 速 電 車 に 乗 り 、 鳥 栖  
で 長 崎 ・ 佐 世 保 線 に 乗 り 換 え る と 佐 賀 駅 に 九  
時 前 に 着 い た 。 遠 距 離 通 学 定 期 券 を 購 入 す る  
に は 申 込 書 に 『 理 由 書 』 添 付 が 必 要 だ っ た が 、  
病 弱 の 父 の 測 量 の 家 業 を 手 伝 う と い う 口 実 で  
十 分 に 間 に 合 っ た 。 九 月 末 日 限 り で 葉 山 荘 を  
出 て 、 佐 賀 の 実 家 か ら の 通 学 に し た 。 問 題 は  
必 須 科 目 の 『 商 業 英 語 』 が 一 時 限 目 の 開 始 と

いうことだった。幸い大講義室の合同授業で  
出欠を取らない教授だったので、懇意の村山  
信吉や文芸部の四年生仲間から講義ノートを  
見せてもらって何とか凌いだ。そんな日々を  
過ごして間もなく、

「修ちゃん、お母さんの了解は取ったから、  
忠幸の勉強を見てやって頂戴ね」と隣家の光  
子小母さんから直々に頼まれた。たまたま小  
倉の富野の米穀店が実家の人だった。この方  
には幼い頃から可愛がってもらった。渋皮の  
剥けていない田舎の婦人達の中に雑じると、  
鄙には稀な雪白の美貌が一際光る人だった。

一戦後の頃に、“上等舶来”という言葉が  
流行り、国産品より外国製品が上に見られた  
時期があった。そんな意味の上等な舶来の洋  
菓子のような人だった。

隣家の忠幸君は末っ子で、光子小母さんから  
猫可愛がり可愛がられ、中三になっても、  
まだ母親と同じ蒲団に就寝しているそうだっ  
た。

一性に目覚めたばかりの頃なのに大丈夫か、と内心で心配もしたが、小母さんの上等な肢体の傍らで一緒に眠られる幸せを羨ましくも思った。

彼の兄と姉が高校受験の年には、佐賀大生が家庭教師で出入していたので、中学三年生になった忠幸君に、まだ家庭教師がついてなかったとは意外だった。ともかく小倉へ通学しない日は家庭教師をして小遣いが稼げた。勉強が済んだら、いつも光子小母さんが肅々とコーヒーとお菓子を運んでくれた。

「昨夜（ゆうべ）、お母さんを抱いて寝ていたけど、朝になって目が覚めたら、反対にお母さんがボクを抱いて寝ていたよ」と忠幸君は臆面もなく話した。この頃、光子小母さんは悪性の胃の腫瘍を手術されたばかりだった。修も幼い頃から何かと優しくされたので、恩返しの積もりで家庭教師に熱を入れた。病魔はすでに末期のようだ、と母は言っていたが、いささかも光子小母さんの顔貌に、窶（や

つ ) れ た 影 は な か っ た 。

実 家 で ワ ー ズ ワ ー ス の 論 文 を 作 成 し な が ら 、  
何 気 な く コ ン パ で 覚 え た 『 一 週 間 』 の 歌 を 口  
ず さ ん だ 。

「 ♪ 日 曜 日 に 市 場 に 出 か け 、 糸 と 麻 を 買 っ て  
き た 、 チ ュ ラ チ ュ ラ チ ュ ラ … チ ュ ラ リ ャ ー リ  
ヤ ー … 」

い つ の 間 に か 父 が 背 後 に い た 。

「 何 処 で そ ん な 歌 、 覚 え た の か ? 」

ロ シ ア 民 謡 を 口 ず さ ん で 父 に 咎 め ら れ た 。

父 は 大 の ソ 連 嫌 い だ っ た 。 大 戦 の 時 代 に ソ 満  
国 境 で ロ シ ア 人 と 対 峙 し た 経 験 の あ る 父 に は  
さ ぞ 不 愉 快 で 耳 障 り な メ ロ デ ィ だ っ た の だ ろ  
う 。

郷 里 の 町 で 過 ご す 日 々 が 増 え る と 、 昼 間 バ  
イ ク で 品 物 を 配 達 す る 活 発 な 娘 、 夕 刻 勤 め 帰  
り の 化 粧 顔 の O L な ど 、 顔 を 見 知 っ た 同 級 生  
と 町 中 で バ ッ タ リ 出 く わ し 、 目 を 合 わ せ て も  
ツ ン と 背 か れ る 有 り 様 だ っ た 。 佐 賀 地 方 に は 、  
男 子 と 女 子 を 一 緒 に 遊 ば せ な い 旧 態 の 精 神 的

風土・土壌が根強く存在し、子供の頃から口を利いたこともなければ、そんな態度も当然だろう。だが、たまたま出逢った恩師は友人の情報を知ってくれたし、よく遊びに行った同級生の母親と顔を合わせたら、息子の消息やら愚痴やらを語ってくれた。

#### 五十一 女の諍いの仲裁

修の大学での居場所は文芸部室が中心だった。シンパの中山園子はよく出入し雑談した。十月の半ばの頃だった。

「ねえ、百合子が大変なのよ。助けてあげてよ！演劇辞めたいって言っているのよ。先輩は山田さんと仲良しなんでしょ！」と中山園子が百合子を連れて駆け込んで来た。野川百合子は元来ものをズケズケ言う性質（たち）で、例の女ボスと衝突したようだ。

「わたし、先輩に言い過ぎてしまいました。演劇は続けたいです」と百合子はしおらしくしていた。

修は大物面して意見するには役不足だと思

ったし、一体具体的に二人にどんな軋轢があったのかも知らなかったが、悄然とする黒い瞳を放って置けなかった。演劇部の女ボスとはずっと以前から村山信吉に紹介された顔見知りであり、同じ四年生として対等に口を利けた。だが、仲良しという程の付き合いはなく、説得に自信は全くなかった。義を見てせざるは勇なきなり、とは大袈裟だが、黙ってもおられず、匹夫の勇で仲介の労をとって見た。昼休みに百合子と一緒に演劇の部室に行って山田由香里と顔を合わせた。険しい顔で嫌悪の表情を丸出しにされた。

「山田さん、本人も反省しているので、元通り仲間に入れてやって下さい」

何様の積もりで言ったのか、百合子が一体何を反省しているのか、良い加減なものだった。自分でも訳が分からなかった。山田由香里は無言だったが、何ゆえか明瞭に頷いて、修の顔を立ててくれた。男子部員の怪訝な眼もチラホラあったし長居は無用と思った。修

は安堵して笑みを見せる百合子をその場に残すと早々に部屋を出た。この事以来、下級生がすっかり野川百合子を、修の“彼女”と誤解したようだ。朝夕は冷え込む十一月となった。文化祭のイベントで遅くなったら、北方新町のアパートで知り合っただけ以来親交のある鹿児島県出身の平田順郎君の部屋に泊まり込んだ。彼もとうに若園町の貞美荘アパートの一室に引っ越しており、そこから百合子のアパートも近かった。寝るには早い時刻だったので、平田君に、

「ちょっと行くところがあった」と告げて出たら、

「先輩、彼女のところでしょう」とニヤリと笑った。百合子の部屋をアパート裏手の暗がりから探った。ピンク色のカーテンを通して灯りがあり在室が確認できた。

「百合子さん、僕ですよ」と胸をときめかせ、そっと窓に向かって呼びかけた。カーテンが微かに動き修の姿を確認すると、

「まあ、いらっしやい！」と部屋に招き入れられた。少し風邪気味で、パジャマ姿で蒲団に臥せって、ラジオを聴いていたという。近所の小売店が開いていたので、一旦出てミカンを二百円分包装紙に包んでもらい戻った。

「お見舞だよ。風邪によく効くよ」と差し出した。ほんの微熱で、用心のために休養していただけだ、と起き上がっていた。演をかんだチリ紙が竹箆のゴミ入れに満杯になっていた。

「演劇は続けるのだね」と念を押した。

「先日はご免なさい。ご迷惑をかけました。もう大丈夫ですよ。長いものには巻かれよ、でやりますわ」

電気ポットで湯を沸かして渋茶を淹れてくれた。

「先輩、就職は決まりましたか？」

「まだ正式通知はもらってないけどね。だから、まだ内緒にとくよ」

「わたし、先生になるわ」

「女優を志望しないの？新劇とか文芸座とか俳優座とかあるじゃないの」

「まあ、冗談を言っただけ！それなら最初から東京へ出ていますよ。英語を勉強するのなら、岡山から近いのは北九大じゃないですか」などと他愛もない話を三十分位して引き揚げた。風邪の熱の辛さはよく知っていたので長居は出来なかった。

五十二 幻の人

十一月中は北九州地区の大学文芸部の交流会が続いた。西南女学院の文芸批評会に顔を出したら、作家火野葦平の弟で北九州文壇の大御所の玉井正雄先生の講話があった。軽やかな語り口ながら、ピンと背筋を伸ばした姿勢に貫禄を感じた。

—内容は古くからの北九州の民話のことだった。兄の火野葦平に『河童曼荼羅』なる小説があった。

その年の交流会幹事は九州工大の番だった。九工大構内の会議室で文化人講演会があった。

ゲストは詩人の中野重治氏だった。静かな語り口で、『資本主義の流れに毒されていないところで、自分自身の文学作品を創る』と言われたことが印象に残った。別の日、打ち上げのレセプションが九工大の学生ホールで開かれた。修は去年、詩集『木犀』の販売で誰彼かまわず散々手を煩わせたので、その分だけ顔が売れていた。あっちのテーブル、こっちのテーブルとお礼を述べて廻り、その度に乾杯の杯を重ねてかなり酔っ払った。これから小倉に向かい二次会に繰り出す腹積もりでいた。もはや、この時間では佐賀まで帰れないから、例によって北方若園町の平田君の部屋に泊まり込む手筈だった。平田君が都合悪ければ、葉山荘へ行って誰か下級生の寢床に潜り込めば良かった。

九工大の気のおけない下級生と酔った勢いで女談義をした。

「僕は黒い瞳の女が好きだな」と百合子の面影を瞼の裏に浮かべて言った。

「そうですか、先輩！僕は女なら顔さえあれば、それだけで十分ですよ」と相手も相当飲んだ勢いだった。会もお開きの雰囲気になり、九工大の世話役の動きが忙しかった。

「お話中すみません」と盛装のドレス姿で上背もある女子学生が話しに割って入った。時代がかって言うなら、上玉と讃える容貌の人で胸の動悸を覚えた。最初から近くの席で意中にあっただが、修はこういったお嬢様風の人々が苦手な話かけなかつた。だが、会話は聞いていたのだった。

一最寄りの電停まで送って頂けないかと頼まれた。一緒に来た女子大生仲間もいるだろうに不思議に思った。

彼女のいかにも良家のお嬢様という風情に、修は着古したブレザー姿で、みすぼらしい気後れを感じた。北九大の文芸部仲間と一緒に帰ろうと誘いに来たが、その人が化粧直しに立っていたので、後ですぐに追っかけるからと先に行ってもらった。もしかしたら、彼女

からダンスホールや喫茶店に誘われるかも知れないと淡い期待もしつつ、ホール玄関口で待っていた。大方の参加者が出払った頃に、やっと夜目にも優雅なドレス姿を現した。

九工大構内の薄暗い樹影の続く先に集団のざわめきと時折甲高い笑声も聞こえた。今更、校名は聞けなかった。西南か東筑、どっちかの短大生だろうが、色んな思念が去来した。

「あなたの作る詩、とっても素晴らしいですわ」

木陰の暗がりにも色白の顔の笑みだけが浮かんで見えた。

「お褒め頂き嬉しいです」と修は有頂天になった。

「どうしてお仲間と一緒に帰らなかったのですか？」

「これから喫茶店に誘われて、帰宅が遅くなったら父に叱られます。それにあなたと一度はお話してみたかったです。あなた、純情そうで悪さの出来る人に見えませんかから…」

とまるで人畜無害の言われ様だった。修は笑い飛ばすしかなかった。人という生き物、外見はともかく内面は夜叉かも知れないのに、何かの弾みで鬼にも蛇にも容易に変化するのだ。もし今一度、再び薄暗い木陰の夜道を二人っきりで歩くことがあったら、白い顔の紅い唇を奪おうとする衝動が起きるかも知れないのだ。女子中、女子高、女子大とエスカレータ一式に純粹培養された女の子ほど、男の本性に疎いように思えた。

仲間が誰も居なくなつた「工大前」の電停で別れた。

その人が戸畑行電車に乗ることさえ聞いていなかった。とうとう名前も住まい学校も知ることもなく、今日までその人の面影を慕うように覚えている。これを幻と呼ばずに、何と言えよう。

### 五十三 純情

楓、公孫樹、柿、葉っぱが色を染めたり落葉を始めたり、すっかり師走となつた。よう

やく警視庁からの正式採用通知が届いた。東京・中野の警察学校初任科へ入校の日取りも来年四月六日と通知された。やがて勝手気儘のない日々が来ると思うと、残り少ない学生生活がこの上なく愛おしくなった。これから追出しコンパなどで、小倉に住んでいないと何かと不便になるだろうと思った。平田順郎君が貞美荘に空室があるというので、早速入居することに決めた。親に告げる理由は適当に考えた

「このまま通学していたんじゃ、卒論が締め切りに間に合わなくなるよ」

「又小倉にアパートを借りて、何でそんなにフラフラと落ち着きがなかとね！」と母は文句を垂れたが父は黙っていた。十二月の半ばから北方若園町に住んだ。家庭教師の世話をして来た隣家の忠幸君のテキストのドリルも残り薄くなっていて、冬休みに補充して教えることで納得してもらった。

— 光子小母さんのもち肌の美顔は艶っぽく、

病身の衰弱は微塵も見えなかった。だが、母の話ではウドンを日に四、五回に分けて啜るほどに食が細くなっているそうだった。

卒論のワーズワース研究の進捗状況はもどかしかったが、冬休み明けの締め切り日まで間に合わせる目算はあった。先ずは十二月末日までに和文で四百字詰原稿用紙二十五枚を仕上げるのが先決だった。この分では、正月三が日も返上で英訳作業に没頭する覚悟をしていた。気晴らしに野川百合子の部屋の灯りが点っているのを確かめては訪ねて雑談した。近所のアパートに引っ越して来たことを告げたら喜んで訪ねて来た。互いに行き来して談笑したが、清雅な交わりで淫らな真似事は一切していない。

—これが擬似恋愛というものだったろうか。  
校歌の♪我らゆく純情を斉唱する度に脳裏を過ぎる感慨だ。だが、とうとう警視庁に就職が決まった話を彼女にしたら複雑な表情をされた。

「親戚に警察の課長がいるけど、母さんの話では子供の頃はもの凄く貧乏な家だったって語り草よ」と侮辱的な口振りをした。

「貧乏は本人のせいじゃないでしょう」

「中学生の時、夏休み前の集会に巡査が来たわ。つまらない話ばかりして面白くもなかったわ」

「非行防止とか交通事故防止、水難事故防止の注意は、どここの学校でも警察官が来たよ」

「この前、ある会合があったのよ。講師の先生が若い時、刑事が家に踏み込んだそうよ。その刑事が真っ先に手にしたのが本棚のスタンダールの『赤と黒』だったって、教養がないって皆で大爆笑よ」

「それは戦前の共産党が非合法時代のことでしょう」

「今でも飯屋って言うの、食堂でしつっこく話しかけてくる小父さんがいたら、用心して話に乗らないようにしなさいって言われたわ。そんな仕事をしないのでしょうね」と警戒の

顔 だ っ た 。

一 警 察 と は 泥 棒 を 捕 ま え 、 人 殺 し や 強 盗 な  
ど 犯 罪 捜 査 を す る 行 政 機 関 と の 認 識 く ら い し  
か な か っ た 。

ず い ぶ ん 酷 い 言 わ れ 様 に 衝 撃 を 受 け た 。 そ  
れ 以 後 は 、 百 合 子 の ア パ ー ト を 訪 問 せ ず に 卒  
論 を 書 き 続 け た 。

#### 五 十 四 卒 論 騒 動

冬 休 み に 入 っ た ら 早 々 に 帰 省 し た 。 先 ず は  
中 断 し て い た 忠 幸 君 の 残 り の ド リ ル を 教 え 終  
え た 。 案 の 定 、 卒 論 の 英 訳 に は 手 こ ず っ た 。  
ワ ー ズ ワ ー ス の 心 象 風 景 を 、 微 に 入 り 細 を 穿  
っ て 描 い た が 故 に 、 そ の 抽 象 性 の 表 現 に 和 英  
辞 典 、 英 和 辞 典 、 英 英 辞 典 と 首 っ 引 き に な り 、  
正 月 返 上 で 毎 晩 深 更 ま で 起 き て 、 や っ と レ ポ  
ー ト 用 紙 を 英 単 語 で 埋 め 尽 く し 、 冬 休 み 明 け  
の 日 に よ う や く 間 に 合 っ た 。 小 倉 に 戻 っ た ら 、  
気 負 い こ ん で 大 門 の タ イ プ 屋 に レ ポ ー ト 用 紙  
を 持 ち 込 ん だ 。 私 は 秀 才 大 本 さ ん に 習 っ て 活  
字 体 で 手 書 き し て い た 。

「筆記体で書いたものでないと受理できませんよ」と女性事務員ににべもなく断られ、すごすごと引き揚げた。現在の英語教育では、逆に、筆記体を使わなくて活字体で書かせており、本当に隔世の感がする。

一提出期限まで後三日と迫っていて焦った。そのままアパートに籠り、パンを齧りながら夜を徹して筆記体に書き直した。空腹と徹夜の気だるい身体を大門まで運んだ。仕上がり日を訊いたら、提出締め切り当日で、何とか胸を撫で下ろした。卒論がこんな土壇場までかかるとは薄氷を踏んだ思いがした。しかし、修はまだ可愛いものだった。その日の夕方、同じクラスの勝山君が原稿を抱えて訪ねて来た。

「やっと卒論を書き終えたよ。英訳を手伝ってよ。お礼はするから…」

困った時はお互い様と仕方なく、論文を五分等分して期限は明日夕刻までとし、本人、修、残りの三部は修が懇意にしていた平田順郎君

と葉山荘にいる一年生の井下君、片山君に先輩の圧力で有無を言わせず押し付けた。翌日の夕方、何とか合作の酷い英文が間に合い、勝山君が待機させていた後輩のタイプ部員に手渡せたそうだった。

「ゼミの先生には日本酒を届けておくよ」と彼は澄まし顔で、修には北方市場の大衆食堂で鯨の唐揚げ定食をご馳走してくれた。勝山君は、食事代金も店主にペコペコと頭を下げてツケにしたから、修の方にも店主の曇った目付が向けられて心痛したものだだった。

## 五十五 卒業の時季

卒業試験が一段落すると追い出しコンパの日々になった。

「先輩、特高になるんですか？」と文芸部の女子にそっと訊かれた。例の山田由香里のコンパのメンバーだった。修は『特高』という言葉も知らなかった。

一戦前の特別高等警察部の刑事のことで、治安維持法により設置され、令状もなしに捜

索 で き る 強 権 も あ る 政 治 警 察 の こ と だ っ た 。

文 芸 部 関 係 の コ ン パ 、 貞 美 荘 の コ ン パ 、 以  
前 住 ん だ 葉 山 荘 の 仲 間 の コ ン パ 、 九 工 大 生 や  
西 南 女 学 院 の 文 芸 部 員 も 交 え た コ ン パ な ど 酒  
浸 り の 日 々 だ っ た が 、 村 山 信 吉 や 山 田 由 香 里  
ら の メ ン バ ー の コ ン パ か ら は 全 く オ ミ ッ ト さ  
れ た 。 卒 論 の 口 頭 試 問 が あ っ た 。 長 谷 川 先 生  
か ら 、 内 容 が 難 し く て 理 解 で き な い 部 分 が 多  
い 、 と 文 句 を 言 わ れ た が 、 何 と か 自 論 の 文 芸  
論 の 発 炎 筒 で 煙 幕 を 張 っ て 『 優 』 を せ し め た 。  
先 生 も 文 学 青 年 だ っ た か ら 、 手 加 減 も あ っ た  
の だ ろ う と 思 う 。 こ の 先 生 の 試 験 は と て も 斬  
新 的 で 難 し く 採 点 も 厳 格 だ っ た 。

一 例 え ば 、 三 十 行 の 英 文 を 掲 げ て 、 主 旨 を  
五 行 以 内 の 英 文 に 記 せ 、 と い う 問 題 で 、 勉 強  
不 足 だ っ た ら 完 全 に ア ウ ト だ っ た 。 こ の 先 生  
の 原 書 講 読 の 卒 業 試 験 で は 相 当 数 の 欠 点 者 が  
あ り 、 不 可 を 取 り 卒 業 延 期 に な っ た 者 も 相 当  
い た よ う だ 。

修 は 講 義 が す べ て 完 了 し た 三 月 上 旬 、 帰 省

は 後 回 し に し て 、 一 人 だ け の 卒 業 旅 行 を し た 。  
四 年 生 に な っ て 始 め て 味 わ え た 勝 手 気 儘 な 生  
活 へ の け じ め を つ け た か っ た 。

— 卒 業 が 近 づ く に 連 れ て 自 墮 落 な 生 活 に 拍  
車 が か か っ た 。

四 年 生 に な っ て 、 や っ と バ イ ト か ら 解 放 さ  
れ た 反 動 か ら か 、 返 っ て 遊 惰 な 学 生 生 活 を 満  
喫 し 酒 の 味 を 楽 し ん だ 。 後 輩 の 実 家 な ど を 泊  
ま り 歩 い た 。 鹿 児 島 市 内 、 種 子 島 、 長 崎 市 内  
と 歓 待 し て も ら っ た 。

— 鹿 児 島 で は 、 鹿 児 島 大 に 進 ん だ 高 校 の 同  
級 生 の 間 借 先 、 種 子 島 で は 貞 美 荘 で 親 交 の あ  
っ た 後 輩 の 牧 瀬 君 の 実 家 、 長 崎 で は 葉 山 荘 で  
相 部 屋 を し た 後 輩 の 山 中 君 の 実 家 、 そ れ ぞ れ  
宿 泊 な ど お 世 話 に な っ た 。

特 に 種 子 島 の 夕 陽 の 海 が 薔 薇 色 に 染 ま り 、  
「 ち ょ っ と 、 桜 井 さ ん 、 夕 焼 け を 御 覧 な さ  
い ！ 南 国 の 空 っ て 雄 大 で し ょ う 」 と 牧 瀬 君 の  
お 母 さ ん か ら 海 岸 に 呼 び 出 さ れ 、 見 せ て も ら  
っ た 夕 景 は 今 で も 忘 れ ら れ ない 。

「警視庁に勤めるなら、この色が良いだろう」

永井さんの勤める魚町の店で、紺の背広をあつらえた。お世話になった履物問屋に挨拶に行ったら、

「良い就職口だよ」と主人が喜んでくれた。大きな奥さんと若奥さんは出かけて不在だった。旦過市場の藤原さん、船場駐車場の赤座さん、到津の溝口将一さん宅にもお礼を述べて別れを惜しんだ。だが、永久の別れになるわけではなく悲壮感は無かった。

「警察学校では剣道を練習しろよ。咄嗟の時に身をおかわすには剣道が一番だ」と兵隊経験のある将一さんが教えてくれた。修はそれよりか、あつという間に増えた二十匹以上の猫達が、部屋中のあちこちに屯している光景に啞然とした。

有り金を使い果たして佐賀の実家に戻った。光子小母さんの容態がとうとう深刻になり入院されていた。すでに忠幸君は無事に高校に

合格しており、合格発表の日にはバケツを叩いて喜んだという。修は光子小母さんを見舞った。瓜二つの美顔の実の妹さんも嫁ぎ先の鎌倉から見舞いに来ていて、病状はかなり重篤なようだった。

一口は微かに利けたようだが、誰が何を話しかけても大きな瞳に涙を流されるだけだった。

毎日、娘の高校生の貴美子さんが来て、丁寧に白髪を抜いてお化粧を施すので、病床の光子小母さんは神々しくて綺麗な顔だった。本当に、間もなく死出の旅に出られる人には見えなかった。缶詰の葡萄をひと口だけ口に含まれ、

「美味しいかね」と小父さんの問い掛けに微かに頷かれたように見えた。戸外に出たら、春の陽はまだ高く、桜の枝の蕾がだいぶ脹らんでいた。

五十六 郷愁

その頃、修の実家は別府・鉄輪へ引っ越し

た。 齢八十を迎える卯三祖父さんが、父母に仕事を譲って隠居した。佐賀での土地・家屋測量の事業も芳しいものではなく、元来から母が羊羹屋の育ちだから、その製造方法はとっくに心得ており、父も羊羹作りへの仕事転換に異存はなかった。それに無下に断れない理由もあった。

「修ちゃんには、沢山お金をあげたからね」

春子祖母さん名義だったが、息子が四年生になってから、月々一万円の無償の仕送りを受けていた身だった。それもこの布石だったのかも知れない。いずれにしても、東京へ出て行く身には直接関係なかった。

一卯三祖父さんから、上官に仕える参考にしなさいと『明治大帝』なる古書籍と一万円の餞別をもらった。

指定の四月六日に東京・中野の警察学校に入校した。もとより覚悟のことだったが百八十度違う世界が待っていた。全寮制半年間の集団生活は歯を食いしばって頑張るしかなか

った。他県警からの委託生もいて、夕食後の自由時間が僅かな息抜きだった。籠の小鳥ほどではないが、外出もかっきりと制限され、朝六時起床、夜十時就寝、全て三度の食事から入浴まで、一糸乱れぬ集団行動が原則の厳格な規律ある生活の中へ放り込まれた。

一国旗に対するアレルギーは全くなかった。

祝祭日には父が玄関先に日章旗を掲げるのを見て育っていた。朝礼で国旗掲揚に敬礼し、夕刻五時には何処にいても、何をしていても中断して、君が代のメロディを聞きつつ国旗掲揚台の方向へ直立不動の姿勢をとった。次第に学生時代が恋しくなり、やたらに後輩に手紙を書いた。剣道の稽古の最中だった。担任の教官が呼びに来た。

「お母さん、具合悪かったのか？」

「エッ！」

修を別府駅まで見送ってくれたばかりの母の顔を思い浮かべて、心臓が破裂するような鼓動を覚えた。教官が手渡してくれた電報は

『ハハシス』と、忠幸君の差出名だった。

「ああ、これは隣りに住んでいた小母さんが亡くなった知らせです」と修はすぐに落ち着きを取り戻した。

「それなら弔電でいいよな」と教官の方も安心した顔付きになった。入校早々の忌引休暇を心配したようだ。五月に忠幸君から分厚い手紙をもらった。My Teacher & Friendへと文頭にあった。

—今朝も母のことを思い出して涙を流した、と哀切なことだった。お陰さまで国公立大学コースのエリートクラスに入れた、と高得点の採点済みの英語と数学の答案用紙をそのまま同封していた。修は寂しさを紛らわすために、暇を見つけては後輩に便りを出した。それは募る郷愁のなせる業だったろう。井下君からは、

【今、森（喫茶店）で悪い仲間とだべっている。ほんまに長谷川（助教授）が鬼に見える。それに学生の経済も考えず高い教科書を続け

ざまに何冊も買わせて独走に困っている。それに山中がこのごろ色気づきよった。片山が井筒屋に通い詰めてやっと食堂の女の子をせしめたよ。みんな先輩のせいだよ】と戯れの怨嗟の声などに続いて、【先輩のベレー帽の彼女、この前の学生大会でバンバン発言していたよ】などとあった。野川百合子との赤い糸は在学中にプツツンと切れていたのに、まだ『彼女』と誤解していた。百合子は四年生になって、重石となっていた山田由香里が卒業でいなくなり、すっかり演劇部を牛耳って我が世の天下を謳歌していることだろう。

エリア・カザンの『草原の輝き』のように、彼女とのことで、その愛が不滅に輝くはずもなかった。平田順郎君からも【長谷川（助教授）には頭がカッカする。原書講読Dで落としやがって！】と憎悪剥きだしで、長谷川先生は北九大生の實力も考えず、唯我独尊のようだった。こんな厳しい人からゼミで『優』をせしめた自分が誇らしかった。

警察学校に在学中、五日間の夏休みがあった。東京と九州間を夜行寝台列車で往復したのだから、自宅に寝泊りしたのは二日間だけだった。七月の初旬のこと、東京へと戻る特急列車『富士』が夕景の小倉を通過する時は辛かった。苅田を過ぎる辺りで一人デッキに佇んで外を眺めた。右を見れば足立山の夕影が迫って来た。左側を眺めていたら、城野の高架下を北方行のチンチン電車がノロノロと通過して行った。井下君や平田君達は今頃何をしているのだろうか、窓から見えない北方の町灯りが懐かしく臉の裏に浮かんだ。轟音を立てて列車が紫川の鉄橋を渡り小倉駅に停車した。船場町の履物問屋では夕餉の団欒中だろうか、色んな光景を思い浮かべたら、自ずと涙がこぼれて頬をつたい落ちた。

#### 五十七 国際空港勤務

秋冷の十月初め、半年間の研修を経て警察署配置となった。内示の日、空港署から貿易英語のできる人材の要望があり推挙した、と

教官から説明された。

「空港はスマートな署員ばかりだ。拳銃はカッコいいブローニングだぞ。進駐軍払下げのS Wじゃない。それに制服も空港長の指示で国際空港に相応しい、パイロットにも負けない星がキラキラついた立派なものだから頑張れよ」といつも鬼みtainな怖い形相ばかり見せていた助教も卒業の日は柔らかな顔付きだった。

— 当時貸与されたヤンキーのグローブみたいな手が使うスミス & ウエッソン社の48口径拳銃は掴みにくく腰にも重くて、日本人に不向きだった。

ブローニング32口径は、女性の護身用に開発された自動式拳銃で、皮革ケースにスッポリ隠れて威圧感のないよう配慮がされていた。制服の件は、助教一流のハッタリで大嘘だったが、空港署に配置になるまで、それを信ずるほど純情だった。それにしても、現任補修などの機会で学校に集まった時は、同期

の皆から拳銃を珍しがられて、内規違反だが盛んに拳銃を触られ操作方法の講釈をさせられた。東京空港警察署に配置になった挨拶状はオリジナルの文章を作って、九州の親類、知人、友人など思いつく限り送付した。文芸部の後輩には井下君に頼んで東にして部室に届けさせた。小林安司教授には、余りにも接触した機会が少なく遠慮して送付しなかった。

【 拝啓 光陰矢の如し、とか故郷を離れていつしか半年が経ちましたが、その後皆様お変わりなくご健勝の由、拝察致します。都会に住んで居ますと季節を明瞭に知ることが出来ないのですけど、田舎の秋、さぞ深いことと懐かしく想います… 】

いささか感傷的だが、もはや気分は憧れの都会人になっていた。井下君からの返事はくだけていて面白かった。

【 先輩、羽田国際空港とは出世したもんやね。外人と英語いっぱい喋ってやりいな。確りした職場やから、良いお嫁さんもらえて羨まし

いや … 』

そんな浮ついた気分は一切ない試練の日々が待っていた。

#### 五十八 不意の再会

昭和四十二年六月初旬のことだった。当時の東京空港署は独立庁舎でなく、空港ビルの一室にあった。突然、礼装の小林安司教授、石原外国語学部長、それに確か法学の講義を受けた覚えのある先生ら三人の来訪があった。三人とも習ったことのある先生方だったが、いささかでも親しく口を利いて私を覚えているのは、小林先生だけだろう。

「突然で悪いね。あなたがここに勤めていると、船場町の親父さんから聞いていたからね。頼みがあるよ。実は初代学長の大島直治先生の葬儀の帰りなんだ。さっきVIPルームを申し込んだら、生憎と満室で空きがなかったよ。何とかならないかね」

修はとにかく先生達が懐かしく一肌脱いだ。国際線到着ロビーにターミナル警備派出所が

あ っ た 。

一 総 勢 三 十 人 位 の 所 属 で 、 日 勤 ・ 当 番 ・ 非  
番 の シ フ ト 勤 務 を し て い た 。 そ こ を 拠 点 に 、  
パ ト カ ー の パ ト ロ ー ル 、 徒 歩 警 ら 、 見 張 所 勤  
務 に 従 事 し て い た 。 常 に 二 、 三 人 が 待 機 し 、  
奥 に 衝 立 で 仕 切 ら れ た ミ ー テ ィ ン グ ル ー ム が  
あ っ た 。

こ こ は 私 の 一 存 で ど う に で も な り 、 早 速 三  
人 の 恩 師 を 案 内 し た 。

「 あ あ 、 助 か っ た よ 。 立 派 な 部 屋 を 有 り 難  
う 」 と 石 原 学 部 長 は 話 し も そ こ そ こ に 、 先 ず  
は モ ー ニ ン グ か ら ス ー ツ に 着 替 え 始 め た 。

「 そ れ に し て も 盛 大 な 葬 儀 で し た な 」 と 小 林  
先 生 が 築 地 本 願 寺 で の 葬 祭 の 様 子 を 語 っ た 。

「 大 島 さ ん の 肩 書 き が 『 元 北 九 州 大 学 学 長 』  
で な く て 残 念 だ っ た な 。 あ れ だ け 本 学 の 創 設  
に 心 血 を 注 が れ た 方 だ っ た か ら な 」 と 石 原 先  
生 は 、 や や 不 満 顔 だ っ た 。

「 や は り 『 九 州 大 学 名 誉 教 授 』 と い う 国 家 公  
務 員 の 身 分 に す る も の で す か な 」 と 小 林 先 生

は達観した表情だった。男世帯みたいな所で湯茶の接待さえもしなかったが、先生達には小一時間寛いでもらい、飛行機の時刻も近まった頃、別棟の国内線搭乗口まで案内した。小林先生との再会の機会があるとは夢にも思わなくてなく、運命の糸とは真に玄妙なものだ。

## 五十九 結婚適齢期

二十代も半ばを過ぎたら、結婚の対象として異性を意識した。親からは時々見合相手の写真を送って来たが、なかなか気に入らず返送ばかりしていた。

一婚約者に美貌でお金持ちのお嬢さんと高い理想像を持ってても、自分の資質や現況を思えば、高嶺の花と端から諦めるしかない。

職場の知り合いから、自分の間尺に合いそうな人を紹介してもらいデートもしたが、何か物足りなくて恋愛感情も湧かず、交際は長続きしなかった。修は千駄ヶ谷の「津田英語会」に派遣され、半年間の警察英語の研修を受けて、外事・公安警察の一員になった。宿

直の時に、軍隊経験のある捜査係のベテラン  
刑事と起番が一緒だった。

「俺はドロボー刑事だけど、あんたは昔だったら特高だよ。今だって公安は天下国家を高らかに論じていれば良いのだから、気楽な稼業じゃないかね」と皮肉とも冗談ともとれる言い草だった。やはり、自分は野川百合子らが毛嫌いした特高の道に入ったのかと自覚した。修の若い日々は、東大安田講堂占拠に象徴される東大紛争、カルチェラタンと囃された神田地区封鎖紛争、日大騒動、初めて騒擾罪が適用された新宿駅騒乱事件など第二次安保闘争へと続く気の休まらない日常だった。精々酒を飲んで、独身寮の仲間らとワイワイ憂さを晴らすうちに、青春は坦々と消え去っていった。昭和四十五年は、沖縄返還闘争、日航機淀号ハイジャック事件、大阪万博に伴う連日の世界の要人の来日警備など世情は騒然として、警察官に安寧の日々はなかった。航空機事故だけでも、全日空機羽田沖墜落事

件、カナダ太平洋航空機の着陸失敗事故、その翌朝に羽田から飛び立った英国海外航空機の富士山麓墜落事件など不眠不休の忙殺の日々を体験した。

当時は『人生五十年』の呪縛が、まだ生きていた。男は三十までに、女は二十五までに身を固めよ、が世間の相場だった。三十男になる前に何としても世帯を持とうと焦慮した。

修は二十代の底が見えて来た昭和四十五年の初秋、父親から直々の電話をもらった。

「船場町の親父さんに見合相手を頼んだよ。立派な装丁の見合写真をもらっているから一度帰って来なさい」

警察はなかなか休暇の取りにくい職場だったが、独身者の特権で結婚相談が理由なら、大きな顔して休暇願いの決裁をもらいに行けた。日本国内航空社のカウンターに、米英科の同級生がいることも知って、航空券の手配は容易に面倒をみてもらえた。

母と一緒に小倉へ行った。もう知り合いの

学生達が全員巣立ってしまった北方に、郷愁の念は一切湧かなかった。鳥町の中華飯店で親父さんと会食した。履物問屋でアルバイトをした頃から、早くも七年の月日が経過していたが、眼光の鋭い主人の風貌には全く変わりがなかった。

「料理は安いもので良いよ」とこちらの財布の具合を心配してくれた。午後の時間を見計らって、川野商店の住まいを訪問した。上司から見合の心得を伝授されていた。例えその場で相手を気に入っても、物欲しそうな顔をせず、寡黙に我関せずの態度をしろ、と教えられた。修は名前を名乗ったこと、着物姿の見合相手からお茶を楚々と差し出され、有り難うございますと、丁寧に口にしたり、名前を名乗った程度しか覚えていない。

「この人は北九大を優秀な成績で出て、羽田の国際空港で通訳をしている」と親父さんの大振りな仲人口だった。修は外事課にいて頼まれたら通訳もしたし、外人の金の延棒、偽

ドル札持ち込み、旅券不携帯などの調べもしたが、空港署には専門職の通訳員がおり、面映いものを感じながら素知らぬ態度をとった。

## 六十 婚約者の涙

修の方の見合結果は「諾」で異存なかった。「嫁にくれるそうよ」と母は猫の子でももらうような口振りだった。修もようやく所帯を持つのかと感無量になった。見合から間もない仲秋の頃だった。

「修ちゃん、先方が会いたがっているよ。急いで休みをもらって帰って来なさい。飛行機代は父ちゃんが出してやるからね」と母から電話があり、真意は測りかねた。今度は父と小倉の婚約者宅を訪問した。若い二人だけで、遊びに出かけるように言われた。親同士は酒盛りの準備をしていた。

「今朝、ちよっと消えるからって言ったら、お父さんからひどく叱られました。生まれて初めてのことです。わたし、お父さんには逆らいません」

喫茶店で、あふれる涙をハンカチで押さえながら彼女は言った。上は男ばかり三兄弟、その末娘で父親からとっても可愛がられて育っていた。

— 父親の膝の上で絵本を読んで育った。父親も一人娘を手放すのは辛く、嫁に出すと仲人さんに伝えた際には涙を流されたという。

終戦後間もない頃、履物問屋の主人から、当時はとても大金の五十万円を融通してもらい、それを元手に今の「川野商店」の繁盛があり、その恩人の頼みで致し方なく娘を手放す父親の苦渋の裏面を知って、修は錯綜極まりない心境になった。

しかし一方、  
「真っ黒い顔して遊び回ってばかりじゃないのよ」と二十四の結婚適齢期の娘について、親戚筋からの煩口もあり、いつまでも家に置いておけない覚悟はあったようだ。そんな九州の風土は修の婚約に追い風となった。

その後は帆柱山に登り逢瀬を楽しんだ。結

納 の 日 は 帰 省 し な か っ た 。 民 法 の 規 定 は と も  
か く 、 結 婚 は 家 同 士 の 縁 と い う 慣 わ し で 、 両  
家 の 親 と 仲 人 の 履 物 問 屋 の 親 父 さ ん だ け で 結  
納 の 儀 式 は 挙 行 さ れ た 。 そ の 日 の 父 親 同 士 の  
会 話 は 後 で 聞 い た 。

「 娘 が 京 都 の 短 大 に 行 っ て 三 年 間 い な い 時 期  
も あ り ま し た か ら 、 い な く な っ て も 、 そ の 時  
の 思 い を す る だ け で す よ 」

「 う ち の 息 子 だ っ て 、 親 元 を 離 れ て 十 年 に な  
り ま す よ 」

娘 と 離 別 す る 父 親 の 気 持 ち と 、 息 子 と 別 居  
し て い る 父 親 の 気 持 ち は 別 も の だ と 思 う 。

一 文 通 、 長 距 離 電 話 、 中 間 の 京 都 で 逢 っ た  
り 、 小 倉 ま で 逢 い に 行 っ た り の 遠 距 離 の 付 き  
合 い を し た 。 挙 式 も 迫 る と 家 具 類 の 仕 度 で 新  
居 の 間 取 り 、 寸 法 を 測 り に 婚 約 者 が 母 親 と 一  
緒 に 上 京 し た 。 第 二 次 安 保 闘 争 は 収 束 し 、 表  
見 的 な 街 頭 デ モ な ど の 事 象 は 減 少 し た が 、 返  
っ て 、 テ ロ ・ ゲ リ ラ だ の 武 装 、 爆 弾 闘 争 へ と  
地 下 潜 行 し た 非 公 然 過 激 派 の 跳 梁 跋 扈 に 、 警

備は昼夜を問わず四苦八苦させられた。それは連合赤軍の浅間山荘事件へと続いた道で、過激派の活動の抑止・検挙のために、厳戒態勢の日々の連続だった。

そんな頃、学生時代にお世話になった到津の将一さんが殺害されるという悲惨な事件が起きた。咄嗟の際に役立つから剣道を覚えろ、と言っておきながら、自分はあっけない最後を遂げられた。

一猫好きの後妻さんの猫が増えに増えて、家中が猫だらけなので、店に元雇っていた不良従業員から金銭を強請られたそうだ。

「最中や甘納豆の中に、猫の毛が入って不衛生じゃないか。金を出さないなら、保健所に言い付けてやるからな…」

将一さんが拳骨を喰らわせたら、いきなり隠し持っていた出刃包丁で腹を滅多刺しにして逃げた。将一さんは西鉄電車の線路まで追っかけて倒れ、救急車で北方の国立病院に向かったが、途中で失血のため絶命

されたという。

「女房を頼んだぞ！」

今際の言葉だったそうだ。犯人は捕まったが、店の従業員も全員が身元を洗われ、静岡県から失踪して来ていた蒸発人間までが炙り出されたという時代だった。なお、若い後妻さんは成長した子供と折り合いが悪く、大分県の生家に去ったようだ。高校三年生になった長男から、文房具の物差で机をパシッパシッと叩きながら、

「お母さんと思っただことは一度もない。早く出て行ってくれ」と罵られたことがショックで家を出る踏ん切りが着いたと言う。

生母が近くに住んでいて、時々会っていたそうだから無理もない。もしも父親が事件で死んでいなければ、どうなっていたのか想像もつかない。

六十一 仲人依頼

昭和四十六年三月初旬、修は空港署外事課のデスクで電話交換の事務員から外線電話を

取り次がれた。

「船場町のお爺さんが亡くなったのよ」

母の沈鬱な声だった。享年八十二歳とのこと、百まで働く元気な様子で、親子二代の媒酌人をすると張り切っていて、つい先達てまで微塵も健康に異変がなかったので、心底から魂消た。親族の死亡なら文句なしの忌引休暇だが、その頃は内勤でも四部制の厳戒警備体制下であり、上司に休暇願は出し辛かった。

一通夜・本葬には父が参列した。自宅のある黒原の足立界隈が花輪の置き場もないほど埋まった盛大な葬儀だったという。

「お婆さんは意外と元気にしていたよ。小林先生に仲人を頼めないだろうか？」と父の相談だった。一年生の時に漢文学の講義を受けただけでは、恩師と呼ぶのに引け目を覚えた。

一数年前にVIPルーム代わりに警備派出所の会議室貸与の便宜をした程度のこと、仲人を頼めるものか真剣に悩んだ。もし先生

の永年の知己だった履物問屋の主人の未亡人を介してなら、不自然でもないかと思った。五月になって、結婚相談を理由に休暇を取った。修は婚約者と一緒に足立の未亡人邸を訪ねた。青々と風が庭の樹間を音立てて渡って行った。緑陰の枝から野鳥が峰に向かって飛翔した。

「うちが媒酌人をする予定だったから、その代わりは小林先生が一番良いですよ」と大きな奥さんも口添えを引き受けてくれた。日程を調整するなど、小林先生宅を訪問する段取りは済ませていた。長年の連れ合いを亡くした落胆の様子も見せず、大きな奥さんは陽気に振る舞って、修と婚約者を迎えてくれた。七十八歳には見えない矍鑠とした着物姿で、足立山の麓の妙見様の道をタクシーで大谷口の先生宅へと向かった。家は新緑の光溢れる山を背に瀟洒な佇まいだった。書齋を兼ねた応接間の窓から庭の青葉が目沁みた。型どおりのお悔やみの言葉の後に、

「僕は以前、見覚えのない教え子から仲人を頼まれてね。その時は断ったよ」との先生の一言は、修の心臓にぐさりと突き刺さった。

「こちらはどちらのお嬢さんですか？」と先生が婚約者の顔をまじまじと見た。

「船場町の川野商店ですよ。折箱製造で大繁盛していますよ」と未亡人が紹介した。

「ああ、川野さんね。僕も船場町に縁があつてね、生まれた家は江戸時代からの造り酒屋でしたよ」と漸く先生の表情が和んだ。修の緊張していた全身の筋肉が少しほぐれて救われた心地になった。

— 今のご時世なら仲人なしの挙式も珍しくないが、当時そんなことをしたら、さぞや変人扱いされたことだろう。

小倉を離れる前、気紛れに船場駐車場に顔を出した。赤座さんが一人勤務していた。

「俺の相棒が次々と変わってね。困ったもんだよ。本店の親父さんは、だいぶ具合悪かったね。亡くなる前もここに見回りに来てね。

便所を使おうとして段々を登れなくてね。腰を押してくれと頼まれて、やっと便所に入れてやったよ。すっかり糖尿病が悪くなっていたね」と主人の終末の様子を語ってくれた。

## 六十二 真夏の師走

小倉城の上に秋天高く一片の雲もなかった。その秋、小林安司教授ご夫妻を媒酌人に八坂神社で華燭の典をあげ、塚町の料亭『呉羽』で披露宴をした。若奥さんは四十の女盛りで、高らかにアカペラで『歓喜の歌』を熱唱して祝ってくれた。従妹の佐智子も北九大に在学中で列席してくれた。

警察人生は多忙を極めたので、互いの里帰り以外は、旅行は関東甲信越辺りまでが限界だった。夫婦で観光地を旅したら、必ず旅先から小林先生に絵葉書を送った。八ヶ岳、美ヶ原、日光、小諸、白馬など年々歳々きりがないが、関東一円の地だったら、先生も東京帝大の学生時代に旅しており、その都度懐かしそうなお返書を頂いた。

昭和四十八年夏、修の父が東京見物に来て  
いる最中、肝硬変の発作であつ気なく客死し  
た。その翌年は家内の母が持病の肝臓病で亡  
くなつた。だから、その頃の休暇は観光や保  
養どころでなく、法要で九州へ帰つた。小林  
先生は創設の『北九州市立中央図書館』初代  
館長に就任の人事で、昭和四十九年の夏に、  
図書館司書の講習を受けられた。別府大学が  
講習会場で、通うのに地理的に便利な鉄輪の  
旅館に滞在されていた。修夫婦は、父の一回  
忌で鉄輪に帰つた。

「小林先生が泊まっていらっしゃるから、ビ  
ールを差し入れておいたよ」と母に言われて、  
その旅館を訪ねた。何と、そこは殺人鬼西口  
彰の元実家だつた。佐木隆三先生の小説や映  
画の『復讐するは我にあり』で余りにも名が  
知れていた。連続殺人鬼で日本各地に神出鬼  
没し、短期間に連続五人を殺害して世間を震  
撼させた男だつた。もちろん家族は居抜で旅  
館を売却し、とっくに別府市内へ隠棲してい

た。

「若い人と机を並べ勉強できて楽しいよ」と  
すでに浴衣に着替えられ寛いでおられた。  
温厚篤実な先生の人柄は館員から慕われたと  
思う。

昭和五十五年春、修は足かけ二年の小笠原  
島赴任を終えて警視庁へ戻った。その年の夏  
季休暇で小倉の家内の実家に顔を出した。小  
林先生からは、是非一度職場に遊びに来なさい  
、と誘われていて、家内と一緒に中央図書  
館長室を訪れた。立秋とは名のみ、炎帝が  
高々と勝山の上空に君臨し、地面をジリジリ  
と焦がしていた。受付に出たむくつけき中年  
職員は、いきなり館長に面会を申し出たラフ  
な姿の若造に不快さを顕わにし、面会の約束  
はあるか、などと質されている最中、気配を  
察した小林先生が部屋から出て、  
「やあ、早くこっちにいらっしやい」と笑顔  
で招き入れられた。小笠原島勤務でご無沙汰  
した久闊を叙しているうちに昼休みになった。

昼食をご一緒する段になって、ちょうど館長宛の電話が入り、先に市庁舎のレストランのフロアで待つように言われた。

高層の窓には夏雲が広がっていた。その時、脱兎の勢いでエレベーターホールから食堂入口の廊下の方へ走りこむベージュ色のスーツが一瞬目に入った。

「今のは先生じゃなかったのかしら？」

「そんな、まさか！」

先生の年齢を思い、俄かには信じ難いダッシュだった。先生は古希も近い身だった。とりあえず追いかけて見たら、涼しい顔をした先生がレストラン入口に立っていた。真夏の師走、まだ若かった二人に合わせて、焼肉定食を口にされる健啖振りだった。

六十三 君子蘭

清廉高潔な小林先生には、手土産で苦労した。まだ婚約中の事、ご挨拶に伺うと便りしたら、お土産など遠慮しましょうか、との返事が末尾にあった。

一折角東京から遙々行くのに、手ぶらで訪問することをしてとも出来ず迷いに迷った。結局、終生そうだったが菓子折りを持参しても、いつも奥様が自宅前のバス停からそっと外出され、井筒屋か湖月堂の菓子折りを買って戻りお返しをされた。昭和五十七年、先生が『勲三等旭日章』を叙勲された際に、八丈島産の君子蘭の苗をお祝いに贈ったのだけは喜ばれた。添書きを付した。

一君子の先生に一番良く似合う花です。

「君子」とは知識のみならず、徳をも兼備した人のことだと習った。漢文学の泰斗の小林先生に君子の称号が一番似合うと考えた。修は生意気な祝福の手紙を書いた。

【万物の霊長人間と言えども、脳の芯には類人猿時代からの闘争本能が宿っています。ゆえに、人類史は物欲・領土拡大欲・支配欲など、血で血を洗う闘争の繰り返しでした。その歴史の過程で科学も医学も進歩を遂げました。甚だ残念なことながら、この世界から一

切の争いをなくせば、人類の進化も止まり、ヒトの種も徐々に劣化するのではないでしょうか…。戦争の悲惨さや平和の尊さは十分に理解していますが、天敵のいない生物はすべて繁殖力を劣化させ病原菌で絶滅しました。人間が本能の物質的欲望を失くせば、同じ結果を招くのではないのでしょうか…】

先生からのご返事には、【皇居の宮殿に向かうバスの窓から、貴君の勤務する宏壮な建物が見えた。手紙の主張には同感することもある】とあった。修は新装なった警視庁本庁舎に勤務の日々だった。翌年の五月に、君子蘭が咲いた、と写真同封の便りを頂いた。オレンジ色の見事な花を着けていた。それから毎年、五月になると君子蘭は咲いた。株分けで鉢が年毎に増えて小林邸の前庭を彩った。花の脇で大きな猫が寝そべっていた。

平成五年、修は大手ビルメン会社の保安警備研修の責任者だった。民間会社で一番気楽に感じたのは旅行の自由だった。役所にいた

時のように、煩わしい手続きは一切不要だった。それから毎年のように大谷口の小林先生宅を訪ねた。八十代になっても先生は矍鑠としておられ、森鷗外や松本清張の文学の話しで盛り上がり、先生の話が熱弁になってまるまる午後を歓談して過ごしたこともあった。

「この前、スイスのアルプスの村に旅をして来たよ。まだ行きたい所があるけど、この頃は膝が痛くて残念だね。家内はまだ元気で、何処かへ行きたがっているけどね」と傍らの奥さんを気遣われた。さすがの健勝な先生にも、いささか老いの蔭りが忍び寄っていたのを覚えた。

#### 六十四 聖人と人間

平成八年五月、修は熊本へ出張の途次、小倉で降りて小林先生を訪ねた。先生は八十五歳になっていたが、松本清張記念館運営委員長も引き受けて頗るお元気だった。早速、先年に北九大文芸部の後輩の兵頭世紀君が実兄と共同研究し表した文豪森鷗外の隠し子につ

いての印刷物のことを話の種に出した。

小林先生は以前から『北九州森鷗外記念会』会長だった。露骨に不機嫌な表情を浮かべられた。

「その件で朝日新聞の記者から照会の電話があったよ。鷗外は日本の歴史上の偉人でね、近世小倉の文化にとっても大恩人なんだよ。松本清張が世に出られたのも鷗外の『小倉日記』があってこそこのことだろう。女中との房事の真偽はともかく、今更、小倉に所縁の鷗外のスキャンダルを暴いて公表し何の価値があるのかね。僕はそんな風に返事しておいたよ」

兵頭兄弟の研究成果がマスコミの紙面に掲載されることはなかった。『小倉の鷗外に隠し子がいた！』とか『文豪鷗外と女中が不倫！』など、そんな見出しが新聞紙面に躍ることはなかった。兵頭世紀君は文芸部の後輩だが、その後互いに音信もしないで、五十過ぎの頃に小倉で旧文芸部員メンバー数人の集

いがあった折に一度だけ再会したと思う。その時には未だ鷗外遺児の研究のことは、言葉の端にもなかつた。ある日、彼から郵便が来て、その冊子を購入した。もし彼ら兄弟の研究成果が、鷗外に係わる新発見として全国紙に掲載されていたら、かなりの反響があつて、兵頭君らが鷗外研究者として名を売るチャンスであつたかも知れない。鷗外の隠し子と同様に、研究成果も闇から闇に葬られたのか。森鷗外といえども聖人君子ではなく、

「やっぱり鷗外さんだつて生身の人間じゃないかね」とおのれと重ね合わせ、凡夫の来し方を納得させたい思いもあつた。もちろんその時、小林先生の面前で一切反論などしてない。先生の鷗外を語る熱き思いに、ひたすら耳を傾けていた。文豪鷗外の醜聞を世間に広めても俗悪趣味でしかない。まだ五十代半ばと若かつた修は、先生に賛意して頷くだけだつた。翌日、高速バスで熊本入りすれば間に合う余裕のある旅程だつたから、先生の熱

弁もあって夕刻まで長居してしまった。お暇する段になって、やっと君子蘭の花盛りだったことに気がついた。

## 六十五 永久の別離

小林安司先生と本当の交誼が始まったのは結婚式の仲人からだった。先生が還暦、桜井修が二十九歳、家内が二十四歳だった。先生の警咳に接した最後は、平成十三年の春の彼岸の日の午後だった。家内と連れ立ってお邪魔した。その前に『松本清張記念館』の招待券を同封したお便りを頂いていた。それには小倉の近況が綴られていた。【駅前「そごう」閉店など小倉の不景気、その一方「井筒屋」横の紫川辺りの面目一新、対岸の小倉城方面も開発がすすみ、大幅な変貌が見えました】

「僕は九十を過ぎましたよ」と先生が柔和な表情だった。

「近頃耳が遠いのですよ。補聴器も嫌がってつけないのですよ」と奥様は困惑顔だった。

確かにもう奥様の声を介さないで、会話もままならぬほど難聴になられていた。先生の書齋兼応接間は昔ながらの汗牛充棟、夥しい漢書などに囲まれていた。

「本をあげたいけど、荷物になって重たいだろうな」と先生の目元が優しかった。その言葉に夕に長居してはお疲れだろう、と引き揚げた。その年の四月九日に分厚い手紙を頂いた。【梅が今年も長持ちしてうれしいことですね。私は四月五日に新しい『北九州市立大学』の入学式に参列、すばらしい発展の活力を示し…（略）】ひびきのキャンパスに関する読売新聞やサンデー毎日の記事の切り抜き、それに「宣誓する上田愛子さん」のキャプションの入学式の様子、新聞写真の切り抜きがぎっしり詰まっていた。草創期から教鞭をとった母校の大躍進に甚（いた）く感動されたご様子の文面だった。

平成十四年五月十一日、先生は九十一歳を一期として永の眠りに入られた。訃報に接し

た日、青葉の候の横浜は信じられないほどこ  
よない青空だった。英国の詩人ロバート・ブ  
ラウニングの有名な一節が思わず口をついた。

神、そらに知ろしめす

なべて世は事も無し（上田敏訳）

先生がこの世から消えてしまい、自分はこ  
んなに胸を疼（いた）めているのに、どうし  
て空も世の中もこんなに美しく静かなのだ。  
気を取り直して未亡人宛につらつらと先生の  
思い出を綴ったら、結構な長文の手紙になっ  
た。梅雨の時季になってお返事を頂いた。

【（略）】去年の何時頃でしたかしら。お二人  
でお見えになり、其の時は主人も元気で楽し  
そうにお話を致しましたのに。皆さんが尋ね  
て来られるのを何時も楽しみにしてましたの  
に。普段から風邪も引きませんでしたのに、  
ほんとに残念です。今にも只今と云って帰っ  
て来そうです。頂いたお手紙には昔からの事  
を詳しく書いて頂いて、読んでいる中に涙が  
こぼれました。主人にも読んで頂きましょう

と 思 っ て お 供 え し ま し た 。 ( 略 ) 】

修の頬にも涙がつつた。いかな人の命も、なべて、たそがれるものではあるが、いきなり急性肺炎という形で昇天し消えて行かれた。今際のきわに先生の胸を去来したのは何ものだったろうか。

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ（神よ、神よ、どうして私をお見捨てになったのですか）」のキリストの言葉だったろうか。庭前に咲く、かの君子蘭の花々の姿だったろうか。君子蘭の花咲く時季に、君子小林安司先生はみまかれた。

エピローグ

青嵐の足立山、秋風の帆柱山、青き紫川の流れ、西鉄電車の走る魚町の繁華街、春夏秋冬の北方の学び舎、記憶を辿れば思い出が逆流して来た。徒然に回想した小倉の情景、不思議なる縁の糸に操られるまま、マリオネットのように生誕地の船場町へ回帰した。殊更、裸一貫、佐賀の郷関を出て船場町で大財を成

した母方の祖父永松卯三、父母の仲人だった履物問屋の主人、北九大で漢文学を学んだ小林安司先生、この三名の人士から有形無形の影響力を受けたことは無視できない。三人共、自他共に認める功なり名を遂げた人物だった。それに引きかえ己は、その日その日の出来心で半生を歩んでしまった、氷心玉壺に疎い凡夫の哀しみを悔やんでいる。

本文を補足する。卯三祖父さんは、昭和五十五年に九十四歳の天寿を全うした。

「ああ、ウナギの味がする」と前の晩に所望したウナギの蒲焼を食べて、明け方、枯木が朽ちるように大往生をした。春子祖母さんは、八十を過ぎた頃から視力が徐々に衰え、

「修ちゃん、目が霞むのよ。もう一度だけ顔をよく見せておくれ」と顔を近づけられた。とうとう失明されて、生きるのが辛いと長嘆息されたが、周辺の者は、

「それは長生きするからだよ」とにべもなかった。後妻で子供達と血の繋がりが無い悲哀

だった。何年も施設のベッドに寝たきりのまま、平成十一年、満百歳をもって亡き祖父の待つ彼岸へと旅立たれた。船場町にいた大きな奥さんは、主人没後もずっとお元気だったが、散歩中に足を骨折されて寝込み衰弱され、昭和六十二年に九十四歳をもって逝去された。若奥さんは健在で、今は日本赤十字社小倉地区理事として活動されている。

今は昔の船場町の葦の波が瞼の裏に浮かぶ。変わらぬ姿は大黒神社。もはや、柏野商店、明治屋、小畑質店、履物問屋、ホンダバイク修理店、岩田印刷屋、印鑑屋、福田ウドン屋、船場駐車場、郵便局、天理教会、わたや旅館、神岳川沿いの櫻羊羹屋、往時の家屋の大方が消えて無くなった。

家内の実家の川野商店は、瀟洒なテナントビルに建て替わり、一階にパッケージ店「カワノ」を営んでいる。かつて蟹が家の中まで這い上がって来たという紫川の岸辺も、花と緑の豊かな遊歩道になった。長い歳月が流れ

た が 、 お の が 来 し 方 は こ れ で 良 か っ た の か 否  
か 、 こ れ に 対 す る 答 え は 持 ち 合 わ せ て い な い 。  
た だ 北 九 大 に 入 学 し て 以 来 、 も は や 半 世 紀 の  
光 陰 が 過 ぎ て 去 っ た 現 実 に 慄 然 と す る 。 終